廳て他の議官連と共にプン〳〵憤つて會議室へと退席した。

其時廷吏は再び來てファナーリンに向ひ、『貴下方の御關係の事件は？』

『既う御話し仕たぢやアないか。マースロワの一件サ。』

『爾うでしたナ。成程。夫なら今日開かれる筈ですが、併し――』

『併し何だ？』と辯護士は訊いた。

『議官方は事に由ると今日其訴訟を開く御意がないから、只今の事件の言渡しが濟むとお歸りになるかも知れない。何しろ爾う申しておきませう。』

『何だと？』

『兎に角話して置きませう。』と云ひつゝ廷吏は復た紙へ何だか認めた。

議官連は會議室で誹毀事件の決定を議してからマースロワの一件初め其他の要件を、茶を飲んだり紙巻を吸つたりしながら相談する意であつた。

第二十一回

議官連が會議室の卓子を圍んで着席するや否、ウォルフは非常な勢で此事件を再審に附すべき理由を滔々と陳べ立てた。

裁判長のニキーチンは元來が性質の善くない處へ、此日は取別けて捻くれてゐた。實はウグラーノフといふ同僚が先任の自分を飛越して、豫て長い間覬ひを付けてゐた位置に昇つたのが癪に觸つて、肝癪紛れに昨日の日記に書擲つた大氣焔を夢中になつて繰返して、ウォルフの議論なぞは頭から耳に入らなかつた。

ニキーチンは極正直な處、職務上關係ある最高二階級の上官に對する自分の月旦は他日の歴史家に價値ある材料を與ふるに足ると己惚れてゐた。其了簡でニキーチンは、是等の上官輩は斯くいふニキーチンが滔々たる俗吏に危ふされんとする現下の頽勢を救はんとするを妨ぐる責任を負はざるべからずと大袈裟に日記に書立てたが、其實は斯くいふニキーチンの月給が殖える邪魔をしたといふ意味に過ぎんのだ。が、頗る大得意で、他日歴史家は此日記に由て歴史の上に新光明を得るだらうと考へてゐた。

『爾うとも、無論、』とニキーチンは答へたが、實はウォルフの意見を碌すつぼ聞かずに唯調子を合はしたのだ。

ベイは困つた顔をしてウォルフの說を聞きながら花環の畫を紙に描いてゐた。

此男は生一本の自由主義で、六十年時代に流行した自由說を尊奉してゐたから、公平を外れた時は先づ自由主義に傾き勝である。丁度事件が事件だし、此詐欺社長は全くの惡漢であるし、且又新聞發行人を誹毀罪に問ふは言論の自由を束縛する所以だから、自づと控訴を破毀する方に傾いた。

で、ウォルフが辯論を終ると共にベイは花環を描く手を休めて溫和かな情なさうな聲で、(全くベイは這般な解り切つた理窟を餘儀なく說明しなければならぬのを情なく思つた、)極めて簡單に明白に、但し斷々乎として控訴人は何等の理由を有せずと一喝しつ、眞白な頭を傾けて再び花環を描き始めた。

ウォルフと對ひ合つてるスコウォロードニコフは太い指で口鬚や頤髯を口に捻り込んで前齒で嚙んでゐたが、ベイの言葉が終ると共に凜々しした高い聲で、此會社長が如何なる惡人にしろ再審すべき法律上の根據があれば左に右く何等の根

據なき以上はベイの說通り棄却に左擔すると主張し、小氣味よくウォルフの說を骨灰微塵に打破した。

裁判長は此說に贊成し、控訴は棄却に卽決された。

ウォルフは大不服であつた。殊に不正の肩を持つたやうに取られたので頗る面白くなかつた。が、故と白ばくれて一向平氣に冷まし込んで、マースロワ事件の關係書類を廣げて餘念なかつた。

其時議官連中は鈴を鳴らして茶を命じ、決鬪事件と共にペテルブルグの大評判となつた一件を話し始めた。之は刑法第九百九十五條に規定された罪を犯した或る官省の局長の一件であつた。

『實に鼻持もならぬノウ、』とベイは苦々しげに云つた。

『何故惡い？　獨逸の學者の說を書いた露西亞人の著述を君に見せやうか。其中には這般な事は罪にならぬばかりか、男が男と婚禮するのを許しても可いやうに書いてある。』とスコウォロードニコフは焰え盡くして指の股から掌に屆きさうな葉卷をスパスパと燻かしながら哄然と笑つた。

『其樣な途徹もない！』

『それぢやア君に見せやう、』とスコウォロードニコフは精しい書名から出版年月、出版元までを擧げた。

『時に其色男は西伯利亞の或る縣知事に左遷されたさうだノ。』

『そいつは宜からう。坊主が十字架を持つてお出迎に來るだらう。が、同じくは渠奴と意氣相投ずる同臭味の坊主を出したいもんだが、我輩が一人世話をしてやらうかナ、』とスコウォロードニコフは焰殘りの紙莨を皿に投げ込んで復た將を口に捻り込んでは前齒で嚙み始めた。

其時廷吏は會議室に來て、マースロワの控訴裁判にネフリユードフと辯護士とが出席したいと云ふ請求を通じた。

『此事件は實に小說的だ、』とウォルフはネフリユードフとマースロワとの關係に就て知つてるだけを一同に話した。で、各議官は此件に就て些とばかり談合してから茶と烟草をお終ひにして再び出廷し、先づ誹毀事件の判決を申渡して後、マースロワの事件に取掛つた。

ウォルフは甲走つた聲で詳しくマースロワの控訴理由を報告し、勿論多少の偏見が無いではないが、原判決を破棄すべき明白な希望を十分に陳べ立てた。

『何か陳述する事がありますか、』と裁判長は辯護士に向つて云つた。

ファナーリンは突と起立し、幅の廣い胸を突出しつゝ、人の心に浸徹るやうな不思議に力のある辯舌で、刑事法廷が法の適用を誤つた六ケ條を一々精密に秩序を立てゝ證明し、且簡單ながら原裁判の効力から判決の不當極まつてる事に追及し、且、職務上委托されたる義務を濟ますが爲に己れよりは數倍勝れたる明敏なる洞察力及び法律智識を有する各議官閣下に對して餘儀なく饒舌せねばならぬといふ謝辭を簡潔な力のある辯で陳謝して議論を結んだ。

ファナーリンの辯論を聞いた者は、誰しも元老院が前裁判の判決を破棄するに就て何等の疑を留めないと思つたであらう。が、ファナーリンが辯論を終つて勝誇つたる微笑を含みつ四邊を見廻した時はチフリユードフも確かに訴訟が勝つたものと安心するやうな氣がしたが、各議官や檢事は笑ひもせず得意にもならず、宛も飽き〳〵したといふ躰で、『そんな理窟は何度も聞飽きてるが、無益だ

よ、』と云はぬばかりで、漸つと辯護士が無駄口を叩くのを止めたのを滿足するやうに一向無頓着に冷まし込んでゐた。

辯護士の辯論が終るや否、裁判長は檢事の方を見ると、セレーニンは控訴の理由は惣て薄弱なるが故に原裁判の判決を動かすを得ずと極簡單に明白に陳べた。

之が濟むと各議官は會議室に退席したが、其說は二派に別れて、ウォルフは再審に附する說を立て、ベイも亦事件の眞相を洞見して、前裁判所の法廷の模樣を目に見るやうに裁判長の疎忽や陪審員の失策を綿密に述べてウォルフの說に贊成した。裁判長のニキーチンは何時でも敵役で少しも假借しない方だから反對側に立つた。殘る處はスコウォロードニコフの意見次第であるが、此男はネフリユードフが道德上の理由から墮落女と婚禮しやうといふ決心が甚だ氣に喰はなかつた故に控訴を棄却する方に左擔した。

スコウォロードニコフはダーウキン主義の唯物論者で、總ての道德の發現は魯か、甚しきは宗教までを頗る愚劣なものと賤み、這般な事に口出しするは恥辱

だと思つてゐた。夫故に堂々たる元老院に於て有名なる辯護士或はネフリユードフ公爵ともあらうものが一賣淫婦の身上に就てワイ〳〵騷ぎ立てるのを片腹痛く思ひ、髯の尖を前齒で嚙みながら故意と何事も知らないやうな風して、唯控訴の理由が不十分であるから、原裁判の判決を動かす事は出來ぬとばかり主張して裁判長の意見に贊成した。

斯の如くにして控訴は不成立に終つた。

第二十二回

『恐るべき哉』とネフリユードフは書類夾の書類を整理しつゝある辯護士と共に待合室へ行かうとして、『此位明白な事件を杓子定規で棄却して了うてのは、實に恐るべしだ。』

『抑〳〵刑事裁判所からして瑕瑾をつけられたのだ』と辯護士は云つた。

『セレーニンまでが矢張棄却説を執るつてのは、實に恐るべし、恐るべし、』とネフリユードフは繰返しつ、『さて如何したもんだらう？』

『皇帝陛下へ請願なさい。爰に在る間に貴下から直接に請願局へ出すのですナ。我輩が草案を作りませう。』

此時、小作りのウォルフは星章を附けた制服で待合室へ來て、ツカ〳〵とネフリユードフの傍へ進んで、『誠にお氣の毒でしたが、如何も致し方がムらぬ、控訴の理由が餘り薄弱だからノウ、』と云ひつゝ狹い肩を搖ツて眼を閉ぢつ、聽いて去つて了つた。

其跡からセレーニンが舊友のネフリユードフが來てゐると聞いて出て來て、

『爰で君に會はうとは思はなかつた。』と哀れッぽい眼をして、唇邊にだけ微笑を含みつネフリユードフの傍へ來て、『君がペテルブルグに來てゐるとは知らなかつた。』

『拙者も君が檢事になつてるとは知らなかつた。』

『檢事ぢやない、副檢事だよ』とセレーニンは友の言葉を直しつ、『だが、君が元老院に來るつてのは什麼いふわけで？　ペテルブルグに來てゐるッて噂は仄と聞いたが、何しに爰へ來たんだネ？』

『爰へかね？　罪がなくて不當な宣告を受けた女を助けてやりたくて、正當な裁判を受けに來たのだ。』

『何て云ふ女だ？』

『今、判決の定つた女さ。』

『あッ、あのマースロワの一件か、』とセレーニンは喫驚して、『だが君、あれなら控訴の理由はないぜ。』

『控訴の理由も絲瓜も無い、左に右く何の罪も無くて刑を宣告されたのだ。』

セレーニンは嘆息しつゝ、『夫は爾うかも知れんが、併し――』

『爾うかも知れん事はない。爾うに違ひないのだ。』

『君は又奈何して巨細を知つてをる？』

『拙者は陪審員だつたから、陪審員が手落をしたのを能く知つてをる。』

セレーニンは頻りに思案しつゝ、『其時君は定めし抗告したらうナ？』

『抗告した。』

『そんなら公判錄に載つてる筈だ。此事が控訴狀に書加へられてゐたなら――』

『爾うしたら宜かつたかも知れんが、決定書夫自身が既に愚を極めてる。』

『だけども元老院は其樣な事まで追及する權利を有つてゐない。若し元老院が陪審員の決定書夫れ自身までを審議して原裁判の判決を破毀したなら、陪審員の決定書は無意味になつて了つて、正義を維持するどころか却て蹂躙するやうになる。』

『其樣な理窟は拙者は知らんが、全く何にも罪を犯さない者が不當な宣告を受け、シカモ之を救ふ最後の綱が切れて了つたのだ。』

『尙だ必ず確定した譯でもなからう。元老院は總て前判決の基礎たる決定書の効力に追及しないし、又追及する事が出來ないのである。』とセレーニンは眼瞬きしながら云つた。

此男は常から職務が忙しくて餘り世間に顏出しをしないから、ネフリユードフの小說咄を一向知らないらしいので、却て何にも咄さないのが上分別だと心中に思つた。

『時に君は多分叔母さんの處に在るのだらうね？』とセレーニンは話頭を轉じやうとして、『昨日君の叔母さんから君が來てゐると聞いて、昨夜は難有いお說敎があるから旁々君に會ひに來いと案內を受けた。』と再び唇邊にだけ微笑を浮べた。

『拙者もお說敎を聞かされたが、イヤハヤ堪らなく嫌な心持がした。』

『奈何して嫌な心持がした？　凝り固まりのお宗旨かも知れんが、左に右く矢張宗敎心の發現には違ひない。』

『宗敎心か何か知らんが、實に愚極つたものだ。』

『爾うでないテ。我輩は却て此露國に生れながら我々正教會の教義に暗くて根本の信條をさへ何か新らしい天啓でも聞くやうな氣がしてゐる人達を奇怪千萬に思つてる、』とセレーニンは己れの宗教に對する見解を故友に知らせやうと早るが如くに云つた。

ネフリユードフは訝かしげに凝焉とセレーニンを見ると、セレーニンは伏目になつてゐたが、其眼には愛、悲しさうなばかりでなく、不快の色さへ見えてゐた。

『夫ぢやア君は正教會の信條を奉じてるのかネ、』とネフリユードフが尋ねると、『無論、奉じてる、』とセレーニンは艶の抜けた眼で凝乎と見ながら答へた。

ネフリユードフは嘆息しつゝ、『夫は妙だ、』と云つたぎり口を緘んで了つた。

『だが、其内に緩乎と話しをしやう、』とセレーニンは云掛けた時、廷吏が恭しく其傍へ來たので、

『今、行く、』と云ひつゝ、再びネフリユードフに向つて、『其内是非最う一度會はう。だが、君は家に在るかネ。僕は七時の飯時には必ず在る。處はナデーヅディ

ンスカヤだ、』と番地を示しつゝ、『あれ以來種々な事があつたから、話したい事が山ほどある、』と復た唇邊に微笑を含みつ行かうとした。

『行かれたら行かう、』とネフリユードフは氣の乗らぬ調子で云つた。が、昔しは一番親昵の親友であつた男が、今では縱令敵でなくとも赤の他人の遠い遠い氣心の解らぬものとなつて了つたのが、此短い立咄しで十分解つたやうな氣がした。

第二十三回

ネフリユードフが能く知つてる書生時代のセレーニンは溫和しい息子で、實意のある朋友で、齡に較はしては學問のある世才に長けた風采の立派な正直な親切氣のある好人物であつた。除り勉强もしなかつたが物覺えが能くて、何度も論文で金牌を貰つたが、更に學問を鼻に掛けるやうな事はなかつた。で、口頭ばかりでなく眞實人間の道を盡すのを若い時分からの目的とし、此目的を果さうてには官吏となるより他に道がないものと思ひ、學校を卒業するや否、各方面の吏務に一と通り服して、萬遍なく經驗してから後、己れの手腕を働かすには法律を制定發布する高等法院の第二部に入るが一番だと思つて奉職した。が、就職して見ると、到つて細かな面倒臭い手の込んだ仕事がごたくさ有るに係らず、一番技倆を見せやうてには何だか物足りないで、心から立派な仕事と思ふ氣になれなかつた。

で、下らぬ事にコセ〳〵して空威張する上官と接する度毎に益々不平が募つて來たから、到頭逃出して元老院に轉じた。然るに高等法院よりは少しは勝し

だといふばかりで、同じ不平は矢張附いて廻つたから、世の中の事は豫て望んでゐたり又必ず斯うなければならぬと信じてゐたりしたとは全で見當が違つたやうな氣がした。

元老院在職中、親戚の世話で侍從職の位置に有附き、金モールの大禮服で世話になつた人達の家を禮廻りに馬車で乘廻して頗る得意であつたが、扨て熟々と考へれば、斯ういふ官職が必要である所以が如何しても解らず、元老院に勤めるよりは更に一層下らなく、到底立派な仕事と思はれなかつた。が、今更辭職も出來ぬといふは、折角自分を喜ばせやうと思つて世話して呉れた人達の好意に對して濟まぬ上に、一つは自分の劣等な根性から若干か滿足し、鏡に對つて金モールの禮服姿を映して見たり、役向に對して人からチヤホヤお辭儀をされたりするのが何となく嬉しくて堪らなかつたのだ。

婚禮した時にも矢張之と似たやうな事があつた。世間並の眼から見れば此上もない立派な緣組を申込まれたのであるが、直ぐ二ッ返事で承諾した重なる理由は、若し拒絶つたなら折角乘氣になつてる當の本人を失望させ、且つ橋渡し

仕て呉れた人達の好意を無にして腹を立たせやしまいかといふ遠慮である。尤も夫ばかりでなく、氏も素性も正しい門閥の美くしい娘と婚禮するのが自分の虚榮心に投じて嬉しかつたからである。が、婚禮して了うと間もなく、斯ういふ婚禮をしたのは元老院や、官内省の役人をしてるよりも愈々益々下らない餘り立派な咄でないと氣が附いた。

總領の子を設けてからは嫁御寮は最う子を産まないと決めて了つて、華美な當世向きの生活を仕始めたから、良人たる身は忌應なく此お相伴をしなければならなかつた。

實の處、此細君は格別目に立つ美貌ではなかつたが、併し良人には眞實であつた。が、精一杯に當世風の生活をしても、矢張面白くなくて唯クサ〳〵するばかりだつたが、夫でも飽きずに奈何がなして面白笑止しく暮さうと骨を折り、斯ういふ生活方が良人の生命を縮める毒にならうとは一向知らなかつた。セレーニンはセレーニンで、時偶は細君好みの生活を變へやうとした事もあつたが、朋友親戚を後楯にする『世の中は斯うしたものだ、斯うあるべき筈だ』といふ

細君の生悟りに對しては玉子を石垣に打付けたやうに微塵に粉碎されて了つた。

二人の間に生れた小さな女の兒は可愛い足をヌウッと出し、房々した黄金色の髪を長く垂れて縮らしてゐたが、セレーニンは這般な風に育てたくなかつたのだから、全で他人の子を見るやうな氣がした。斯ういふ鹽梅しきだから夫婦の間には何時となく垣を作つて世間に珍らしからぬ誤解を生じ、表面を奇麗に塗蔽してゐたが、他所目には解らぬ無言の喧嘩を徐々始めた。セレーニンの家庭生活は夫から以來お荷物になつて餘り面白くも思はぬ務め向きや身分よりも猶一層厄介な飛んでもないものになつて了つた。

が、何よりも一番怪しからぬはセレーニンの宗教に對する態度であつた。當時の青年は誰でも理窟が少し解つて來れば各自が育てられた宗教の迷信の枷を容易く破して了うが常で、セレーニンも矢張他の者と同樣に何時とはなしに自由思想を抱くやうになり、ネフリユードフと交際した學生時代には人間が正直で眞直だつたから、國教廢止を欲する己れの希望を眞向に振翳して少しも秘さなかつた。が、年を經て役人となつてからは、若い時分の一本調子では通らず、

殊に保守的反動の盛んなる社會では自由思想が出世の邪魔になつた。一家の中でも、例へば父が死んで法事を營むとか、母が世間を楯に精進を強に守らさせるとか云ふ事がある。其樣な私事は別としても、政府の役人となつてると、種種のお難有い儀式に參列しなければならぬ。恐らく唯の一日だつて全きし宗教儀式をしなくて濟ます事は決して無いのだ。であるから此の間に處するには、信じないものを信じてると僞はる歟、でなければ信じないものは飽くまでも信じないで押通すかの二つの中の一つを取らなければならぬが、根が正直な彼には信じないものを信じてると僞はる事は到底出來ない。さればとて正直の心持を露出しにして押通さうてには、是等の妄誕極まつてる儀式に參列しないでも濟むやうに生活を變じなければならぬ。が、凡て何でもなく見える事でも、扱て實行するとなると中々容易ならぬもので、自分の所信を曲げまいとすれば勢ひ近親朋友と面白からぬ衝突を絶えず仕なければならず、第一には官を退いて、現在は素より今後とも益々官の爲に勵精して以て人間の道を盡さうといふ初一念の抱負を盡く絶つて、公私共に全く境涯を一變しなければならぬ。勿論、之

までに思切つて一切を犧牲にするには自ら正義を任ずる餘程の確信がなくては出來ぬが、苟くも聊かだに歴史を辨へ宗教殊に正教會派基督教の起原及び發展を心得てる教育あるものなら此位の確信を堅く執つて動かないのが當然である べき筈だから、セレーニンも亦、正教會の教ふる信條を承認しないのが卽ち正當であると思ふより外なかつた。

が、日に〳〵周圍の壓力に制へつけられては、セレーニン如き小心翼々たる正直者はツイ些とやそつとの虛僞を許すやうになるのは據なき結果で、凡そ不道理なるものに對して公平ならんとせば先づ此不道理夫れ自身を研究しなければならぬと云出すやうになつた。此小さな虛僞を容れたのが抑もの間違で、到頭今日は大きな虛僞の中に陷り込んで了つた。

凡そ宗教を研究する順序を云つたなら、先づ己れが生れて以來育てられた正教會——卽ち周圍の者が寄つて集つて奉じさせやうとし、奉じなければ世の中の人の爲に盡さうといふ一切の働きを止めて了はねばならぬ——此正教會の教旨の中に眞理あるや否やを先づ疑ふべきであるが、セレーニンは此質問を起す

前、既に〳〵眞理あるものと前提を獨斷して置き、扨て腹の底の底では確に不道理と認めてゐながら强て理窟を附會しやうとして、ヴォルテールとかショーペンハワーとかスペンサーとかコントとかは頭から顧盼いても見ないで、却てヘーゲルの哲學書やヴネー又はホミヤーコフの宗教書を讀み、兒供の時から教へられた正教會の信仰の證明及ひ安心といふやうな、理窟上では迚も承服出來兼ねるが、左ればとて信じなければ一日も安住してゐられないから、奈何がなして此斷見的信條に似寄つたものを得たいと憧憬れ扨いてゐた末に、漸とこさとヴネーやホミヤーコフに類似の教理を發見する事が出來て安心した。

で、人間一個の智慧では到底眞理を知る事は出來ない、眞理は天啓に由てのみ有緣の信者に示され、此天啓は唯だ正教會にのみ示現せらるとか云ふやうな種々のお難有い事を證明する版で捺したやうな牽强附會の說を奉じ、夫からと云ふものは自ら妄誕不稽であるのを忘れて、安心して祈禱會や死んだ者の法事に出たり、懺悔したり、聖像の前に十字架を切つたりして、何よりも大切に思つてる官途にも勤續して、一家の面白からぬ境涯から免るゝ事も出來た。

だが、之程に信じたなら十分安心してゐられさうなものだが、衷心では矢張何となく安んじないで、自分の行つてる事一切を引括めて何よりも信仰が一番不立派であるやうな氣がして、夫故、眼中常に憂を帶びてゐた。其中で――自ら欺いてる虛僞が尙だ十分根を張り切らない中に昔しの親友のネフリユードフに會つたのだから、青年時代の自分の本領を忽ち憶出し、加之も何と思つてか周章てゝ宗教に對する現時の自分の見解を臭はしたので、愈々益々自分の信仰の不立派極まつてるのを一層染々と感じて痛く弱つて萎れて了つたのだ。ネフリユードフも久し振で舊友に再會した歡喜が過ぎて了うと忽ち夫と直ぐ氣が附いた。

夫だから二人は最う一度會つて話さうといふ約束をしたぎりで、二人ながら互に訪ひも訪はれもしないで、ネフリユードフがペテルブルグ逗留中到頭會はずに了つた。

第二十四回

辯護士ファナーリンとネフリュードフとは元老院を出てから後ろに馬車を牽かせてポツ〳〵と歩いた。道々、辯護士は議官連が頻りに噂さしてゐた或る局長の珍聞事件を話し初した。奈何して此事件が露顯に及んだか、奈何して又元來なら法律上鑛山に遣られて然るべき筈の男が西比利亞の或る縣知事に轉任したものだか、此の鼻持もならぬ醜聞の顚末を逐一話してから後、今朝方通り過ぎた建立中の紀念碑の醵金を知名の某々が費消した件やら、某の夫人が株式相場をして數百萬儲けた事やら、それがしとくれがしとが納得づくで黄金と女房を交換した事やらを面白さうに饒舌り、續いて上流社會の人達の詐欺だの其他の犯罪だのを陳べ立て、斯ういふ連中はドンナ罪を犯しても監獄へは入れられないで却て局長とか部長とか種々の椅子に有り附けるのだと云つた。這般な醜聞は迎も話し切れない程ファナーリンは知つてゐて、之を饒舌り立てるのが如何にも愉快さうなは左も有るべき筈で、ペテルブルグの高等官吏輩の得意の醜聞と較べたなら辯護士が職業上金を儲けるのは遙かに正當で正直なのを明白に證するに足るからであるが、ネフリュードフには根ッから面白くなく、何時まで聞いても果しが無いので、尙だ話の切れない中に突然訣別をして辻馬車に乘つて了つたから、辯護士先生は呆氣に取られた。

ネフリュードフは倩々情なくなつた。愈々控訴が棄却となれば罪も無いマースロワが現に受けつゝある無意味の苦痛は確定し、勢ひ運命を共にする自分の苦痛も益々増して來たから心中快々として樂まなつた。搗てゝ加へて世には種々の言語道斷なる罪惡が白昼公然と上等社會に行はれて、シカモ是等の犯罪者が何等の制裁をも受けずに意氣揚々としてをると聞いたり、且又昔しは無邪氣で磊落で淡泊で高尙であつたセレーニンから冷淡極まつた不親切の待遇を受けたりしたので益々ムシヤクシヤして堪らなかつた。

家へ歸ると玄關番が手紙を渡して、妙な女が玄關へ來て此這手紙を書いて行きましたと輕蔑するやうに云つた。見るとシューストワの母の手紙で、娘のお禮に參上つたがお留守で殘念だと吳々も恩を謝し、ヅーホーワに關する一條で是非お目に掛りたいからワシーリエフスキー町五丁目何番地の家へ甚だ恐入るが

*Vasilyevsky

訪ねて貰ひたいといふ文言である。ネフリユードフは面會して除りチャホヤ禮を云はれるのがドッとしないが、唯お目に掛りたいのが山々だから、喋々しくお禮を陳べ立てられるやうな御懸念なしに、明日の朝は都合して尋ねて戴きたいと云ふのだ。

猶だ最う一本手紙が來てゐた。以前の同僚士官で、今は皇帝の侍從武官たるボガチレーフ[1]からの來狀である。豫て此男には宗門一件に關する請願書の執奏を頼んで置いたのだが、此手紙に由ると、勿論約束通りに陛下のお手元に請願書を出すのは承知したが、併し一應先づ宗教上の行政を總括するトボローフに會つて話すのが順序で、且其手續きを踏んで置く方が却て上策であるべき筈だと云つて來た。

過ぐる數日間の失望で、ネフリユードフは此上何事をしても到底無益だと云ふ感情がした。モスコーで考へた計畫の如きは、恰も世の中へ飛出したら直ぐ眼が覺めて了う少年時代の夢のやうな空想と同樣だと思つた。が、現在ペテルブルグに來た以上は一旦計畫したものを一と通りは行るのが卽ち己の義務だと

[1] Bogatiref　[2] Toporof

信じて、明日はボガチレーフと相談してから、教務一切を掌る當局者にも面會しやうと決した。

で、書類夾みから宗門一件に關する請願書を出して更に讀返してる處へ、叔母なるエカテリーナ夫人[2]から茶の案内の使が來た。

ネフリユードフは今直ぐ行くと答へつゝ、書類を再び元の處へ收めてから叔母の部屋へ行かうとして、其途中で窓から戸外を覗くと、見覺えあるマリエットの紅栗毛の二頭立の馬車が玄關前で待つてゐたので、忽ちポウッと面熱りがして思はず腹の底でニヤ〳〵と仕掛けた。

マリエットは帽子の儘のケバ〳〵しい華美な色交りの輕い衣服で、伯爵夫人エカテリーナの安樂椅子の傍に椅子を寄せ、コップを手にしつゝ美くしい愛嬌のある眼に一杯の笑を漲らして頻りにお饒舌りをしてゐた。丁度ネフリユードフが入室つて來た時、少と猥褻つた話をしてゐたのは其笑ひ方で直ぐ理解めた。

鼻の下に淡墨を抹つたやうに髯を生やしたお心善しの伯爵夫人は肥つた身體を搖ぶつて轉げるやうに笑つてゐた。マリエットは口を少し横へ曲げ、首を傾げ

て、晴れ〳〵した元氣な顏に氣の毒らしい面地を浮べつ、凝焉と無言でエカテリーナ夫人の顏を見てゐた。

ネフリユードフが小耳に挾んだ一と言二た言で直ぐ推察された二人の話はペテルブルグの新聞の第二面に出た西比利亞の新任某知事の醜聞一件で、二人は此話で腹を抱へて轉げ返つてゐたのだ。

『貴姐は痛いよ、這般なに笑はせられると死んで了う、』とエカテリーナ夫人は咽返りながら云つた。

『御機嫌能う、』と云ひつゝネフリユードフは席に着き、腹の底ではマリエットの浮ずつた素振を賤みつゝ眞面目に苦り切つてると、早くも其眼色を見て取つたマリエットは、ネフリユードフの機嫌を直したいが精一杯で、忽ち顏色ばかりか心持まで變へて了ひ、急に眞面目臭つて、自分の境涯が面白くなくて何だか物足りないと云ひたげな容子をして見せた。尤も强ち全然心に無い事を顏に出したわけでなく、眞實多少か物足りないやうな氣がして、何となくネフリユードフの現在の心持と似てゐるやうに思つてゐた。と云つてネフリユードフの心持

を斯うと口へ出して云ふ事は無論出來なかつたが。

マリエットは先づネフリユードフが關係してる種々雜多な事件の成行を聞くと、ネフリユードフは元老院に於ける敗訴と舊友セレーニンに面會した顚末を話した。

『あツ、あのセレーニンさんですか。潔白な方ですネ。あの方なら一點の申分もない立派な紳士ですワ、』と二人の婦人は申合はしたやうにセレーニンを褒めそやすペテルブルグの交際社會の通り言葉を異口同音に云つた。

『彼の男の妻は如何な人間です？』

『あの方の奧さんかエ？』とエカテリーナ夫人は、『他人の影口を利きたかアないが、あの奧さんには旦那さんの人物が解らないのサ。』

『ですけれども彼の方までが控訴を棄却する側に立つてのは餘程妙ですワ、』とマリエットは全く心底からネフリユードフに同情つて、『まア、何たら事でせう。マースロワさんはお氣の毒ですワネ、』と吻と嘆息を吐いた。

ネフリユードフは澁面を作りつ話題を變へやうとして、マリエットが口を利い

たお庇に放免されたシューストワの咄を初め、先づマリエットの盡力の禮を云つて、から、シューストワが這般な災難に會つても誰一人口を利いて其筋に運動して呉れるものが無いといふ苦情話しをしやうとする途端、マリエットは話の腰を折つて自分の憤慨を饒舌り出した。

『最う何にも仰しやつて下さる勿。妾も良人が、夫なら放免してやると云つた時はグッと來ましたネ。妾が一と言頼んだら直ぐ放免して宜いやうな罪のないものなら何故今まで監獄に入れて置いたんでせう？』と丁度ネフリユードフが云はうとした事を云つた。『實に言語道斷ですワ。』

エカテリーナ伯爵夫人はマリエットが自分の甥に戯謔つてるのを見て面白がつてゐた。で、二人が言葉の途切れたのを見て、『お前さん、明日の晩はアリーンの許へ行かないかエ。キーゼウェッテル師が見える筈だ、』と、今度はマリエットに向つて、『貴姐もネエ。』

『彼の方はお前さんにお氣が附いたよ。』とエカテリーナ夫人は再び甥に向つて、『妾に種々お聞きになるからお前さんの奔走してる事件のお話しをした處が、

夫は殊勝な事だ、必ず基督の御手に縋つて來る有緣の證據だと仰しやつたから、是非とも最う一度聽問しなければネエ。マリエットさん、貴姐からも能く云つてやつて下さい。夫から貴姐もネ。』

『併し奥樣、妾は何事にしろ公爵にお勸めするだけの權利はムいませんワ、』とマリエットは云ひつゝネフリユードフと目眦せした。此目眦は伯爵夫人の言葉を初め一般宗教に對する二人の態度を以心傳心に決めて了つた。『夫から妾なら奥樣も知つてらッしやる通り、お宗旨には餘り頓着しませんから。』

『貴姐の御信心なさらないのは知つてます。何時でも御自分のお考で勝手な横道へとばッかり――』

『自分の考と仰しやいますが、妾だつて極平凡な百姓女と同樣な信仰なら持つてますンですよ、』とマリエットは笑ひながら、『夫に又、明晩は佛蘭西芝居へ參る筈ですから。』

『爾う〳〵、お前さんは其の佛蘭西芝居を既う御覽かエ――何とか云ふ俳優だッけノウ？』とエカテリーナ夫人は甥に訊くと、マリエットは傍から此評判の女

俳優の名を云つた。

『お前さん、尙だ見物しなければ、是非、之だけは見物しなければ。夫は〳〵巧いもんだよ。』

『芝居とお說敎と何方を先にしたもんでせう』と、ネフリユードフは笑ひながら云つた。

『舉足を取るもんぢやアないよ。』

『拙者の考だと、お說敎を先にして芝居を後廻しにしないと、折角のお說敎が面白くなくなつて了うだらうと思ふ。』

『い〳〵ヱ、』とマリエットは、『芝居を先に見物してから、後でお說敎を聞いて悔悛めた方が宜うムいますワ。』

『マリエットさんまでが一緒になつて、其樣なに茶かすもんぢやアない。お說敎はお說敎、芝居は芝居さ。何もお說敎で救はれたいからッて芝居へ行つて泣いたり笑つたりする事がありますか。人は信心もしなければならないし、樂みもしなければなりません。』

『叔母さんの方がお說敎が巧い。』とネフリユードフはマリエットと二人で聲を合はして哄と笑つた。エカテリーナ夫人も詮方なしの苦笑ひをした。

『左に右く、貴下、』とマリエットは暫らくしてから、『何しろ明晩は妾どもの棧敷へ入來ッしやいましナ。』

『さア、伺へさうもありませんがネ……』

と言掛けた時、家僕は客來を報じて話の腰を折つた。新來の客といふはエカテリーナ伯爵夫人を會頭に戴く或る慈善團體の書記である。

『大變なお客樣だ。那樣な愚圖々々した男ッたら無い。鳥渡會つて直ぐ還して了ひますから、少との間待つて下さい、』と云ひつゝ、エカテリーナ夫人は例の小股の早足で行かうとして、『マリエットさん、憚りですがドミートリにお茶を注いでやつて下さい。』

マリエットは手袋を脫ると、奇麗な平たい手の無名指が若干個の指環で燦々と輝つてゐた。

『最つと上げませうか、』と云ひつゝ、妙な手つきをして酒精燈の上に掛けてある

銀の急須の柄を持つた。

マリエットの顔色は憂を帶びて眞面目であつた。

『妾は平生から尊敬してるお方のお話を伺うと、自分の境涯が妙に情なくなります。』

と云つた時は今にも聲を出して泣きさうに見えた。此言葉を解剖して見たなら全く無意味のもので、縱令意味があつたとしても取止めのないものであるのは解り切つてゐたが、花やかに靚裝した若い美人が凉しい眼眸に情を含んで這般な事を云ふと、何だか特別な深い立派な意味がありさうに思はれた。

で、ネフリユードフは暫らく凝乎とマリエットの顔を凝視めて眼を放さなかつた。

『貴下は妾が何にも知らずにゐるとお思召してらッしやるでせう。ですけれども貴下が現に遊ばしてる事は公然の秘密ですから、誰だつて知らないものはありませんワ。失禮ですが、妾は實はお志に感服して貴下が種々御心配遊ばしてらッしやる事を樂みにして、心底から感心してゐますワ。』

『何にも感心されるやうな事は無い。猶だホンの仕掛けたばッかりで……』

『そんな事を仰しやつても、能く存じてますよ、貴下のお心持も其御婦人の事も能ウく存じてます。御道理でムいますとも、妾はお察し申してますから何にも申上げませんワ、』と云ひつゝネフリユードフの面に不快の色あるを見て、

『夫から監獄で苦んでる人達ですネ、妾は實地を見て能く解かりましたワ、』と男の心を引付けたいばッかりの女心から、ネフリユードフの一番氣に入りさうな話を案じ付き、『貴下は監獄で難義してるものをお助け遊ばさうッて云ふお思召でせう。あの無慈悲な人非人の役人共に痛い目に合つてる人達を見ては誰だつて生命を捨てゝも助けてやりたい氣になります。妾のやうなものでさへ斯いふ事の爲なら生命を捨てる氣になりますが、人には各々の約束てものがありますから。』

『すると貴姐は御自分の境涯に滿足してらッしやらんのですナ?』

『妾?』とマリエットは這般な事を訊かれやうとは思ひも寄らんから、喫驚したらしく周章氣味で、『約束事ですもの、誰だつて各自の境涯に滿足しなければな

りませんワ。妾も滿足してをります。ですけれども約束事は約束事、其外に良心てものが時々頭を持上げますから。』

『其良心を鈍らしては不可ませんナ。良心の聲には是非とも從はなければナア……』と子フリユードフは何時かマリエットの弱繩に落ちて了つた。

ネフリユードフは其後屢々マリエットと口を利いたのを心に耻ぢた。で、マリエットが巧い調子に合槌打つ口吻や、ネフリユードフが語る獄内の慘憺極まつた咄を一心に感に堪へて眤と男の顔を凝視めながら聞いてる時のマリエットの顔を何時までも覺えてゐた。

エカテリーナ夫人が來客を返して戻つて來た時は、二人は古い友達同士といふだけの關係でなく、世の中に唯二人ぎりが意地相投じてる特別の交のやうに打解けてゐた。で、互に權勢者の不義不信や薄命人の不幸艱難や人民の貧困苦痛を話したり頷いたりしてゐたが、唯の口頭ばかりの浮の空で、聲の調子と眼つきでは、「戀して下すつて？」「戀してます、」と問ひつ答へつして、ツイ今の今までは互に思ひも附かなかつた男女間の愛が頂天まで登り詰めて、二人は何時

の間にか知らず識らずピツタリと膝を密着き合はしてゐた。

愈々歸らうとする時、マリエットは何時でも御用の時は何なりと喜んで骨を折りませうと云ひ、且つ明晩は是非ともお話し仕たい大切な事があるから、鳥渡なりとも、芝居へ來て戴きたいと呉々も繰返した。

『夫では復た、』とマリエットは指環で燦々する手に手袋を穿めながら、『之ぎりお別れして復た何時お目に掛れるやら……』と吻と嘆息をしつゝ、眼に一杯の情を含んでネフリユードフを流盼に見つゝ、『ネエ貴郎、是非明晩は來て下さいましナ。』

ネフリユードフは左も右くも芝居行きを約束した。

其晩、ネフリユードフは只ッた一人で自分の室の床に倒れ、蠟燭をフッと吹消して眠やうとしたが、何時まで經つても如何しても眠られなかつた。

で、マースロワの踵を何處までも追つて行かうと云ふ覺悟や、土地所有權の放棄や、夫から夫と段々に考へてる中に、『何時お目に掛れるやら、』と吻と溜息しつゝジロリと流盼に見たマリエットの笑顔が不

意に目前にマザ〳〵と現はれて、自分も思はず莞爾としたほどに顯然と見えた。で、

『西比利亞へ行くのが果して正義に合つてるだらうか？　自分の財産を放棄するのが果して正義に合つてるだらうか？』と腹の中で自問自答した。

が、此ベテルブルグの夜、東が白み掛つて雨戸が明るくなつた時分は心が掻亂れて、何も彼もモシヤクシヤとして、ツイ今までの心持や考を持出して見ても、今迄の意氣込や力瘤が全で抜けて了つてゐた。

『が、若し爰で氣が變つて覺悟を翻へしたら――即ち今まで行はうとしたのは悉皆空想で、所詮此空想を押通せるものでないとしたら、假に空想でなくて正當な事としても、正當な事を仕たのを後悔したとしたら奈何だらう、』と愚にも附かぬ質問を起して見たりしたが、答へるだけの氣力が無くなつて草臥きつて疲勞して了ひ、丁度骨牌に敗けた晩のやうに身體が綿のやうになつて、グツスリと眠込んで了つた。

第二十五回

翌朝眼が覺めた時は、前日何か飛んでもない罪を作つたやうな感じがして、兎さま角さま種々と考へたが、微塵も惡い事をした覺えは少しも無い。が、惡い事をした覺えこそないが、惡い考は確かに起つた。カチューシャと婚禮し土地所有權を放棄して了はうといふ目下の覺悟は皆行ふべからざる夢のやうな空想で、這般な自然に背いた小細工を強に行はうとしても迚も行へないから、矢張以前〳〵通りの生活に戻つて了はうかと、フラ〳〵と迷つた。是が抑も怪しからぬ考へだ。

惡事こそ仕なかつたが、惡事よりも猶ほ怪しからぬのは凡百の惡事の源たる惡い考を起した事だ。

惡事は繰返されるものでなくて屢々悔悛められる。が、惡い考は總ての惡事を生み出す。

且惡事は他の惡事の爲の道を滑らかにするばかりだが、惡い考は忌應なく惡事に人を引摺つて行く。

ネフリユードフは左や右うと前日の考を繰返して、縱令束の間にもせよ么麼して這般な飛んでもない考を道理らしく思つたらうと呆れて了つた。自分が一端爲さんとしたる覺悟は是迄に例の無い難かしい事にしろ、今日の渠としては之より外に行くべき道の無いのは能く知つてゐた。又以前の生活に戻るのは何の苦も無い容易な事にしろ、夫では生き甲斐のないのは能く解つてゐた。全く昨日の迷は、熟睡から覺めて眼が冴え〳〵してゐても、床を離れる時刻が既う來てゐても、大切な愉快な仕事を控へてるのが解り切つてゐても、矢張床の中に氣持よく、コロ〳〵と轉がつてゐたいのと同じやうなものだ。

愈々ペテルブルグに逗留するも今日限りといふ此日の朝まだきに、ワシーリエフスキー島にシーストワを尋ねるべく出掛けた。

シーストワは二階住居をしてゐた。ネフリユードフは裏階子から案内されて、食物の臭がプン〳〵するボカ〳〵した臺所へ通ると、眼鏡を掛けた前垂掛の年を老つた女が腕を捲し上げて、蒸氣のポウッと立つ鍋の中を掻廻してゐた。

『誰方？』と女は眼鏡越しに見つゝ吃と云つた。

ネフリユードフが其名を告げるや否、女は滿面に喜色を浮べつ周章たとして、『呀、公爵で在らッしやいますか、』と前垂で手を拭き〳〵、『如何して先ア裏階子なんぞから入來しやいました。妾は彼女の母でムいます。既んでの事娘一人を失くなします處を貴下樣のお蔭で助かりました。』とネフリユードフの手を執りつゝ接吻しやうとした。

『妾は昨日お邸へ參上りました。妾の妹が是非と申しますんで。ハイ、妹も此處に居ります。さア、何卒、此方へ、此方へ、』とシーストワの母は先に立つて眞暗な廊下を案内しつ、端折つた裾を卸して、髮を撫でつけながら、『妹はコルニーロワと申します。御存知で在らッしやいませう、』と軈て戸の閉つた室の前に立ちつ低音になつて、『矢張政治運動を致してをります。自分の妹を褒めるのは笑止しうムいますが、夫は〳〵中々見上げた女でムいます。』

シーストワの母は扉を排けて狹ッこい部屋にネフリユードフを通した。一と目見て直ぐ母子と解る母親酷肖の髮の毛の房々した丸顏の娘は、縞の木綿の衣服で卓子と向ひ合せの長椅子に腰を掛けてゐた。

娘と相對になつてるは露西亞風の刺繍のある襯衣を着た青年で、「く」の字なりに前屈みになつて眞黑な髯の生へた顏を突出し、ネフリユードフが來たのを、鳥渡顧盼いて見たぎり二人とも談話に夢中になつてゐた。

『リディヤ、』と母親は娘を呼んで、『ネフリユードフ公爵が入來しッたよ。』

娘は喫驚したやうに房さりした髮を後ろへユラリと振りながら飛上つて、パッチリした淡鼠の眼を圓くしてシゲ〳〵と見た。

『貴娘がヴェーラがお噂した所謂危險な御婦人ですネ？』とネフリユードフは笑ひながら云つた。

『はア、妾よ、』と娘は眞白な齒を露はしつゝ柔しげに無邪氣く嫣然として、『妾がリディヤでムいます。此度はお庇樣で……』と輕く頭を下げつゝ『叔母が是非お目に掛りたいと申してをります——叔母さん、叔母さん！』と戸越しに可愛らしい聲で呼んだ。

『貴娘が監獄へお入りになつたのをヴェーラが大變お氣の毒だと云つてました。』

『先ア、爾う——』とリディヤはにッと笑ひつ、『さア、何卒是へ——』と云つた

時、青年は氣を利かして座を起つたので、『此方の椅子へ——さア、何卒、』と青年が讓つた破れ掛つた安樂椅子を指さしながら、ネフリユードフが頻りに青年を凝視めてるのに氣が附き、

『之は妾の從兄弟でザハーロフと申します、』と直ぐ紹介した。

リディヤと同じやうに青年は柔しげに莞爾〳〵笑ひながら挨拶しつ、別の椅子を引寄せてネフリユードフと並んで座に着いた。

十六か十七になる髮毛の房々した學校の小兒が其時復た入室つて來て、何にも言はずに突と窓框へ行つて腰を掛けた。

『ヴェーラさんて方は、』とリディヤは聽て、『叔母の一番豪いお友達ですが、妾は實は能く知らないのでムいます。』

其時、眞白な衣服に帶革を締めた到つて快活な容貌の婦人が次の室から入つて來て、

『御機嫌宜う。能く來て下さいました、』と云ひつゝ長椅子にリディヤと隣り合つて腰を掛けつ、

『ヴェーラは甚麼な容子でムいます？　お會ひなすッたでムいませうネ？　甚麼な容子でムいます？　覺悟が出來てをりますか？』

『どうして、覺悟どころですか、大氣焔です。』

『彼の人なら必と爾うでムいませう。彼の人の氣象は、妾、能く存じてます。』と片頬に笑を含みつ願いて、『那樣な立派な氣象の人はムいません。人の事は何吳れとなく心配しますが、自分の事となると一切頓着しません。』

『拙者が面會した時も自分一身に就ては一向何にも云ひませんかつたが、貴婦の姪御さんの事ばッかり心配して、何にも知らないリディヤさんに監獄の苦勞をさせるのが何よりもお氣の毒だと、頻りに云つてました。』

『左樣でムいますか。全くネ、姪は飛んでもない災難で、何にも知りませんのに、妾のお庇で痛い目に會ひました。』

『いゝヱ、其樣な事ア無いワ。叔母さんが書類を持つて來なくたつて、妾の方から預かつたかも知れないワ。』

『否ヱ、お前さんは能く知らないのサ。斯ういふ譯でムいます。』とネフリュードフに向つて、『或人から暫らく書類を預つて吳れと妾が頼まれました。處が妾の家てものが有りませんので、姪の處へ持つて來ますと、其晩運惡く警察から踏込まれて家宅搜索を受けました。すると其書類が出ましたンで、直ぐ姪を拘引して、元來誰から預つたかと姪の口から吐かせやうと思つて今まで拘留して置いたのです。』

『ですけれども妾、云ひませんかつたワ、』とリディヤは前髪を引掴みながら口早に云つた。

『お前さんが話したと云やアしないよ、』と叔母は云つた。

『ミーチンが捕縛つたのは妾の知つた事ッちやアないワ、』とリディヤは顏を赤めながら心配さうに四邊を見廻した。

『其樣な咄は最うおしでない。』と母は云つた。

『何故其咄をしちやア不可なくつて。妾、云ひますワ』とリディヤは眞面目に冷まして指の周圍に髮を卷付けつゝ愈々眞朱になつた。

『昨日もお前は其話をして逆上せて了つたぢやアないか。既う忘れてお了ひか

い。』

『いゝヱ、宜くッてよ。お母さん、打捨つといて頂戴、……妾はネ、何を訊かれても默つて冷ましてました。ミーチンや叔母さんの事を調べられた時も妾は知らないッて云つてやりました。爾うすると彼のペトローフが――』

『ペトローフてのは探偵でムいます。憲兵で、炙ても燒いても喰はれない惡い奴でムいます、』と叔母はネフリユードフに說明して聞かした。

『爾うするとペトローフは、』とリディヤは段々と氣が浮ずつてセカ〳〵と、『何でも白狀しなさい、誰の迷惑にもなるぢやなし、隨分話に由ては是迄無益に苦しめてゐた罪の無い者を放免するかも知れない、ッて云ふンです。ですけれども、イクラ訊かれたからッて知らないものは知らないッて强情を張つたンです。すると、夫なら可し、話さんでも宜しい、其代りに此方が預け人を指名しても取消してはならんぞと云つて、ミーチンの名を指名しました。』

『最うお止しよ、其話は、』と叔母は云つた。

『否ヱ、叔母さん、嘴を容して下さるな……』とリディヤは前髪を引張出しつ

一座を見廻して、『夫から想像して下さい。其翌日です、隣房の人が壁を叩いてミーチンが捕つたッて知らせて呉れました。妾は先ア飛んだ事をしてミーチンまで連累を喰はして濟まないと、夫ばッかりが心配で、氣が違ひさうになりましたワ。』

『だが、ミーチンが捕まつたのはお前さんの爲ぢやアなかつたのサ。』

『ですけれども妾は知らなかつたから、一圖にミーチンを罪に落したのは妾だと思詰めて、檻房の中を往つたり來たりして、考込んでばかりゐました。「ミーチンを罪に陷した、飛んだ事をした、氣の毒な事をした、」とばかり考へて、横になつて搔卷を被つても寢つかれない。耳の傍で、「お前がミーチンを罪に陷した、罪に陷した、」といふ聲がするンです。之は神經だナ、神經に違ひ無いと、イクラ爾う思つても聲が聞えるンだから仕樣が無い。何卒して早く寢て了つたらと思つても寢られないし、寧そ何にも考へまいとしても矢張考へずにはゐられないので、眞個に慄然ッとしましたワ、』とリディヤは段々と氣が昂ぶりつ、夢中になつて髮毛を指に捲付けたり解いたりしてゐた。

『リディヤ、お前先ア、少つと氣をお靜めなさい、』と母は娘の肩を徐と撫でた。

が、リディヤは自分で心を靜める事が出來ないで、

『夫よりも最つと最つと恐ろしかつたのは……』と再び話し初めやうとしたが、倘だ何にも言出さない中に、ワッと聲を立てゝ室から飛出さうとした。

母親は喫驚して追縋つて强に引留めた。

『あン畜生めらの首をとッ絞めッちまへ。此ん盜賊！』と今迄素知らぬ顏してゐた少年は矢庭に嘴を容した。

『何だョウ、お前。』

『何でもないやい。そんな事を云つて見たンだい、』と少年は答へつゝ、卓子の上なる紙莨を一本取つて燻かし初めた。

第二十六回

『密室監禁てものは若いものには實に恐ろしいもンでムいます。』とリディヤの叔母は首を動かしつゝ紙莨に火を點けた。

『若い者には限りますまい。誰にでもでせう、』とネフリユードフは云つた。

『いゝヱ、人に由ては畏くも恐ろしくも何ともありますまい。例へば眞正の革命黨などは監獄に入れられると却て氣樂になつて安心が出來ます。何故と申しますと、警察の所謂注意人物と目されてるものは誰にしろ自分一身ばかりでなく他人の爲めや主義の爲め黨略の爲め始終中心配して貧乏ばかりしてゐます。處で拘引されて監獄に入れられて了ひますと、其樣な苦勞は失くなつて責任の肩拔けが出來ますから安心して暮せます。誰でも捕縛されると吻と息を吐いて重荷を卸したやうに一と安心致したもんです。ですけれども、若い者や罪の無いものは爾うは行きません。意地惡く又警察はリディヤのやうな罪のないものから必ず手を着けるものですが、誰しも初めての時は必ず胸がドキ〳〵致します。身體の自由を束縛されるとか、惡い食物や惡い空氣に辛抱する位なら何でもあ

りませんが、監獄へ入れられるといふ事が如何にも不名譽不面目なやうな氣が、誰でも仕ますからネ。道德上の苦痛さへ無ければ監獄内の不自由位は三倍增したからッて容易く辛抱出來るもんです。』

『貴婦は御經驗なすつッたかネ？』

『妾？妾は二度監獄に入りました、』とリディヤの伯母は溫和かな凄しい微笑を含みつ、『初めて捕まりました時は法律に觸れるやうな事は何にも仕なかつたので す。丁度二十二で、小兒もありましたし、加之に妊娠してゐました。一身の自由を奪はれたり、良人や小兒と別れたりしたのは、無論辛いには違ひありませんが、併し夫よりも今日限り人間でなくなつて之からは物品扱ひされるかと思ふと何よりも情なくなりました。妾は小さい娘に一と目會ひたいと賴みますと、何でも早く辻馬車へ乘つて了へッて云ひますし、何處へ行くのですかと訊くと、行きさへすりやア解ると云ふ挨拶です。元來先あ何の罪があつて捕縛されるのですと訊いても一向返事をして呉れませんで、白洲へ引張出されて一應調べが濟むと直ぐ衣服を脫がされて番號附の獄衣と換へられて了ひ、夫から檻房へ伴

れて行かれ、誰も在ない室へ誰ッた一人投り込まれて錠を卸されて了ひました。夫で檻房の外には番兵が裝彈した銃を持つて往つたり來たりして時々戸の隙から覗いて見るのでせう。何たる情ない事だらうと思ひました。夫から何よりも一番グッと胸に來ましたのは、妾を調べた憲兵士官が紙蓑を呉れた時ですネ。紙蓑の嫌ひな人が無いのを知つて同情して呉れる位なら、人が自由を願ひ光明を喜び、母が子を愛し子が母を慕ふ事を知らぬわけは無いのに、能く先ア大切な自由を奪ひ、最愛の良人や子から引割いて獸扱ひをして監獄に投り込む事が出來たもんです。這般な殘酷な目に會つては誰だつて惡い了簡を起さずにはゐられません。神や人の道を信じ、人は互に相愛するものと信じてゐた人でも、斯ういふ目に會へば信じるのを止めて了ひます。現に妾も夫からッてものは人道を信ずるのを止めて段々人間が惡くなりました、』と云ひつゝ微笑した。

其時娘の踵を追駈けて行つたリディヤの母は再び戻つて來て、リディヤは氣が頓動して迎も最う此席へは出られませぬと云つた。

『アッタラ若いものを那樣な目に會はしたのは誰のお庇だ、』と叔母は愁然とし

て、『ヒョンな事から妾が原因になつてるかと思ふと一層不便でなりません。』

『田舎へ行つたら氣が沈着くかも知れないから、』と母親は、『阿父の許へ當分遣りませう、』

『貴下に助けて戴かなかつたら、姪は死んで了つたかも知れません、』と叔母は云つた。『お庇樣で誠に難有うムいます。夫で、と――實はツーホーワの許へ手紙を屆けて戴き度いのでムいますが、』と衣兜から手紙を出しつ、『之は封じて留きませんから、一應御覽になつて、若し屆けても差閊がないとお思召したら願ひますし、左もなければ破つてお捨てになつても宜しうムいます。勿論何にも秘密事は書いてありません。』

ネフリユードフは手紙を受取りつゝ、讀まずに眼の前で封をして、確かに屆けると約束して暇乞をした。

第二十七回

ネフリユードフをペテルブルグに引留めた最終の用事は例の宗門一條で、昔しの同僚士官なる侍從武官ボガチレーフの手を經て嘆願書を皇帝に奉らうと云ふ心算で、此日の朝まだきにボガチレーフを訪ねると、尙だ朝飯中だつたが既う出勤の支度をしてゐた。

ボガチレーフは脊こそ高くないが、筋骨逞しくして蹄鐵をヒン曲げる力がある。が、心持は到つて柔和しい親切者で、曲つた事の大嫌ひな生一本の正直男で、其上に極寛大な自由思想を有つてゐた。で、斯ういふ氣質にも似氣なく宮廷に仕官して、シカモ陛下及び皇室に忠勤を迚んでゝ、不思議な事には此最高階級の美なる方面をのみ見て、汚ない腐敗した中には決して交らなかつた。元來何事に由らず人の噂をしない男で、常から寡言で、偶々口を利く時は極磊落な大聲を出し、傍若無人に叫つてカンラカラ〳〵と豪傑笑ひをする。勿論之は交際上手でするのでなくて、全く斯ういふ氣質なんだ。

『やッ、能く遣つて來た。如何だい、朝飯は？　先ア、座り給へ、ビーフステ

ツキが素敵と美味いが、喰らんか、如何だい？　我輩は何時でも正味の喰出の、ある奴を喰ひ初めの喰ひ終ひにするンだ。はッはッはッ、』と叫り散らしつ、葡萄酒の壜に指さして、『酒は如何だい、一杯飲らんか、如何だい。』と勧めながら、嚮て言葉を更ため、『時に君の一件ナ、我輩本より快諾した。陛下のお手許に差出すのは容易な事だ。が、偶つと氣が附いたのだが、左に右く先づ第一にトポローフに面會して置くが君の爲に上策だと思ふ。』

トポローフの名を聞くとネフリユードフは澁い顏をした。

『何せい、宗門上の事は悉くトポローフの職權に屬しをるから、陛下に直奏した處で陛下からトポローフに御諮詢になるのだ。夫だから、結局手續の如何を問はず、トポローフから直接、君に交渉する事になるかも知れんのだ。』

『君が爾う云ふなら行つても宜い。』

『爾う仕給へ、其方が上策だ、』とボガチレーフは再び大聲で、『時にペテルブルグは如何だネ？』

『全で煙に卷かれた鹽梅だ。』

『煙に卷かれた。はッ、はッ、はッ。』とボガチレーフは呵然と笑ひつナブキンで口髯を拭きながら、『夫ではトポローフの許へ行つて見るかナ。トポローフが若し諾かなかつた場合は我輩に嘆願書を屆け給へ。其時我輩から陛下へ直きに執達しやう、』と大聲で云ふや否、座を離れて無意識に馴れッこの十字を切つて、佩劍をガチャン〳〵と鳴らしつ腰に佩けて、『夫では失敬する。之から出勤するからナ。』

『拙者も一緒に出掛けやう』とネフリユードフは見るからに氣持の好いボガチレーフの逞しい幅廣の手を握つて、何となく心嬉しく玄關で別れた。

トポローフを訪問した處で何の香ばしい事の有らう筈が無いのは解り切つてるが、折角親切なボガチレーフの意見を無にせまいと思つて、有らゆる宗門の運命を掌中に握つてるトポローフへ會ひに行つた。

元來トポローフの任にある位置は頗る矛盾したもので、鈍根愚劣な人物でなければ決して勤まらんのだ。トポローフは實に其通りな愚極まつた男だ。何故なら、此職務は人間は本より如何なる惡魔鬼神の力も動かし得ない神の稜威に

作られたりと自ら稱する正敎會を維持し且如何なる壓迫を人民に加へても保護する役目だと云ふが、まッこと正敎會が人力の得て及ばざる神の掟で定められたものなら、何も人間が此上に七面倒臭い規則を作つて保護する必要も絲瓜も無いわけだ。然るに御苦勞樣にも非力の人間が規則を設けて全能の神が作つた正敎會を保護しやうてのが卽ち敎務院で、トポローフ以下の僧官が任ぜられてをる。凡そ世の中に此位矛盾した事はあるまいが、トポローフには之が解らない。頭から考へやうともしない。其くせ人間の力で決して犯すべからざるもの、如何なる鬼神惡魔も動かし得ざるものと定めて置きながら、若しかカトリックの坊主とか牧師とか或は他宗門の者が此正敎會の神聖を破壞しやしまいかとビク〳〵してをる。且滔々たる職々者流と等しく、本來人間の同等同胞たるを承認する宗敎の根本思想が缺けてるトポローフは、奇怪千萬にも世間の人間を己れ等とは全で違つた別種の動物と見做し、己れらには無くても濟むものを世間の人間には必ず無ければならぬものと信じてゐた。實は己れ等の腹のドン底では何にも信じてゐないで、無信仰を極都合の好い便利なものと思つてながら、

世間の人間が正敎會の信仰を失くしては一大事と懸念して、彼等の口吻に從へば之を救ふのが卽ち渠等の神聖な職務だと任じてる。

或る料理書に蝦は生きながら料理されるのを好むと書いてあるが、トポローフも其通りに人間は迷信に陷つてるのを好むと信じ且口外してゐた。料理書のは形容して云つたのだが、トポローフのは眞面目に文字通りに云ふのだ。

トポローフが自ら任ずる宗敎に對する態度は、腐つた肉で禽を飼つてる鳥屋と同樣で、腐つた肉は頗る厭ふべきだが、鳥は平氣で食ふから腐つた肉を喰はせる權利があると思つてゐた。

勿論イベリヤンやカザンやスモレンスクの靈驗顯灼かな聖母の御影を拜むのは甚だ怪しからぬ偶像禮拜であるのを知らぬでは無いが、人民は好んで信心するから何處までも此迷信を維持しなければならぬとばかり思ひ、元來斯ういふ迷信の根本の原因たるや、トポローフのやうに人民の無智文盲を救出さうとはしないで、却て益々暗黑の深みへ沈めて自分達の後光を輝かさうとする怪しからぬ男が昔から今に到るまで絶えぬからだとは少しも考へないのだ。

作られたりと自ら稱する正教會を維持し且如何なる壓迫を人民に加へても保護する役目だと云ふが、まッこと正教會が人力の得て及ばざる神の掟で定められたものなら、何も人間が此上に七面倒臭い規則を作つて保護する必要も絲瓜も無いわけだ。然るに御苦勞樣にも非力の人間が規則を設けて全能の神が作つた正教會を保護しやうてのが卽ち教務院で、トポローフ以下の僧官が任ぜられてをる。凡そ世の中に此位矛盾した事はあるまいが、トポローフには之が解らない。頭から考へやうともしない。其くせ人間の力で決して犯すべからざるもの、如何なる鬼神惡魔も動かし得ざるものと定めて置きながら、若しかカトリックの坊主とか牧師とか或は他宗門の者が此正教會の神聖を破壞しやしまいかとビク〳〵してをる。且滔々たる職々者流と等しく、本來人間の同等同胞たるを承認する宗教の根本思想が缺けてるトポローフは、奇怪千萬にも世間の人間を己れ等とは全で違つた別種の動物と見做し、己れらには無くても濟むものを世間の人間には必ず無ければならぬものと信じてゐた。實は己れ等の腹のドン底では何にも信じてゐないで、無信仰を極都合の好い便利なものと思つてながら、

世間の人間が正教會の信仰を失くしては一大事と懸念して、彼等の口吻に從へば之を救ふのが卽ち渠等の神聖な職務だと任じてる。

或る料理書に蝦は生きながら料理されるのを好むと書いてあるが、トポローフも其通りに人間は迷信に陷つてるのを好むと信じ且口外してゐた。料理書のは形容して云つたのだが、トポローフのは眞面目に文字通りに云ふのだ。

トポローフが自ら任ずる宗教に對する態度は、腐つた肉で禽を飼つてる烏屋と同樣で、腐つた肉は頗る厭ふべきだが、烏は平氣で食ふから腐つた肉を喰はせる權利があると思つてゐた。

勿論イベリヤンやカザンやスモレンスクの靈驗顯灼かな聖母の御影を拜むのは甚だ怪しからぬ偶像禮拜であるのを知らぬでは無いが、人民は好んで信心するから何處までも此迷信を維持しなければならぬとばかり思ひ、元來斯ういふ迷信の根本の原因たるや、トポローフのやうに人民の無智文盲を救出さうとはしないで、却て益々暗黑の深みへ沈めて自分達の後光を輝かさうとする怪しからぬ男が昔から今に到るまで絶えぬからだとは少しも考へないのだ。

ネフリユードフが應接室に通された時はトボローフは自分の居室で頗る元氣な品格の好い尼さんと會見して頻りに話し込んでゐた。此尼さんは西露西亞で、內實羅馬法王を尊奉するユニアット宗門派に希臘正敎會の信仰の强賣をしてゐたのだ。

應接所に控へた役人はネフリユードフの來意を尋ね、皇帝陛下に請願書を奉るべく執奏を賴みに來たと聞くと、先づ請願書を內見して差閊ないかと訊いた。ネフリユードフは無言で首肯きつつ請願書を手渡しするのを役人は請取つて主人の居室へ持つて行くと、恰度其時尼さんは長い亜布附きの聖帽を被つて裾長な法衣を引摺りつゝ白い手に黃玉の珠數を掛けて出て去つた。が、トボローフは直ぐネフリユードフを引見しないで、先づ請願書を取つて首を掉りつゝ默讀し、條理の井然としてシカモ極めて力ある文章に肝を潰しつ不快な顏をした。

『之が若し陛下のお手に入つたなら、飛んでもない事になつて面白くもない御下問を受けねばならんのだ、』と讀終ると共に沈吟しつ、請願書を徐と卓上に置き鈴を鳴らしてネフリユードフを通すやうに命じた。

トボローフは此宗門事件を能く知つてゐた。餘程以前にも請願書を受取つた事がある。之は斯ういふ譯なんで、是等の宗門徒は希臘正敎會の信條に反いた異安心を唱へ出したので、初めは說諭され、其後一度は法律に問はれ、直ぐ又放免されたが、正敎會の僧侶や州知事が正敎會の儀式に由らない渠等異宗門の婚禮は不法なりといふ理由の下に妻子眷族を分離して追放しやうとしたから、親や女房が騷出して引離されないやうにと嘆願して來たのだ。今、憶出すと其時は處分停止を命ずるが上策だと思ひながら躊躇した。何故かと云ふと、是等の異宗門の妻子眷族を分離して追放した處で何の故障もなく、生中に慈悲を示して却て土地の百姓原に好き勝手な信仰を起さしめては大變であるし、且其時の正敎會の監督連の意氣込が非常であつたから、事件の成行に任して少しも干渉しなかつた。

が、今は大に事情を異にしてをる。左も右くもペテルブルグに多少の勢力あるネフリユードフのやうな後援者があつては、不法處分として直き〳〵に陛下に訴へる事も出來るし、外國新聞で論ずる事も出來るから、トボローフは忽ち

意外な覺悟を定めて、

『御機嫌能う、』と忙がしさうに突立つたまゝネフリユードフを迎へつゝ、直ちに要件に入つて、『此事件なら能う知つてます。請願人の連名を見ると直ぐ、あアあの氣の毒な事件だナと憶出しました。』と請願書を取りてネフリユードフに請願人の名前を示しつゝ、『折角御注意下すつて誠に忝なうムる。全く地方の官吏や役僧共が熱心になり過ぎたからで、御心配なさるほどの事は無い。』

ネフリユードフは無言で突立つたまゝ、眼前に對合つたる槓杆でも動くまじき青白い顏を冷かに凝視めた。

『即刻處分停止を命じ、且農民を解放するやうに計らひませう。』

『すると此請願書は不必要ですナ？』

『拙者が確かにお約束します、』とトポローフは拙者といふ言葉に力を入れて、己れの正直なる性質は何よりも確かで、一言金鐵よりも堅いと請合ふやうに、

『直ぐ命令書を書いたら宜しいでせう。暫らく腰をお掛けになつて……』

と云ひつゝ書卓へ行つて命令書を書出した。ネフリユードフは腰をも掛けず

にトポローフの狹ましい禿顱や、スラ〳〵筆を走らす靑筋だらけの太い手を見つつ、甚麼して此右から見ても左から見ても無感覺極まつた男が斯う易々と此方の思ふ通りに、シカモ如此なに鄭重に都合好く計らつて呉れるかと不思議でならなかつた。

『さア、此通り書きました、』とトポローフは封筒に入れて封をしながら、『何卒貴下から請願人に能くお話しなすつて下さい。』と强て笑はうとするやうに唇を曲めた。

『元來奈何いふわけで人民が如此な難義な目に會ふのでせう？』とネフリユードフは訊いた。

トポローフはやをら頭を擧げ、ネフリユードフの質問を笑止しがるやうに笑ひながら、『夫はお話し出來ない。お話し仕て差閊ないのは、我々が保護する人民の利益は重大であるから、宗教に熱する方なら縱令些と位過激に走つても尙だ〳〵初めから信仰に冷淡で無頓着なよりは遙かに危險は無い。憂ふべきは爾ういふ輕薄な無信仰の風が今日次第に廣がつて來る……』

『併し宗教の名を以て一家を離散せしむるやうな、人道を無視する壓制を何故敢てするのでせう？』

トポローフは何を小癪なと云はぬばかりに鼻頭で笑つてゐた。ネフリユードフの云ふ事はトポローフが自ら任する遠大なる政治上の立場から見ると盡く小癪極まつた不當な言草であつた。

『單に一個人の私しの見地から見たなら或は爾う思はれるかも知れませんが、』

とトポローフは、『政府の公けの立場から見ると其處に大きな徑庭がある。併し今日は之で失敬せにやならぬ、』と輕く頭を下げて手を出した。

ネフリユードフは無言で手を握つて急遽いで外へ出たが、這般な男と握手をするではなかつたと後悔した。

『人民の利益だと！　人民の利益か呆れる。汝達の利益を云ふンだらう、』とネフリユードフは歸らうとして不斗心中に思ふと同時に、正義を維持し宗教を保護し人民を教育すべき筈の法律を强行されたる人達の身の上が忽ちムラ〳〵と浮いて來た。酒の拔賣をして罰せられた女や、竊盜罪に問はれた少年や、浮浪

罪に問はれた無通行券者や、放火犯に擬せられた放火人や、詐欺取財に問はれた銀行頭取や、取別けて都合の好い口供を取りたいばかりに拘留された可哀相なシューストワを初めとし、正教會の信條を破つた爲に罰せられた異宗門や、立憲政治を要求した爲に捕縛されたグールケーウチまでが順々に浮んで來たが、斯う云ふ連中が捕縛されたり收檻されたり追放されたりしたのは全く正義を蹂躙した譯でも不法な行爲を犯した譯でもなくて、畢竟官吏や富豪が人民から奪つた資財を自由にする邪魔になるからだ。成程政府の許可を得ないで酒の拔賣する女や、市中を騷がす盜賊や、革命黨の書類を隱匿したシューストワや、迷信を破棄する異宗門や、憲法を要求するグールケーウチやは渠等の爲には等しく邪魔物であつたらう。總て是等の官吏輩――叔母エカテリーナの良人を始めとして元老院の議官連や、上はトポローフから下は各省に詰めたる立派な堂々たる紳士連までが如此な事にヤキモキするは、畢竟自分達の邪魔になる眞實の危險分子を避けたいばッかりが一心で、斯ういふ事情の下に人民が難義してる事なんぞは一向お關ひなしである。

夫だから一人の罪なきものを罰するのを恐れて十人の罪あるものを不問に附する法の原則を忘れて、實際危險なる一人を除かんが爲に十人の危險ならざる人民までも併せて罰して了うのだ。云はゞ腐つた小部分を取棄てやう爲に大部分の善い場所までを切捨てゝ了うやうなもんだ。

如斯説明して了へば頗る簡單明瞭で何の事は無いが、併し餘り簡單明瞭過ぎるので却て容易に合點が行かなかつた。何故なら、是程に紛糾した現象が如此な簡單明瞭なる説明で解釋出來るものだらうか。正義とか法律とか信仰とか神とかいふやうな問題に關する言葉は畢竟殘忍なる我欲無情を包藏する言葉であると思べやうか知らん。

第二十八回

其晩ネフリユードフはペテルブルグを去る筈であつたが、マリエットと芝居で落合ふ約束がしてあるので、勿論這般な約束は反古にしたつて差閊ないと思つてゐたが、一端番へた言葉を破るは不善であるといふ平素の説を擔出して自ら欺きつゝ、

『此位な誘惑に勝てない事は無からう、』と少しは浮氣半分に、『最後の思ひ出に一番試さうかナ。』

と思ひ込んで、燕尾服で芝居へ駈附けると、丁度「椿姫」の二た幕目で、外國人の女俳優が肺病女の臨終の間際を目新らしい動作で見せる處だつた。

芝居は大入であつた。ネフリユードフは直ぐマリエットの棧敷へ鄭重に案内されたが、棧敷の外の廊下に立つてる禮服の家從はネフリユードフを見ると慇懃に會釋して直ぐ棧敷の戸を開けて呉れた。

向ふ側の棧敷に立つたり腰を掛けたりしてる人達や、平土間に聯んでる白髪頭や胡麻鹽頭や禿頭や縮れ毛頭の連中は何れも夢中になつて舞臺を見て、骨と

皮ばかりの役者が絹レースの衣裳で病苦に惱みながら、苦しさうな口跡で臺詞を陳べてるのを一心に聞いてゐた。

滿場は……水を打つたやうに寂としてゐた。其中で棧敷の扉の音が矢庭に寂寞を破つたので、同時に叱ッと云ふ聲が掛つた。で、冷りとしたのと生溫いのと二た流れの空氣がネフリユードフの面を撫でた。

棧敷にはマリエットの外にネフリユードフの知らない顏の、髮風の仰山な、赤い肩被を掛けた婦人と、二人の男が在た。一人はマリエットの良人の將軍で、脊の高い羅馬鼻の風采堂々たる嚴格な男で、胸のフカ〳〵した制服を着てゐた。最一人は見事な頰鬚を生やして順だけ奇麗に剃つた美男である。

窈窕婀娜たる纖細作りのマリエットは胸開きの廣い衣服を着てスッキリとした形狀の好い撫肩を露はし、頸筋の小さな黑子を見せて、ネフリユードフを顧盼きざまに、ニッと微笑し、扇でさし麾いて自分の後ろの椅子に着かした。マリエットの良人は沈着拂つて輕く頭を下げつ、他は此美人の持主だぞと云はぬばかりに妻と眼を見交した。

[illegible]

幕が閉ると滿場は拍手で壞るゝやうであつた。マリエットは椅子を離れてサヤ〳〵と絹の音をさせながら棧敷の後ろへ行つてネフリユードフを良人に引合した。

將軍は始終眼に微笑を含みつ、好い機にお目に掛つて喜ばしいと云つてから、無言で着席した。

『お約束しなかつたなら、』とネフリユードフはマリエットに向ひ、『今日歸る筈でした。』

『妾なんぞはスッポカシに遊ばしても、』とマリエットはネフリユードフの言葉の意味を想像しつ、『彼の名人だけは是非見て入らッしやらなければ。』と云ひつゝ良人に向ひ、『眞個に今の幕は、ネエ貴郎、宜うムいましたネ。』

良人の將軍は頷いた。

『那樣なものは拙者は何とも思はない。あれよりか眞物の最つと可哀相なものを澤山今日見て來ました。』

『爾う……先アお腰をお掛け遊ばしてからお話し遊ばせ。』

將軍は無言で聞いてゐたが、眼には段々と冷笑の色を增して來た。

『貴姐のお骨折で放免になつたアノ婦人ですナ。あれを尋ねました處が、長い、間の檻禁で全で精神が沮喪して了ひました。』

『ホラ、貴郎にお願ひした婦人の事でムいますよ、』とマリエットは良人に云つた。

『あア、左樣か、無事に放免となつてお目出度かつた。』と將軍は悠然と頷きつゝ口髭の下に冷笑を含んで、『我輩は御免を蒙むつて喫煙して來る。』

と云ひつゝ去つて了つたから、ネフリユードフは之からマリエットが何か特別な咄を持出すかと待構へてゐた。處が案外にも取留めた咄はなくて、一向何にも云出しさうな素振もなく、芝居咄ばかりを饒舌り散らして、ネフリユードフが如斯な咄を面白がると思つてるらしかつた。

マリエットが是非とも芝居に來て呉れと用ありげに云つたのは何も別段話したい事があるからでなくて、玉を削つたやうな眞白な撫肩と可愛らしい小さな黑子を露したゲバ〳〵しい夕化粧の美くしい處を見せたい爲めばかりだと讀めた。實に其嬋娟かさ美くしさは眼も醒めるばかりに鮮かであつたが、不思議に又何

とも云へぬ嫌な心持がした。

美しい表面の色こそ容易にネフリユードフの目を去らなかつたが、皮一重下に隱れたものが看透かされるやうな氣がして、其の艶色にこそ恍惚とするが、萬人の良民の涙と血を犧牲にして榮達するやうな良人に連添つて耻ぢない云はうやうなきお辯茶羅で、昨日話した事も唯の口頭の出放題で、眞實の腹は何が面白くてか知らぬが――恐らく當人にも解るまいが、斯くいふネフリユードフを蕩かさうといふより外ないのは良く讀めた。之が又憎くもあり捨て難くもあつて、何度も怫然として帽子を手に取つて歸掛けてはツイ思ひ切つて振切れずに躊躇した。

其内にマリエットの良人が濃い口髭に煙草の臭をプン〳〵臭はしながら戻つて來て、恰も眼中其人なきが如く傲然と輕蔑するやうにネフリユードフを下目に見た時は、有繋に憤然と座を離れて、尙だ戸を閉め切らない中に輕く會釋して外套を引抱へながら芝居を出て了つた。

ネヴスキイ通りを家へと歸る路すがら、道幅の廣いアスバルト道を行くと、

一歩前をシャナリシャナリと行くスラリとした脊恰好の仰山に粧し立つた女が我知らず目に留つた。顔と云ひ姿と云ひ淫らしさが漲つてるので通り縋りのものは誰でも顧盼つて見ないものはなかつた。ネフリユードフも足早に追越して振返つて其顔を見ると、美くしく化粧した顔に媚を含んでネフリユードフを流盼に見つゝニッと微笑した。すると如何いふわけだか不思議に偶つとマリエットを憶出し、芝居の桟敷で同座した時と同様な憎いのと薬て難いのとがチャンポンになつた變な氣持がしたので、足早にスタ〳〵と行過ぎて左っ右いつしながらモールスカヤの方角に折れ、堤通りをウロ〳〵と往つたり來たりしてゐたから、巡査が怪んで眤と見た。

マリエットも矢張あんな風に微笑して見せた。何方も同じ微笑だが、此女のは判然と公然に、「お氣に召したら買つて頂戴。御用がなければ勝手に行らッしやい、」といふ顔つきをしてるが、マリエットは他くまでも勿體振つて、「憚りながら妾は身分のあるもの、其様な卑しい根性は微塵も有りませぬ」と白ばくれてる。腹の底に入れば何方も同じだ。少なくも此方は正直であるが、片方は僞つてを

る。且此方は據ろなく爲てゐるのだが、片方は好んで憎むべき恐るべき情を弄んで自ら樂んでをる。例へば辻に立つ女は渇して飲を擇ばざる人に薦むる濁つた溜水のやうなもんだが、芝居の桟敷の彼の美人は不用意に近づく何人をも殺す毒水と同様である。

其時偶つとネフリユードフは貴族長の妻と以前の妙な恥づべき關係を憶出しつゝ、

『獣慾の人間に存在するは厭ふべきだが、獣慾が獣慾として存在する間は我々は高尚なる靈の生活から見て賤むが故に、堕落すると否とを問はず、人は依然として同じ人であるが、一度詩的とか美的とかの皮を被つて我々の尊敬を要求する時は、終には其中に呑まれて獣慾を崇拜し、善惡の差別を忘るゝに至る。誠に恐るべき哉！』

此理窟は初めて明白に解つて、丁度眼前に宮殿や番兵や城や河や船や株式取引所を歴然と見ると同様であつた。で、生中に物の見えるよりは黑白も分かぬ眞の暗黑の方が却て幸ひであるが、生憎に此北歐の夏の夜には安心して暢氣で

ゐられる眞の暗黑がなくて、何處からとも知れぬ薄朦朧した光が常にあると同樣に、ネフリユードフの心中も今では全く暗黑の無我夢中ではなかつた。

何も彼も皆判然して來た。世人が重大と思つてる事は總て憎むべき無意味なもので、贅澤な驕奢の中には昔から解り切つてる罪を作つてるが、善くも罰が中らないで、好き勝手な榮曜榮華をしてゐられたものだ。

が、斯ういふ現象は一切眼を閉つて忘れて了はうとした。が又、甚麽しても見ないわけに行かなかつた。ペテルブルグの全市を蔽へる光の源が解らぬと同樣に如何なる光明に由つて斯くも社會の眞相が明かに見えたか解らぬが、縱令薄朦朧した心細い光にもせよ、見えるものを見ない譯には行かず、我が心眼の開いたのは嬉しかつたが、扨て見えて來ると又情なくなつた。

第二十九回

モスコーへ歸ると直ぐネフリユードフは監獄病院にマースロワを訪ねて、元老院は前判決を確定したから愈々西比利亞へ行く用意に掛らねばならぬといふ氣の毒な顚末を話さうと早速出掛けた。且自分は內心では餘り望を置かぬが、辯護士が文按した陛下への請願書にマースロワの記名を求めやうと持參した。

不思議な事にはネフリユードフは今では强ち訴訟に勝たうといふ氣はなくて西比利亞へ行つて流刑人や徒刑囚と一緒に生活する考ばかりに屈托し、若しマースロワが放免されたなら二人の生活の結着を甚麽しやうなどとは全で夢にも思はなかつた。で、亞米利加の哲人トーローが奴隸制度の存在してる時分、罪なき者の束縛を認許する不義なる政府の下に義人の眞の住居とすべきは亦監獄であると云つたのを偶然憶出したが、ペテルブルグの社會を見てから後のネフリユードフは殊に此感が深かつた。

『其通りだ。今日の露西亞で正直な人間の住居に適する場所は唯だ監獄あるのみだ、』と腹の底に思ひつゝ、恰も馬車が監獄の塀の中へと入つた時、此考が身

にヒシ〳〵と迫さるゝやうな氣がした。

病院の玄關番はネフリユードフを覺えてゐて、其顏を見ると直ぐ、マースロワは既う此處には在ませぬと云つた。

『何處に在る？』

『檻房に在ます。』

『甚麼して復た檻房へ移られた？』

『それが貴下、那樣いふ人間てものは……』と玄關番も宛も輕蔑するやうに笑ひながら、『助手の醫者と味をやりましたんでナ、醫員長から追返されましたンで。』

ネフリユードフは呆氣に取られて了つた。今日のマースロワが這般な事を仕出來さうとはツイ今の今までも想像しなかつたから、意外な大不幸に遭逢はした人と同樣な心持がして、尋常でない心痛を覺えた。初めは顏に泥を塗られたやうな氣がして一時にカッとしたが、熟々考へればマースロワの心持が漸次に變つて來たと喜んでゐた自分の鈍さ加減が馬鹿馬鹿しく、泣いたり罵つたりして此方の心中立を頭から拒絕けたのは矢張自分を化かさうとする賣女の手練手管であつたかと思ふと、最後に會つた時、少と腑に落ちぬ事があつたのを憶出し、其樣な此樣なの考へが一時にムラ〳〵としたので、我知らず帽子を脫つて病院を出て了つた。

『さア、如何したもんだらう？』と自問自答した。『斯樣な不都合を仕出來されても猶だマースロワに粘着いてなけりやならぬか？　斯ういふ目に會つては既う自分の肩は拔けたものだらうか？』

と考へたが、同時に若し之で關係を絕つてマースロワを捨てゝ了つたなら奈何だ。自分はマースロワを罰して貰ひたいのだが、神はマースロワよりは必ず自分を罰するだらうと氣が附いて慄然と恐れた。

『いや、甚麼な事が有らうと初一念を變へてはならぬ。却て愈々益々發憤しなけりやならぬ。マースロワはマースロワで好き勝手な所爲をさせろ。若し助手の醫員と通じたなら勝手に通じさして置く分の事だ。それはマースロワの知つた事で、此方は飽くまでも自由を犧牲とすべく要求する良心の命ずるまゝに進

退して、縱令形だけなりともマースロワと結婚して天涯地角マースロワの行く處へ何處へなりとも隨いて行く初一念を決して變へてはならぬ、』と些と自暴氣味で獨語ちつゝ病院を去つた直ぐ其足で、大跨に力足を蹈んで監獄の宏大な入口へと行つた。

で、當番の受附に向つて、マースロワに面會したいから典獄に通じて呉れと取次を賴むと、此押丁はネフリユードフを覺えてゐたので、監獄内の重大な異動、即ち舊典獄が罷免せられて新たに嚴酷な典獄が任じられたと話しつゝ、

『唯今は非常に嚴重になりました。彼處に新典獄が在ますから直接にお訊きなさい。』

新典獄は忽ちッカ〳〵とネフリユードフの傍へ來た。脊の高いコッ〳〵した、頬骨の高い、陰氣臭い、何處となく間の抜けた男であつた。

『面會なら定日以外、面會室以外では許可なりませぬぞ。』

『イヤ、拙者は皇帝陛下に上訴する請願書に記名を求めに參つたンです。』

『そんなら請願書をお渡しなさい。』

『貴下にお渡しする事は出來ない。是非とも本人に直接面會して記名を要めたい。拙者は從前から何時でも面會出來る許可を得てをります。』

『前には許されてをつても……』と云ひつゝ典獄はネフリユードフを横目にジロリと見た。

『拙者は知事から特典を得てをります、』と云ひつゝネフリユードフは癪て懷中から免許書を出して見せた。

『失禮ですが、』と典獄は尙だ正面にネフリユードフを見ないで、金指環を穿めた長い膩氣のない白い指で免許書を受取りつ、靜かに讀終つて、

『夫では事務室へお來でなさい。』

事務室には誰も在なかつた。典獄は癪て卓子に取散らした書類を玩り始めたが、夫となく面會に立會はうといふ心持が見え透いてゐた。

其序にネフリユードフが國事犯のヅーホーワに面會出來ないかと訊くと、

『國事犯には面會を許しませぬ、』と言下に斷乎と拒絶けて見向きもせずに書類を調べてゐた。

リディアの叔母から頼まれた手紙を懷中するネフリユードフは傷持つ足のヒヤ〳〵して、何か罪を犯さうとして露顯したやうな氣がした。

其内マースロワが事務室に入つて來ると、典獄は頭を上げたが、二人の容子には眼も呉れずに、『さア、話をおしなさい、』と言つたまゝ書類を玩くつてゐた。

マースロワは頭髪を包んだ手巾から全身までが白いづくめの獄衣でネフリユードフの傍へ來つ、ネフリユードフの冷かな澁面作つた顏を見ると、ポウッと顏を赤くして上衣の緣を玩りながら伏目になつた。

其ドギマギした容子を見て取つたネフリユードフは、扨てこそ病院の玄關番が噂に違はぬと早合點みして了つた。

であるが、以前と少しも變らない心持で隔意なく打解けやうと思つても、何だか堪らなく不快な氣持がして、奈何しても握手する氣になれなかつた。

『今日は不快な話を仕に來た、』とネフリユードフは氣の乘らぬ聲でマースロワを見もしなければ手を取りもしないで、『元老院は控訴を棄却した。』

『妾、爾う思つてました、』とマースロワは息の塞つたやうな妙な聲で答へた。

以前ならネフリユードフは何故爾う思つてゐたと訊く處だが、今では唯マースロワを冷やかに見たぎりで、マースロワが眼に一杯の涙を含んでるのを見ても、其樣な事ではネフリユードフの心は中々和がないで、却て益々激昂して來た。

典獄は座を離れて室の中を往きつ戻りつ歩き始めた。

ネフリユードフは堪らなくマースロワが可厭で可厭でムカ〳〵して來たが、左に右く元老院の決定の不首尾を慰めるのが當然だと信じて、

『だが落膽する事は無い。皇帝陛下へ請願すれば必ず奈何にかなる。何卒ナアー』

『妾は其樣な事を思ッちやゐませぬ、』と云ッた時のマースロワの斜視の眼は濕んで哀れッぽかつた。

『其樣なら奈何する？』

『貴下は病院へ入來しッて？　多分妾の話をお聞きになつたでせう——』

『聞けば奈何するのだ。それはお前の事で拙者の知つた事ッちやない。』とネフ

リユードフは冷淡に云退けて苦い顔をした。今まで制へてゐた――顔に泥を塗られた心中の憤怒は一と言病院と聞くと忽ちムカ〳〵と頭を持上げ出した。

自分は堂々たる貴族の家柄で、如何なる家の娘なりとも自分の妻たるを榮としてをる。其身體を擲つて此女に與へやうと云ふのだ。然るに時の來るを待たないのみか、剩さへ病院の代脈づれと乳繰合ふとは、實に言語道斷の沙汰と、眞實、腹を立てずにはゐられなかつた。が、漸くに胸を撫りつ、

『さア、此請願書に記名しなさい、』と大きな狀袋から書面を出して卓子に廣げた。

マースロワは手巾の端で涕を拭きつゝ、何處へ何と書いたら可いかと訊いてから、卓上に向つて右の袖のカフを手繰し上げつゝネフリユードフの指示通りに記名しやうとした。其背後に無言で立つネフリユードフは、胸に迫り來る悲しさにワナ〳〵と肩を慄はすマースロワの後姿を見つゝ、自分の面目を蹂躙けられた恐恨と其の淺ましい心根を情なく思ふ不便の情とが混淆になつて、散三胸中で揉合つた末、到頭不便に思ふ情が勝つて了つた。

尤もマースロワを憫れむ念と、マースロワと同じ不埒な所爲をした何年前の自分の過去の罪業の憶出と、何方が先に浮んだか解らぬが、兎に角マースロワを憫れむと同時に自分も既往に顧みて深く耻入つた。

記名を濟ましてから、マースロワはインキに汚れた指を下衣で拭きつ、靜に起つてネフリユードフを眤と見た。

『如何なる事が起らうと、如何いふ事にならうと、拙者の初一念は少しも變らんのだ、』とネフリユードフは云つた。で、マースロワの不埒を寛大に見て了はうと決心が着くと共に益々不便の念が增して來たので、俄に言葉を柔げて、『拙者は一端番へた言葉は決して變へない。お前が何處へ伴れられて行かうと必ず一緒に行く。』

『飛んでも無い。御無用でムいます、』とマースロワは周章てゝネフリユードフの言葉を遮つた。が、其面は漸く晴々しくなつた。

『そんな事よりか道中筋に入用なものでも考へた方が好い。』

『難有うムいます。何にも別段要るものはムいませぬ。』

其時典獄が傍へ來たので、注意を受けない中にと、ネフリユードフは暇乞を告げて歸つたが、何時になく心は寛々として裕かに今迄に覺えのない平和と喜悅と愛念を何物に對しても感じた。マースロワの行狀が甚麼あらうと此方の情愛は決して變へまいといふ不動心が定ると、滿心喜悅の情が充滿て、從來に覺えない高調に達した。マースロワが病院の助手と懇ろにならうと甚麼しやうと、夫はマースロワの勝手で此方の知る事で無い。自分がマースロワを愛するは自分の爲めでなくてマースロワの爲なり、神の爲なりである。

處でマースロワが病院を追出され、ネフリユードフがマースロワに罪ありと早合點した實際の顚末は次のやうな次第で。

或る時マースロワが看護婦長の命令で廊下の端の藥局へ或る藥を取りに行くと、例の面皰だらけの脊高の助手が單獨で子然としてゐた處で、長い間マースロワを附け覗つてゐたから、矢庭にマースロワを取つて押へて捻伏せやうとした。マースロワは喫驚して强に振拖らうとして突倒すと、其機みに助手は頭を藥品棚に打つけて藥壜が二本轉がり落ちてガタンピシンといふ騷ぎだ。

爰へ折惡しく醫員長が見廻りに來て、壜のガラ〳〵破れる音が耳に入ると同時にマースロワが眞赤になつて飛出して來たのを見て、大喝して呼止めつ、

『こらッ、怪しい所爲をしたら赦さんぞ……此態は何だ？』と云ひつゝ續いて追駈けやうと飛出した助手を眼鏡越に屹と睨め付けた。

助手は莞爾々々しながら陳謝しやうとした。が、醫員長は耳にも入れずに靜かに頭を擡げて眼鏡の中から睨ッと見た。で、直ぐ其足で典獄の處へ行つて品行方正な女とマースロワを更任したいと申出て、事は何なく落着した。

之がマースロワの艶聞だが、斯ういふ情話が原因で病院を追出されるのはマースロワの身に取つては殘念で堪らなかつた。といふのは、抑もネフリユードフに會初めた以來フッ〳〵嫌になつた男の關係が別して近來は益々嫌で嫌で堪らなかつたに係はらず、男といふ男が從來の生涯や現在の身の上から推してマースロワを輕蔑つて、あの面皰面の書生ッぽまでがマースロワを好き自由に玩弄にする權利があるやうに思ひ、拒絶けられると却て不思議がるのが如何にも心外で、自分ながら情なくて涙が眼に一杯になつた。であるから、ネフリユー

ドフが今日見えた時、必ず病院で聞いて來たに違ひない此惡い評判の證明を立てたくて、一と言云ひ出して見たが、迚も信用して呉れさうもないので、生中に辯解だてするは却つて疑ひを增すやうなものだと、辛抱して口を緘むと共に涙が胸一杯に迫上げて來た。

マースロワは今だにネフリユードフの罪を勘辨しないで、二度目の會見に立派に明言した通り、何時までも憎み通してゐたかつたのだが、其實ネフリユードフに復た惚れて了ひ、何の氣はなしにネフリユードフの云ふなり次第となつて、酒も止めれば煙草も止め、お洒落までも止めて了つて、望のまゝに病院の看護婦の下働きまでした。であるから、ネフリユードフが結婚を申込む度に必ず斷乎と謝絶したは、一度口外した意氣地を貫かうとするよりは實は自分と婚禮するのがネフリユードフに取つて不利益なのが明白に解つてゐたからで、親切は身に染みて忝けないが、身を捨鉢の志は他くまでも受けまいと固く決心してゐた。が、ネフリユードフが今でも矢張自分を輕蔑して、以前の通りの賣女根性と信じて、生れ變つた自分の心持に氣が附いて呉れないかと思ふと口惜し

くて堪らず、此病院の濡衣を乾す由もないのが元老院で宣告の確定された話を聞くよりも最つと最つと情なかつた。

第三十回

マースロワは第一回の護送の中へ加へらるゝ筈だから、ネフリユードフも一緒に出立する支度をした。出立前に落着けて置くべき用事は澤山あつて、尙だ〳〵時間が澤山あつても到底盡く落着け切れないやうな氣がした。シカモ其用事たるや以前とは全で變つて、以前はネフリユードフなる一個人を中心とした利益を旨として强に作り出したる用事だけで、シカモ事々物々自家の利益を中心としながら矢張面倒で堪らなかつた。處が、今では全く利己を離れて他人の爲め働くのが何よりも愉快で面白くて際限なく引受けた。以前はネフリユードフ自分自身の仕事さへ厄介で迷惑極まつたが、今では他人の爲めの仕事を喜んで面白く引受ける事が出來た。

ネフリユードフが現在背負つてる仕事は三種類に分ける事が出來る。例の研究癖から三分した各緊要書類を三ッの書類夾みに分けて入れて置いた。

第一はマースロワに關する件で、皇帝陛下への上訴と、西比利亞へ出立する準備と、此二件を處理するのが重な用事であつた。

第二は所有地の處分で、パノーヴオ村では地代を以て村費に充てる約束で農夫に悉く土地を與つて了つたが、更に此約束を公正證書に作つて確定し、且夫に準じた遺書を作つて置きたいのだ。クスミンスキー村では初め處分した通りのまゝで、矢張自分が地代を取る筈になつてるが、更に此期限を定め、且自分の生活費若干を引去つて殘餘を悉く村費に充てる計畫を立てたいのだ。實は西比利亞へ行く費用が如何程要るか解らんので、半分までは收入を減じたが、尙だ全部を捨てる決心が仕兼ねるのだ。

第三は一日增しに縋つて來る囚人を助けやうとする件である。

初めてネフリユードフが囚人から救助を求められた時は成る可く彼等の荷を輕くしてやりたいと思つたが、段々多勢に縋られると、到底獨力では囚人全體を助ける事が出來ないやうな氣がしたので、其結果自づと他の方面に手を出すやうになつて、爰に又第四の仕事を生じ、之が一番興味を生じて來た。

此新方面の仕事と云ふは卽ち次の問題の解決である。元來刑法と名くる奇怪な制度は何である――此制度あるが爲に或る範圍までは親しく實地を見分した

監獄なるものを到る處に設け、ペテルブルグのペトロパウロースキイから薩哈嗹島に至るまで數百ケ處の監獄に數萬の犧牲を收容して苦めてをる。如何して如此な奇怪な制度が成立つてをる？　抑も何處の國から此刑法は濫觴したものだらう？

自分が親しく罪人に接した經驗や、入獄中の罪人が書いたものや、或は辯護士や監獄教誨師や押丁達に訊いて得たる知識から結論すると、囚人卽ち所謂犯罪者は五級に分つ事が出來る。

第一は裁判上の錯誤で罰せられたる眞實の無辜の民卽ち放火犯のメンショーフやマースロワの類で、其數は甚だ少く、教誨師の計算では百分の七位ださうだが、彼等の事情は殊に興味あるものである。

第二は姦婦とか酒の上とか乃至一時の感情とかいふ或る特別の事情が作つた犯罪――恐らく其境涯に臨めば彼等を裁判した當路者でも隨分行り兼ねまじき犯罪で、ネフリユードフの觀察では罪人の過半は此階級に屬してる。

第三は犯罪者自身では當然な行爲とし隨分善事とさへ思つてるものを立法者

側から見て犯罪と見做すのである。例へば政府の免許を得ないで酒を賣るとか、通稅をやるとか、大地主の所有地又は御料林の下草や小枝を取るとか、或は高加索の山賊（高加索の山間の民を云ふ。彼等は久しき以前露國に征服せられたが、猶ほ露國の官吏を常に敵視してをるのだ。）とか、或は教會のものを持つて行く未信者とかの類である。

第四は普通社會の平均思想よりは道德上進歩したる概念を持つ爲に禍ひを買ひたるもの、卽ち異安心を唱へる宗教家、獨立を欲する爲に反旗を擧げる波蘭人又はサーカシヤ人、及び國事犯、社會黨、同盟罷工の類で、ネフリユードフの觀察によれば此階級に屬するものは頗る多く、中には權勢に抵抗した爲に處分された立派な人物があつた。

第五は社會に害を及ぼしたよりは寧ろ社會の爲に迫害された徒輩、卽ち社會の絕間なき壓制或は誘惑に由つて愚にせられた浮浪人、例へば席を盜取つた少年を初め其他數百人、ネフリユードフが監獄の內外で目睹したもの多くは此類である。彼等の境涯は秩序を追うて所謂犯罪の行爲に導くやうに出來てるので、ネフリユードフが近日目前に見た澤山の盜賊や人殺しは大抵此階級に屬するも

のだ。近頃の新派刑事人類學者が罪人の典型と稱する喪心墮落したる低能の動物は矢張此中に屬し、其存在を以て刑法及び刑罰の必要なる所以の重大なる理由とするが、ネフリユードフの考だと、斯ういふ墮落喪心した不健全なる典型は卽ち社會が雷に當人を直接迫害したばかりでなく、遠く過去に遡ぼつて見ると、其兩親や祖先に對しても矢張迫害を加へてゐた結果である。

此最後の階級に屬する犯罪者の中でネフリユードフが取別け驚いたのはオホーティンと云ふ根强い盜賊である。素性は娼妓の私生兒で、木賃宿に育ち、極若い時から盜賊仲間に入つたが、三十になるまでは巡査以上の道德ある者に一人も出會つた事がないのだ。天性頗る頓才があつて、誰にも氣に入る男だつた。ネフリユードフに救けて呉れと頼んだ時も當人自身は本より裁判官や監獄や刑法や神の掟までも茶にし切つてゐた。

最一人はフヨードロフと云ふ美男の盜賊で、一隊の盜賊の頭領となつて或る老官吏を殺して金を奪つた。此男は不法な處分に會つて家も田地も沒收されて了つた農夫の小倅で、ツイ近頃まで兵役に服してゐた時も或る士官の情婦に惚

[1] Ohotin
[2] Fyodorof

れた爲め痛い目に會つた。極面白い熱し易い男で、暢氣に遊びたがつてばかりゐたが、ついぞ一度、其原因は何にてもあれ、自分から辛抱して道樂を罷めたといふ男に會つた事もなければ道樂を外にして人の一生の目的があるといふ話を一と言も聞いた事が無い。偖々此兩人を見るに二人とも本來は美性を持つて生れて來たのだが、畢竟野育ちの木のやうに放擲らかしにされて不具にされて了つたのが歴然と解る。尙だ此外に一見厭ふべき懶惰漢や人非人の浮浪人や女が有つたが、斯ういふ人間にさへ伊太利學派の刑事人類學者の所謂罪人的典型は些かの痕跡だに見られなかつた。勿論、中には鼻持もならぬ可厭な奴もあつたが、此可厭さ加減は燕尾服を着たりエポレットやレースの飾を附けたりして意氣揚々たる監獄外の所謂貴顯紳士を見て嘔吐を催すと同じであつた。

然るに同じ種類の人間でありながら、一は監獄に投ぜられ、一は自由に羽根を延ばして、剩さへ道德上には何等の識見も無いくせに、唯境涯或は廻り合せが惡いばつかりに人間の作つた法律に觸れた薄命者を裁判するといふは抑も何故であらう？

此解答を得たいばかりにネフリユードフは此の問題に論及した種々の書籍を渉獵した。ロンブロゾとかガロファローとかフェリーとかリストとかモーズレーとかタードとかは悉く集めて一心に精讀した。

が、讀めば讀む程益々解らなくなつて失望した。尤もネフリユードフばかりでなく、世の中の學者になる爲でも著述する爲でも議論する爲でも教授する爲でもなくて、唯日に生ずる人生の活問題を解決せん爲ばかりで科學に望む人達には度々ある例で、科學は種々の精密繁瑣なる千百の問題に答へるだけで自分が解決せんと欲する根本の疑問には少しも觸れてをらんのだ。

そこで極簡單なる疑問が生じた。『如何なる理由、如何なる權利あつて殆んど位置を換ゆれば同一なる或る人間が他の人間を縛つたり押込めたり撲つたり叩いたり追放したり殺したりする事が出來る？』

此疑問の解答として次の議論が生じて來た。元來人間が意志の自由を有つてるだらうか。犯罪の證候が腦蓋を檢査すれば果して解るものだらうか。遺傳が犯罪の如何なる部分に現はれてるだらうか。果して不道德は遺傳されるものだ

らうか。抑も道德とは何ぞ。癲狂とは何ぞ。墮落とは何ぞ。矯風とは何ぞ。氣候や食物や無學や摸倣や催眠作用や感情やが如何なる影響を犯罪に與ふるや。將た社會とは何ぞや、義務とは何ぞや——曰く、何、何、何。

と、後から後からと疑問が續々生じて來たが、其途端偶つと、何時ぞや學校から歸りがけの小兒に向つて問答した事があつたのを憶出した。ネフリユードフがお前は字を稽古したかと訊くと、

『あア、書けるよ、』と小兒は答へた。

『そんなら足といふ字は如何書くエ？』

『犬の足かエ、何の足かエ？』と小兒は狡猾い眼をして見た。

ネフリユードフの根本問題に對して學術書類の答ふるものは恰も此問答に頗る能く似てをる。種々有益な面白い智識が山程書いてあるが、如何なる權利あつて或る人が他の人を罰するかと云ふ根本問題に對しては何とも答へてをらんのだ。加之ならず、總ての說は刑罰の必要を原則と定めて置いて、然る後に刑罰を說明し且主張してをるのだ。

ネフリユードフは益々讀んだ。が、飛び〳〵の走り讀だから、這般な淺薄な讀み方で解決を得やうとするが無益であるのが頭から解つてるので、解決らしき答が度々生じて來ても其答が眞理だとは決して信じられなかつた。

第三十一回

マースロワが加はつてる一團の罪人は七月五日に護送される筈で、ネフリユードフも同日一緒に出立するべく準備した。

其前日ネフリユードフの姉夫婦は態々田舍から弟に會ひに上京した。

ネフリユードフの姉ナターリヤ・ロゴヂンスカヤ[1]は弟よりは十歲年長であつた。ネフリユードフは半ばは此の姉のお庇で生長くなつたので、小兒の時分から可愛がられ、姉が嫁に行く前、二十五と十五の齡違ひであつたが、同じ年輩のやうに仲善くしてゐた。其時分姉は今では死んで了つたイルテーニエフといふ弟の朋友に惚れてゐた。姉弟共に此イルテーニエフが好きで、互に賴もしい處を見付け合つては、人間が互に睦まじくし合ふ樞の清淨潔白なる愛情で仲善くしてゐた。

然るに其後、ネフリユードフ姉弟は二人ながら墮落して、弟が軍隊に入つて放蕩生活を送れば、姉は生慾の戀に騙られて到頭嫁入して了つた。シカモ其對手の男たるや到つて野卑下劣な人物で、ネフリユードフ姉弟が其頃一番大切に

[1]Natalya Rogozhinskaya
[2]Irtényf

一番神聖に思つてる事などは一向頓着しないで、ナターリヤの生命と頼む完全な道德や人間の義務に對する心持が解らないで、唯世間に衒ふ野心や虚榮とばかり思つてゐた。

其上に、名もなければ金もなく、唯自分の職務に勉強するといふばかりの男だが、保守主義とも自由主義とも何方附かずの中ぶらりんで、時と場合の都合次第で何方にでもなる世渡り上手で、殊に婦人達の氣に入る一種の伎倆で權門家のお臺處の御機嫌を取つて、割合に目覺しい官海の出世をした。ネフリユードフと親昵になつたのは外國漫遊中で、其頃は最う青年ではなかつたが、矢張好い加減に齡を食つてゐたナターリヤを騙し込んで了つた。ナターリヤの母親は勿論此縁組を不釣合だと云つて喜ばなかつたが、併し出來たものは據ろなくて二人は結婚して了つた。

ネフリユードフも表面は何喰はぬ顔して内心の不平を包み蔽せやうと煩悶してゐたが、實は此姉婿が頗る氣に入らなかつた。

最も氣に喰はなかつたは此姉婿の下卑た根性と狹隘ましい己惚れ了簡であつ

たが、夫よりも尙だ腹の立つのは這般な卑劣な下司男に自分の姉が生命を打込んで夢中になつて、男の爲の心中立に己れの美質をすら捨てゝ了つた事だ。

何時でもネフリユードフは自分の姉が這般な鬚ムシャの頭の頂邊が禿げてテカ〳〵光つてる己惚れ男の妻に爲つてるかと思ふ度毎に腹が立つて、二人の間の罪も無い小兒までが憎くてならず、懷妊したと聞く度毎に、赤の他人と思つてる此下司男に復た姉が怪しからぬ事をされたかと、情なくて堪らなかつた。

男一人女一人の二人の小兒を家へ殘して置いて、姉夫婦はモスコーへ上つて一等旅館の一等室に宿を取つた。ナターリヤは直ぐ亡母の昔の屋敷へ行き、留守居のアグラフーナから弟は今では屋敷に在ないと聞いて直ぐ下宿へ尋ね、案内も乞はずに畫日から一日洋燈の點いてる暗黑な廊下まで來ると、汚臭い男が出て來て、ネフリユードフは不在だと云つた。

が、手紙を書殘して置くからと云つて弟の小さな座敷に案内して貰ひ、二タ間續きの狹い部屋を左見右う見て、綺麗好きな井然とした秩序の能い弟の氣風が現はれてるのは昔からの通りだが、周圍の餘り質素を極めてるには呆れて了

つた。卓子の上には見覺えあるブロンヅの犬の首の附いた文鎭があつた。加之、ならず、書類夾みや書物を叮寧に重ねた鹽梅や、ヘンリー・ゼオルジや其他の刑事學に關する英佛の書籍を堆く積んだ中に、讀半しと覺しきタードの著書の間に大きな弓形の象牙の紙刀を夾んだ具合は昔から看馴れた通りだ。

ナターリヤは机に向つて、是非此日に尋ねて、來てくれと手紙を書殘しつ、目前の部屋の容子が餘り質素なのを呆れて首を傾げつゝ旅館に歸つた。

ネフリユードフ一身に就てナターリヤが現在氣が揉めた二大事件がある。一ツはカチユーシャと弟の婚禮沙汰で、今ではモスコーに誰知らぬものはないほどの評判である。一ツは一切の所有地面を悉く農夫に與つて了つた事で、之も中々な評判で、危險な政治的性質を帶びてるものとして多勢を愕かした。カチューシャとの結婚一條は小供の時からのネフリユードフの氣象、嫁に行く前まではナターリヤも矢張共通してゐた氣象では左もあるべき事と、內心實は潔よい覺悟を感服してゐたが、併し對手にも由りけりで、這般な人殺しの嫌疑を受けるやうな恐ろしい女と婚禮するといはれては矢張氣が揉めて堪らず、所詮一徹な

……弟の小さな座敷に案內して貰ひ、二タ間續きの狹い部屋を左見右見して、綺麗好きな非然とした秩序の能い弟の氣風が現はれてるのは昔からの通りだが、周圍の餘り質素を極めてるには呆れて了つた。

弟が一端思立つた事を留めたからッて留らないのは知れてるが、左に右く力限り骨を折つて思留らせやうと決心して來た。

最う一件の農夫に土地を與つて了つた事は實はナターリヤは格別何とも思はなかつたが、ナターリヤの良人は非常に憤慨して、姉の力で強に弟を制へ付けさせやうと妻を說得した。ロゴヂンスキイが曰く、斯の如き行爲は矛盾、輕卒、及び高慢の最高頂で、若し强て說明するなら高慢が增長した餘りに新奇を衒つて人に傲り人に評判されやうといふより外ないのだト。

『農夫が各自の町村費に充てる爲め地代を拂ふと云ふ條件で地面を呉れて了うといふは何の意味だ。若し地面が不用なら農業銀行の手を經て賣つて了つたら善ささうなもんだ。元來了簡方が解らない。實に狂人の沙汰だ。』

這般な理窟を吐き散らしてプン〳〵怒つて、ネフリユードフを法律上後見を要する人間と心劍に思込んで、先づ左も右くも此奇怪な計畫を思止まらせるやうに弟に勸告しろと妻に吹込んだ。

第三十二回

ネフリユードフは其晩歸つて姉の置手紙を見ると直ぐ會ひに行つた。丁度、ナターリヤは一人で、良人は次の室に休んでゐた。緊密と適つた黑い絹の衣服の胸に赤いリボンの飾を付け、當世風に眞黑な髮を縮らして結んでゐた。

ナターリヤは良人と同齡だから、少とでも若く見せて良人の氣に入るやうにといふ苦辛がお化粧に歷々としてゐた。

弟の顏を見ると飛立つやうに席を離れ、サヤ〳〵と絹の音をさせながら飛付いて接吻しつ、更に嫣然と顏を見合はした。で、何にも云はずに眼と眼と看交し、其微妙な眼の色に口では迚も云はれない眞正の情愛を十分に含ました。が、驚て口に出したものは最う眞實ではなかつた。二人は母親が死んだ以來會はなかつたのだ。

『姉さんは、大層肥つて若くなつた。』

とネフリユードフが云ふと、姉は嬉しさうに唇を動かしつ、

『貴弟はお痩せなすつた。』

『ロゴヂンスキイさんは相變らず御機嫌ですかネ？』

『はア、難有う。今、隣りの部屋で休息してゐます。昨夜は微宵眠なかつたもんだから。』

二人ながら云ひたい事は山ほど有つたが、口には容易に出て來ないので、二人共に云殘した分を顏の色に見せた。

『貴弟の下宿へ行きました。』

『爾うでしたッてネ。實は拙者一人の住居には家が餘り廣過ぎて、淋しくて仕樣が無いから下宿へ引移りましたが、あの家ですナ、那樣な家は拙者は要らぬから姉さんにお讓りしませう。造作一式から家財諸式悉く貴姉にお讓りしませう。』

『其樣な咄をアグラフーナから聞きました。妾が頂戴するのは誠に結構だが、併し——』

恰度旅館の給仕人が銀製の茶道具を持つて來たので、二人は口を噤んで了つた。ナターリヤは直ぐ支度に掛つて茶を煎れたが、其間二人とも無言でゐた。

ナターリヤは聽てキッとなつて、

『妾は悉皆聞きましたよ。』と云ひつゝ、眦とネフリユードフを見た。

『拙者の事をですか。夫りや先ア何よりです。』

『ですけれども那樣いふ職業をしてゐた女が巧く矯正る希望がありますかエ？』

ネフリユードフは小さな椅子に行儀よく腰を掛けつ、姉の言葉を能く理解んで眞直ぐな答をしやうと一心に聞いてゐた。唯つた今がたマースロワと會つて勘忍ならぬ勘忍をした時の寛裕した心持が今でも伸んびりとして、誰に向つても城府を設けないで奥底なく快よく話す事が出來た。

『女は如何でも、先づ拙者の方から心持を矯正したいと思つてます。』

ナターリヤは嘆息しつ、

『結婚をしなくても何か他に方法が有りさうなもんですネ。』

『有るかも知れませんが、結婚するのが一番上策だと思ひます。且マースロワと結婚すると拙者のやうなものが役に立つ方面に出られます。』

『ですけれども那樣なものと結婚して貴弟が幸福だとは思はれませんネ。』

『拙者一個の幸福如きは問題にはなりませぬ。』

『無論爾うでせうがネ、併しマースロワだつて心あるものなら矢張幸福な事はありませんワ。元來なら辭退する筈です。』

『仰しやる通りマースロワは辭退します。』

『夫れ其通り、妾には善く解つてますワ。人の一生てものは――』

『成程――人の一生てものは？』

『其樣な事よりか最つと違つたものが大切でせう。』

『違つたものと云つた處で、結局吾々は正しい事をするといふ外は有りますまい、』とネフリユードフは云ひつゝ眼の緣や唇邊にいくらか小皺が寄つても尙だ美しい姉の顏を見た。

『貴弟のいふ事は少しも解らない、』と姉は吻と嘆息を吐いた。

『大分姉も變つて了つたナ、』とネフリユードフは心中に思ひつ、婚禮前のナターリヤから自分が小兒の時分の數へ盡せない種々雜多の咄を憶出して眷かしいやうな氣がした。

其時ロゴヂンスキイは次の室から入つて來た。例の通り昂然と身を反らして胸を突出しつ、シトシトと氣輕に靜かに例の眼鏡、例のツル〳〵とした禿顱、例のテカ〳〵した眞黑な鬚で、

『御機嫌能う、〳〵、』と故意と言葉に力を入れて會釋しつ、慇懃に手を握り合つてからフツリと安樂椅子に腰を落して、

『お話のお邪魔ですか。』

『イヤ何、拙者は自分の話を人に秘すやうな事は嫌ひです。』

と云つたが、ロゴヂンスキイの毛むくぢやらな手を見、尊大振つた己惚れ聲を聞くと今までの溫かな心持が忽ち失くなつて了つた。

『なアに貴郎、ドミートリの一身上の相談をしてる處です、』とナターリヤは云ひつゝ、急須を取つて、『お茶を上げませうか。』

『一つ注いでお呉れ。一體如何いふ御相談かネ？』

『何アに、何でもない事。拙者が昔し過つて墮落させた女が多勢の罪人と共に西比利亞に護送されますから拙者も一緒に同行しやうといふ件で。』

『其の事なら唯一緒に同行するばかりでなく、其以上の計畫があるやうに聞いてますが。』

『爾うです。女さへ得心すれば婚禮する筈で。』

『全くですか。お差閊がなければ腹藏ない處を伺ひたいものだ。何分我輩には君の眞意が理解めない。』

『拙者の心持と云ふのは此女が――イヤ此女の墮落した第一歩がですナ――』

とネフリユードフは適當な言葉が思出せんのでセカ〳〵して、『拙者の心持は、拙者こそ實は此女を墮落さした罪人であるのに、拙者は咎められんで、女の方が却て刑に宣告されたンだから……』

『だが、其女だつて處刑されるッてのは矢張罪があつたンでせうナ。』

『イヽヤ、全く罪が無いのです。』とネフリユードフは何も夫程一生懸命にならずとも可いのにヤッキとなつて詳しく話して聞かせた。

『夫は怪しからぬ。陪審員に爾ういふ無茶な決定をさせるといふのは裁判長の不注意極まつてる。併しさういふ場合には元老院といふものがある。』

『處が元老院でも控訴を棄却しました。』

『すると、元老院で棄却されたのを見ると矢張控訴する理由がなかつたのですナ、』とロゴヂンスキーは眞理は司法上の決定以外に無いといふ今の俗論を明かに承認するらしく、『だが、若し實際錯誤があるなら、皇帝陛下に請願する事が出來る筈です。』

『陛下へは請願書を出しました。併し成功する見込はありません。何故なら先づ司法省へ照會するでせう、司法省は元老院へ交渉しませう。すると元老院は判決を繰返して答へるから結局同じ事です。』

『いゝや、司法省は決して元老院に交渉しない。』とロゴヂンスキーは高慢臭い微笑を浮べつゝ、『さう云ふ場合にば直ちに前の刑事裁判所に命じて一件書類を悉く取寄せて調べる故、若し裁判上の錯誤があれば直ぐ解る。であるから全く罪の無いものなら決して處刑される事はない。偶には罪が無くて處刑される異例がないではないが、先づ處刑されるものは大抵罪があると見て差支ない、』とロゴヂンスキーは傲慢に言放つて得意然と微笑した。

『拙者の考は全く反對だ、』とネフリユードフは姉婿の態度が癪に觸つて堪らず、『恐らく法律に由つて罰せられたる罪人は大抵悉く無辜の良民だと固く信じます。』

『無辜といふのは如何いふ意味で？』

『文字の示す通り何等の罪が無いと云ふ意味で。例へばマースロワは誰も毒殺した事はないのに殺人犯に照されてをる。此頃會つた或る男なども矢張夢にも覺えのない殺人犯を擬せられてをる。又或る正直な母子の者が放火犯――實際は燒けた家の主人が自ら火を放けて置いて何にも罪の無い母子に塗付けた放火犯に問はれやうとしてるといふに到つては奇怪千萬ぢやアムらぬか。』

『夫はナ、裁判上の錯誤と云ふものは始終有りもしやうサ。所詮人間の作つた制度なら完全無缺て譯には行きません哩。』

『夫れのみでなく、自分が育てられた此社會が惡事と認めてる事を犯しても、自分では罪だと思はないものがいくらもある。』

『烏渡お待ちなさい。君のお言葉だが、么麼な盗賊だつて人の物を盗むは善く

ない、盗んではならぬ、盗むのは不正だ位は能く知つてますよ、』とロゴヂンスキーは沈着拂つて高慢臭い輕蔑するやうな微笑を洩らしたので、ネフリユードフは怫然として、

『處が知つてをりませんワ。といふのは、渠等は世間からは盗賊してはならぬと云はれてるが、併し工場の主人が賃銀を値切つて勞働を盗み、政府が租税の名目で官吏の手を經て人民の金を盗んでるのは渠等も亦能く知つてる。』

『夫ぢやア全で無政府黨員の云草だ。』

『無政府黨か何か知らんが、爾ういふ事實があるといふのだ。貴下方が目する罪人ですナ、渠等は政府が人民から金を奪ふ事を知つてる、吾々貴族が萬人の共有たるべき土地を長い間渠等から奪つてた事を知つてる。然るに元來自分達も共有すべき權利ある土地から煮炊をする爲め小さな枝一本でも取つたら直ぐ捕まつて牢へ打ち込まれて盗賊呼ばゝりされる。けれども渠等は土地を奪つた地主の方が自分達より餘程盗賊なのを知つてるから元と〳〵奪られたものゝ幾分を回復すのが當然の道で、盗賊とは決して思つてをらんのだ。』

『我輩には到底解らぬ。縱令多少解つたにしても同意は出來ぬ。土地といふものは誰かの所有でなければならぬ。若し君が所有地を分配する氣なら――』とロゴヂンスキーは悠々と沈着拂つて、ネフリユードフを社會黨であると飽くまでも信じ、社會黨は總ての土地を平等に分配すべきものと主張するが、斯の如き土地分配は甚だ愚を極めてる事は容易に説明出來ると云つた。『今日君が平等に分配しても明日は又勤勉で智惠のある者の手に入つて了う。』

『誰も土地を平分しやうなンぞと思つてるものはない。土地といふものは誰の所有としてもならぬものだ。買つたり賣つたり貸したり借りたりすべき性質のものぢやアない。』

『所有權てものは生れながら人に在る。所有權が無ければ土地を開拓する目的が失くなつて了う。であるから所有權の破却は乃ち人間を野蠻の狀態に驅つて了う。』とロゴヂンスキーは斷乎と言切つて、土地私有は爭ふべからざる眞理で、人に土地を所有せんとする希望あるは卽ち土地所有の權利ある證據だといふ定り切つた俗論を繰返した。

『先ア待ち賜へ、』とロゴヂンスキイは一言も云はせないやうに畳掛けて、『我輩は自分や自分の子孫の爲に云ふのでは無い。我輩は幸ひに一家を安樂に過すだけの資産を作つたから子孫の事は最う安心してをる。我輩は我輩の資産を子孫に傳へれば濟むのだから、君が如何なる事をして什麼ならうと我輩一身には更に痛痒を感じない。夫だから決して我輩一身の利害から云ふのではなく、主義の上から君の說に同意出來ないから尙ほ十分に熟考し且最う少と公平な健全な書を讀むやうに忠告する――』

『御親切は難有う。だが拙者一身の事は拙者の自由に委してお置きなさい。夫からドンナ書物を讀まうと拙者の勝手で君の知つた事ではない。』とネフリユードフは顏色を變へて云つた。で、手が冷え切つて龜手んで了つたので、何にも云はずに茶を一と口喫んだ。

『夫は反對な話で、何人も土地私有が出來なくなると、今日の地主のやうに犬や豚同樣ゴロ〳〵寢てばかりゐられなくなる。土地は眞に勞働するものに使用せしめて愈々益々開拓出來る。今日のやうに怠惰者の地主を廢して了つて初めて土地の利用が盛んになるわけだ。』

『君の言ふ事は餘程氣が觸れてるとしか思はれない。土地所有權の廢止なんて猶だ〳〵今日の時代に出來るもんか。失敬だが君、我輩直言するが、君の云ふのは矢張君が例の癖の變人論サ、』とロゴヂンスキイは顏色を變へて聲を慄はした。餘程此問題が癪に觸つたものと見えた。『我輩切に君に忠告する。愈々實際に解決する意なら、其前に猶ほ十分此問題を熟考して貰ひたいもんだ。』

『君は何かエ、拙者一個の身上に就て云ふのかネ？』

『爾うとも、吾々如き特別な位置に伴ふ責任を盡さなければならない。我々が祖先から相續した現狀を維持して之を子孫に傳へなければならんのだ。』

『拙者は却て――』

第三十三回

『小兒達は如何してます』とネフリユードフは聽て沈着いて來てから姉に訊いた。

ナターリヤは、小供達は祖母さんと一緒に溫和なしく留守居をしてゐると答へつ、良人と弟の議論がお終ひになつたのを喜んで、昔しネフリユードフが小兒の時に黑奴だの佛蘭西女だのと名を付けた三ッの人形を對手に遊んだやうに自分の小兒達も矢張人形を翫弄に旅ごッこをしてゐると話した。

『姉さんは能く昔しの事を覺えてますナ？』とネフリユードフは笑ひながら云つた。

『覺えてなくてサ。家の小兒も矢張同じ樣に遊んでるのだよ。』

二人の面白く無い議論が漸とこさとお終ひになつたのでナターリヤも安心したが、弟にばかり解る話を良人の前でするのを遠慮して、三人が三人に解る浮世話を初めやうとして、カメンスキーの母親が唯つた一人の子を決鬪で失くした氣の毒な噂をした。ペテルブルグで大評判な此事件はモスコーまでも噂が擴

がつたのだ。ロゴヂンスキーは法律一點張だから現行刑法が決鬪で人を殺したのを普通の殺人犯から除外してるのが大不服でブツ〳〵サ小言を云つた。

何も彼も法律づくめで、法律にさへ觸れなければ能事畢れる如く思つてるロゴヂンスキーの言草が片腹痛くて、ネフリユードフは復た議論をオッ初めやうとした。が、二人ながら思ふまゝを口に出さないで、腹の中でばかり持說に嚙り付いて、無言で鎬を削り合つてゐた。ロゴヂンスキーはネフリユードフが心中自分を擯斥し自分の職業までを輕蔑してるのを知つてゐるから、奈何がなしてネフリユードフの間違つた議論を說伏せてやりたかつた。

ネフリユードフは又、自分の所有地の處分にロゴヂンスキーが要らざる餘計な干涉をするのが氣に喰はなかつた。（尤も內心の內心ではロゴヂンスキー夫婦初め兒供までがネフリユードフ家の財產相續者として容喙する理由のあるのを認めてゐないではないが。）加之ならず、ネフリユードフが愚劣なり罪惡なりと信じて少しも疑はないものを宛も正當な理に合つたやうに沈着き冷ましてるのが癪に觸つて、

『法律で么麼します？』

『決鬪で人を殺したものも矢張普通殺人犯同樣に鑛山へ徒刑に宣告するが宜いのサ。』

ネフリユードフの手は復た冷えて來た。

『何故又爾うしたら宜いのです？』

『夫が卽ち正義ぢやないか。』

『すると正義を法律の目的としますかエ？』

『正義を目的としないで、何を目的とする？』

『正義よりか寧ろ或る階級の利益の維持を目的としてゐるやうですナ。拙者の考だと、法律は吾々の階級の利益の爲に現在の秩序を維持する機械に過ぎんと思ふ。』

『夫は頗る新說だ。』とロゴヂンスキーは沈着拂つて莞爾々々しつゝ、『普通の解釋だと法律の目的は君の說とは全で違つてをる。』

『學理では爾うかも知れんが、實際は大に學理と違つてる事を拙者は發見した。

事實に於て法律は唯現狀維持をのみ目的としてをればこそ、普通平準以上の思想を抱いて社會の組織を高めやうとする所謂國事犯や又は平準以下の人間卽ち所謂罪人の典型なるものを檢擧し且刑に處するのぢやアないか。』

『全然承服出來ない。第一、國事犯て奴は平準以上の思想を持つてるから罪せられるンではない。大抵は君が平準以下と目する罪人の典型と同樣に、其行方こそ異なつてるが矢張社會から擯斥されてる無賴の破落戶に過ぎんのサ。』

『だが、拙者は現に精神上遙に裁判官より勝つてる國事犯をイクラも知つてをる。又異安心を稱へる宗敎家も矢張道德上――』

と云ひかけたが、ロゴヂンスキーは常から餘り人に反對された事がないから、ネフリユードフの言ふ事を頭で耳にも入れずに益〻憤激して、自分の思ふ事ばッかりを云はうとして、

『我輩は絕對に主張する、法律の目的は現狀維持ではない、却て現狀を改良する――』

『改良？　成程、監獄などは立派な改良法ですナ！』とネフリユードフは橫槍

を突込んだ。

『監獄は卽ち、』とロゴヂンスキーは益々剛情に、『社會を紊亂する無賴の人間を社會から隔離する爲だ。』

『夫が出來ない相談だ。今の社會は罪人を何うも斯うも出來んのだ。』

『えッ、何だッて。何が何だか我輩には全然解らん、』とロゴヂンスキーは强に推出したやうに笑つた。

『解らなければ說明しませうが、拙者の考だと、昔の刑罰は尻ッぺたを叩くとか、黥をするとか、でなければ直ぐ首を刎ねて了うのだが、猶だしも此刑罰は合理だと思ふ。今では人間の心が段々と生鈍になつて了つた。』とネフリユードフは云つた。

『之は又君の口から意外な珍らしい說を聞くもんだ。』

『體刑と云ふ奴は人の身體に傷を付けるから何時までも忘れない。二度と再び傷をつけられた罪を犯すまいと身に染みて思ふ。若し又全く社會に害が有り危險が有るものなら寧そ直ぐと首を切つて了う方が遙に理窟に適つてる。けれども單に無職業であるとか或は境遇の爲に一時墮落したとかいふ人間を監獄に入れ、何にもさせずに懷手して飯を喰はせ、懶惰な惡い習慣を養ひ、且甲羅を經た無賴の惡漢と同居させて益々墮落せしむるとは何事ッた。其上に官費で遠方遙々と護送し、少なくも一人五百圓以上を費やしてツーラからイルクーツクまでとか、クールスクから――』

『だが、此官費旅行を人民は恐がつてる。若し監獄や官費旅行が無かつたならお互が斯うして安心して座敷の中で沈着いてる事は迚も出來ない。』

『拙者の考は大に違つてる。監獄が社會の安全を保證出來るもんか。永久囚人を監獄へ入れて置くなら知らず、其麼な事は出來んから何時かは放免してやる。處が今日の組織だと、一度監獄へ入つたものが出て來る時は必ず前よりは一層墮落して惡くなつてるから社會の危險は隨つて益々增して來る譯だ。』

『そんなら君は監獄制度を改良しろと云ふのかネ。』

『いや、爾うぢやない。改良なんぞして堪るもんか。改良すれば改良するほど益々金が要つて、今日でさへ敎育費以上を費してる監獄費を愈ゝ增加して人民

の負擔を重からしめる……』

『だが、假に一歩を讓つて、君の云ふ通り監獄制度が不完全としても、直ちに法律其物を無効だといふ事は出來ん。』とロゴヂンスキーは一向耳にも入れずに云つた。

『と云つた處で、監獄の不完全を補ふ途は着いてをらぬ、』とネフリユードフは聲を高くした。

『夫ぢやア如何しやうッてのだ。罪人を殺して了うかナ。』とロゴヂンスキーは云つた。

『爾うサ。其方が殘酷かも知れんが、併し効力は有るだらう。今日行はれてるやうな制度は殘酷である上に無効力で愚極まつてる。能くも如斯な馬鹿々々しいシカモ殘酷極まつた法律商賣に關係してる人間があるもんだと思ふ。』

『我輩は現に關係してをる、』とロゴヂンスキーは顏色を變へた。

『君は其商賣をやつてるが、實は抽者には其了簡が解らんのだ。』

『君には解らないだらうが、君に解らない立派な仕事が世の中には澤山有るよ、』

とロゴヂンスキーは慄聲で云つた。

『現に抽者は、』とネフリユードフは云つた。『公平無私の心で見たなら必ず同情すべき筈の不幸な青年を無理遣に刑に處さうと全力を盡した檢事のあるのを目擊した。又或る檢事は異安心の宗教家を嚴しく糺彈して聖書を讀んだ事をさへ罪に落さうとした。裁判所てものは這般な沒義道な事ばかりして、裁判官なんて奴は罪人を作るのを功名にしてをる。』

『さう思つたなら我輩だつて辭職して了う筈だ。』と云ひつゝロゴヂンスキーは座を離れた。

只見ると、ロゴヂンスキーの眼鏡の下が異樣にギラ〳〵してゐたので、『涙だナ、』とネフリユードフは心中に思つた。果して其通りにロゴヂンスキーは言籠められた口惜し涙が滑れて來たので、突と離れて窓の側へ行き、手巾を出して咳拂ひをしながら眼鏡を脱つて眼を拭いた。

で、再び長椅子へ戻つて葉巻を燻かし始めたが、最う二度と物を云はなかつた。

是程までに姉夫婦を怒らせやうとはネフリユードフは思はなかつたので、有繋に氣の毒でもあり又大人氣ないのを心中に耻ぢた。殊に其翌日は出立して二度と會はれ無いのだと思ふと愈々氣の毒になつた。

で、心中ムシヤクシヤしながらソコ〳〵に暇乞して家に歸つた。

『自分の云つた事は眞理に近い。左に右く渠奴には返答が出來んのだ。が、言ひ方が穩當かでなかつた。ツイ肝癪に觸つたので、怒らせる氣もなく渠奴を怒らしたり、人の好い氣の小さいナターリヤまで氣を揉ましたのは他も些と溫和しくなかつた哩、』と心中に思つた。

第三十四回

マースロワの加はつてる囚徒の一團は愈々午後三時の汽車でモスコーを出立する筈だから、其首途を見立てに停車場まで一緒に行かうてには晩くも十二時前に監獄へ行かねばならぬ。

で、前夜に荷物を捆げ、書類の整理をした處が、偶つと日記に眼が留つたので其處此處を拾讀した。ペテルブルグへ出立する前の日の記事には、

『カチユーシヤは余の犧牲を受くるを欲せず、却て自ら犧牲たらん事を願へり。斯くてカチユーシヤは勝てり、余も亦勝てり。幸ひなるはカチユーシヤの心の變化なる哉。輕々しく信ずるは危けれども、正しくカチユーシヤの心は一變して再び眞正の生活に歸らんとする如く見ゆ、』と。

それから先の方へ行くと、

『余は頗る痛切なるシカモ又大に喜ぶべき經驗を得たり。カチユーシヤが病院にて不品行を働きたりと聞ける時の余は非常なる大苦痛を受けたり。斯くまで煩悶すべき事ならずと思はざるにあらざれども、カチユーシヤと相對せし時は

憎み且厭ふの念禁ずる能はざりき。併し乍ら顧みれば余も曩時に於ては屢々斯の如き不義を行ひ、今日猶ほ全くカチユーシャの前に恥ぢざる人たる能はず。然るに己れを忘れてカチユーシャに憤るは自ら揣らざる嗚呼の沙汰なりと、徐ろに自ら賤み自ら責むると共にカチユーシャを憐むの念、油然として生じて而も己れ亦幸ひなるを得たり。我等常に此の如く屢々顧みて自ら律せば吾等は常に幸ひたるを得べし、』と。

夫から次の日記には、

『此日はナターリヤを訪問したり。然るに余が増長慢は再び余をして冷淡不親切ならしめたるが故に心中今猶ほ平かならず。然れども最早如何ともする能はず。明日よりは新らしき生活を初むべし。さらば爰に舊生活にグッドバイを告ぐ。幾多の感情は勃々生ずれども未だ之を統一する能はず。』と書いてあつた。

翌日即ち此日の朝、眼が覺めた時は何よりも先づ前日姉婿と飛んでもない口論をした事を第一に後悔した。で、

『此儘で行く事は出來ぬ。』と心中に、『何とか仲直りをして行かずばなるまい。』

と思つたが、時計を出して見ると、最う時間がない。急がなければ出立する時刻に間に合はんのだ。であるから急いで何も彼も支度をして、下宿の下男と矢張一緒に出立するフョードーシャの良人のタラスに頼んで荷物をステーションに屆け、直ぐ家を飛出して一番前に眼に留つた辻馬車へ飛乘つて監獄へと行つた。

罪人の列車はネフリユードフの乘る普通汽車よりは二時間前に出るから、ネフリユードフは下宿の勘定を綺麗に濟まして最う戻らぬ意で家を出掛けた。

七月の堪へられない暑さだ。前夜盛んに蒸したお庇に晝間の熱が少しも冷めないで、往來の敷石や人家の壁や白葉鐵屋根から發散する熱が木の葉も動かない空氣に流れ込んで、時偶は風が些とばかり吹いても塵埃やペンキの臭氣の交つてるむうッとした溫かい空氣を持つて來た。

少しは人通りもあつたが、何れも日蔭を擇つて歩いてゐた。ブロンヅ色の日に燒けた道普請の土工ばかりが木靴を穿いてカン〳〵した日向に座り込んで燒

けほてつた砂の中に圓石を叩き込んでゐた。其間を元氣のない巡査が和蘭木綿の制服を着て、黄色の紐附きのピストルを下げて、物臭さうに往來の眞中をノソリ〳〵してゐた。鐵道馬車の馬は和蘭木綿の耳附き頭巾を頭からスッポリと被つて喧たましい鈴の音と共にカン〳〵照つた中を往つたり來たりしてゐた。

ネフリユードフが監獄へ行つた時は護送の罪人は尙だ廣庭に集つてゐて出て來なかつた。罪人受渡しの七面倒臭い仕事は朝の四時から初まつてるが、尙だ中々に濟まなかつた。護送される罪人は男囚六百二十三人、女囚六十四人、一一帳簿に照して病人と纖弱な者だけは分離して精しく人數を調べて護送の兵士に引渡すのだ。新任の典獄と、二人の助手と、醫者と、醫者の助手と、護送の士官と、書記とは壁寄りの日陰に居列んで、筆墨紙を準備した高卓を央に、一人〳〵に罪人を呼出しては訊問して書留めてゐた。

日は段々と卓子に射して來た。ソヨとの風も吹かぬ上に、多勢の罪人の呼吸がして、むんむとした暑さが頭を壓へて來た。

『こりや堪らんワ。何時になつたらお終ひになる？』と肩の怒つた手の短かい

脊高の赤ら顔の護送士官は煙草の畑をコックリした口髭へ掛けてプウッと吐出しつ、『此奴は壽命が續かん哩。何處から如此なに脊負ひ込んで來た。尙だ多勢在るンかネ？』

『女囚の外に二十四人あります、』と書記は帳簿を繰廣げながら云つた。

『こら〳〵何を茫然立つてる。さッさと此方へ來んか、ヤイ、』と護送士官は尙だ點檢が濟まないで隅ッこに凝集つてる罪人共を叱りつけた。此連中は三時間の餘もカン〳〵した日に曝されて順番の來るのを突立つて待つてゐたのだ。

此點檢中、監獄門外、例に由て衛兵が銃を肩に警戒してゐる門外には罪人の荷物と足弱の半病人を載せて行く二十輛の荷馬車が列んでゐた。少し離れた町の角には護送される罪人の親類や友人が見送りの暇乞ひ旁々、成るなら二タ言なり三言なりの話しもし餞別の品物も贈らうと大勢待構へてゐた。

ネフリユードフも此大勢の中に交つて一時間ばかり立つてる中に、軈て鎖の音や跫音や役人の叱る聲や咳拂や囚徒のブックサ呟く聲が聞えて來た。

其間が五分ばかり、獄吏が出たり入つたりしてゐたが、軈て號令が掛ると雷

の鳴るやうな音がして開門した。忽ち鐵鏈のガラ〳〵する音が高く響き、白服の護送兵は銃を肩に眞先きに繰出して門前に一列の環を作つた。常から十分に訓練されてる演習と些とも違はなかつた。更に復た號令が掛ると、例の剃凹つた頭に麵麭形の扁平い帽子を被つた罪人が二人づゝ組んで、袋を肩に片手を振りつゝ、鏈の付いた足を引摺つて出て來た。

先頭は徒刑囚の重罪人で、春中に記號の付いてる鼠の服のお揃ひだつた。若いのや、年を老つたのや、痩せたのや、肥つたのや、青ざめたのや、赤いのや、黑いのや、髭の生えたのや、髭の無いのや、露西亞人や、韃靼人や、猶太人や、種々雜多の人間が鏈をガチャ〳〵鳴らしながら、之から長い道中をするといふ覺悟で、勢ひ能く大手を振つて來た。が、十間ばかり來ると、ハタと佇立つて、溫和しく四人宛に列を作つた。續いて頭を剃凹つた連中が同じお揃ひの服でゾロ〳〵と復た繰出して來たが、今度の組は流刑囚で、足に鏈を付けない代りに手枷で繋がれてゐた。前の徒刑囚と同樣に勇んでやつて來たが、不意に佇立つて四人づゝの列を作つた。其踵に續くのは町村組合の追放人だ。

同じ順序で女囚が續いて繰出して來た。眞先きは頭を包む手巾までが揃ひの色の鼠の服を着た徒刑囚で、其後に續くが流刑囚と、各自の勝手で思ひ〳〵の村方や町方の衣服で一緒に隨いて行く囚徒の女房達だ。此女房連の中には鼠の上衣の上前に赤子を包んで抱いてるものもあつた。夫から男の兒や女の兒が恰で牧場の馬の踵から馬の子がピョン〳〵飛んで來るやうな鹽梅でゾロ〳〵と隨いて來た。

男の囚徒は無言で、折々咳拂ひをしたり一と言か二タ言も口を利くだけだが、女の方は限界無しに喋舌つてゐた。ネフリユードフは女囚がゾロ〳〵出て來た時に逸早くマースロワの姿を見掛けたやうだが、忽ち多勢の中に紛れて見失つて了つた。唯見る、一團の鼠色の動物が春中に袋を背負つて兒供を伴れてワヤワヤガヤ〳〵してゐるだけで何處に一つ女らしい處も人間らしい處もなかつた。

門內で一巡人數の勘定を濟ましたが、復た門外で最う一度勘定を始めた。此時間が中々長くかゝつて、偶々其中の一人が動いて位置を換へると、其度毎に勘定が間違ふので士官は怒つて罪人を突飛ばしては、ブツ〳〵しながらも溫和

しく以前の位置に復るのを待つて、復た新規に勘定を始めるのだ。漸く勘定が濟んでから、護送士官が再び號令を掛けると、囚徒は俄かにドヤ〳〵し初めた。弱蟲の男や女や小兒は先を爭ふて荷馬車の方へ驅出し、各自に袋を投込んでから飛乘つた。ワア〳〵啼いてる赤子を抱いてる女、キャッ〳〵と居場所の喧嘩をする元氣な兒供、悄然と潮垂れてる半病人は思ひ〳〵に馬車に乘つた。

中には帽子を脱つて護送士官の許へ行つて何か訊くものも幾人もあつた。車に乘つても宜いかと訊きに行くのだと後で解つたが、士官は見向きもしないで煙草をスパ〳〵と燻かしてゐるかと思ふと、矢庭に囚徒の鼻頭で短かい手を振舉げたので、喫驚して撲たれまいと肩をすぼめて周章てゝ飛退つた。

『何だ貴樣、贅澤を言ふ勿。歩いて行きなさい。』と士官は怒鳴り付けた。唯つた一人足に鎖を付けられてる老人が車に乘るのを許されたので、麵麭形の帽子を脱りつゝ十字を切つてイソ〳〵と荷馬車の方へ馳けて行つた。で、車へ馳付けて乘らうとしたが、足の鎖が重くて中々乘れなかつたのを、車の上から女が手を持つて強に引摺上げた。

囚徒の手荷物袋が悉く積込まれ、車に乘るのを許されたものが悉く乘込んで了うと、士官は帽子を脱つて、前額から禿げた頭、赤味のある肥つた頸筋の汗を拭きつゝ、十字を切つて、

『進め、オイ！』と號令を掛けた。兵士の銃はカチ合つて鳴り、囚徒は帽子を取つて十字を切り、見送人が聲を掛けると囚徒も顧盼つて聲を掛け、女の中には胸が一杯になつて泣くものもあつた。で、渠等は白服の兵士に前後左右を警戒されて、鎖の付いた足で砂塵を揚げつゝ蕭々と練出した。一番先きは兵士で、其次が足の鎖をガチャ〳〵鳴らす徒刑囚、其次が二人づゝ手枷で繋がれてる流刑囚と町村の追放人、其次が女囚であつた。此後に續いて袋を積んだ荷馬車、夫から足弱を乘せた馬車が殿りをした。此荷馬車の上で衣服を堅く纏付けた一人の或る女がオイ〳〵聲を出して泣いてゐた。

囚徒の行列は長々と續いて、前列が見えなくなつて了つた頃、荷物馬車や足弱馬車が漸くに動き出した。で、最後の馬車が愈々動き出した時、ネフリユードフは待たして置いた辻馬車に飛乘つて、徐々と餘り急がずに行列の眞先きに追着くやうにと馭者に命じた。自分が顏を知つてる囚徒が此行列に加つてるか否かを確めたいのと、第一には女囚の中からマースロワを發見出して送り屆けた品物を請取つたかと聞きたかつたので。

此日はジリ〳〵した頗る暑い日で、微との風もなく、一千人の囚徒が蹴揚げる砂塵は町の中央を行く行列の頭上を蔽ふた。一行は早足でスタ〳〵行くから、お練りの馬車で追着くに中々時間が要つた。何の列も何の列も皆奇怪極まつた獰惡な面した男ばかりで、ネフリユードフの知つてる顏は一人もなかつた。

同じお揃ひの衣服で、同じ歩調で、元氣を附ける爲に大手を振つて歩く一千の囚徒は何れを見ても同じ樣で、斯ういふ奇怪な非常な目に會つてる折からとて、ドウモ人間らしくなくて一種の奇妙な恐ろしい動物の類としか思はれなかつた。尤も徒刑囚の中に人殺しのフヨードロフ、流刑囚の中に道化者のオホーチンと何時ぞや自分に絶つて來た浮浪人の一人を見付け出した時は直ぐ此感情が失くなつて、矢張我々と同じ人間だといふ氣がした。

何の囚徒も何の囚徒も一行の傍を過るネフリユードフの馬車に眼を付けて車中の紳士の顏を覗かないものはなかつた。フヨードロフは氣が付いたといふ合圖に首を振り、オホーチンは眼をパチ〳〵さしたが、叱られるとでも思つたか、二人共に會釋を仕なかつた。

女囚の列に追付くと直ぐマースロワを見付け出した。第二列の三番目であつた。一番目は足の短かい眼の黑い恐なさうな女で、上衣を帶に端折つてゐた。此女は異名で通つた「お酒落さん」だ。二番目は妊娠女で、大義さうに足を引摺つてゐた。三番目のマースロワは袋を肩に擔いで正面ばかり見てゐたが、沈着いた覺悟の色が面に現はれてゐた。四番目は若い美しいフヨードーシャで、短かい上衣に頭髮を手巾で包んだ百姓風をして、矢張沈着き濟まして元氣よく歩いてゐた。

ネフリユードフは馬車から下りて女囚の傍へ行き、マースロワの容子を訊き旁々品物が屆いたかと尋ねやうとすると、護送の下士は直ぐ飛んで來て、

『話をしちや不可。傍へ寄ッちや不可。嚴禁だぞ。』と叫りつけた。

が、見ると獄内で誰知らぬものはないネフリユードフなので、帽子に手を擧げ鄭寧に會釋しつ、

『今は不可ません。停車場まで何卒お待ちなすつて。途中の談話は禁じてますから、』と慇懃に云ひつゝ、更に囚徒に向ひ、『佇立ッちや不可——歩け、』と叫りつけつ、急いで復た駈戻つて、此暑さにも怯げずに新らしいテカ〳〵した靴で大跨に威張つて歩いてゐた。

ネフリユードフは石疊の人道をコツ、コツと行つた。其踵から辻馬車馭者は靜かに馬車を軋らせつ隨いて行つた。

誰しも通り絶つたものは此行列を見て恐ろしいのと可哀相なのがチャンポンになつた妙な心持がした、馬車で追越す者は車から首を伸ばして罪人を眤と見送り、歩いてる者は佇立つて此無氣味な行列を恐かな慄くに見てゐた。中には

囚徒に施與をしやうと駈けて來て護送の兵士に金を渡す者があつた。中には又茫然と我を忘れて踵に隨いて來ては、軈て氣が付くと首を掉つて佇立りつゝ眤と目送るものがあつた。兩側の家からは、バラ〳〵と馳出し、互ひに呼出したり、或は窓から顔を出したりして物をも言はずに身動きもしないで、此恐ろしい行列を見物してゐた。

唯有る四辻へ來ると、立派な馬車が此行列に喰止められてゐた。テカ〳〵した顔の肥胖した馭者はコートの背後に二行釦鈕を附けた馭者服で馭者臺に乘つてゐた。馬車の中は夫婦伴れで、青白い顔の痩削の夫人は薄色の女帽子を被つて華美な日傘を手に持つてゐた。主人は高い禮帽を戴いて上等仕立の薄色の塵除外套を着てゐた。夫婦と相對つて男の子と女の子とが腰を掛けてゐた。女の子は房々したブロンド色の髪をお下げにした花のやうな可愛らしい子で、立派な裝をして矢張華美な日傘を手に持つてゐた。男の子は八歳ばかりで、首筋の細い頬骨の高い神經質らしい子で、長いリボンの付いた水兵帽を被つてゐた。

主人は何故氣を利かして素速く行列の前を切拔けなかつたかと馭者を叱り付

けてゐた。夫人は半分眼を塞いで顔を顰めつ、塵埃と日とを避けるため絹の日傘を翳してゐた。デブ〳〵した馭者は主人が此町を通れと命じて置いたくせに今更無理な叱言をいふのをブリ〳〵して苦蟲を潰しながら、十分に張り切つて逞しい二頭の黑い馬の手綱を一生懸命に引締めてゐた。

警戒巡査は忠義立てに如何がなして行列を留めて、此立派な馬車を通り抜けさせたいのが山々であつたが、此嚴めかしい行列は如何なる立派な大紳士のためでも理由なく留める事が出來ないのを知つて、唯帽子に手を擧げて敬意を表し、且囚徒を睨め付けつゝ、此馬車の主人を保護してるぞと云はぬばかりの素振りをして見せた。仕方がなしに行列が殘らず通過ぎるまで待つて、愈々最終の荷物や足弱や病人を積んだ馬車が通つた時徐々動き出した。例のオイ〳〵泣いてゐたヒステリーの女は段々沈着いて來たが、此立派な馬車を見ると忽ち復たシク〳〵と泣き出した。

此時馭者は輕く手綱を弛めると、駒は蹄を戛々と小石に蹴付けて蹈鳴らしつ、靜に護謨輪を牽出して、一家四人を田舍の別莊へと遊山に乘せて行つた。

口あるも四肢なく、生涯を此馬車に乘り、此行列に乘りながらにして……

「馬の手綱をブラ〳〵……」

一生懸命に馬車に乘り(馭者)十年目に……

父も母も目前に見る此奇怪な行列の意味を小兒に話して聞かせぬから、兒供達は各自思ひ通りに判斷した。

娘は兩親の顏色から想像して、斯ういふ人間は自分の兩親や親戚知己とは全で違つてる根からの惡者だから那樣云ふ目に會ふのだと一圖に思込み、唯恐ろしいとばかり思つたから影の見えなくなつた時漸つと安心した。

が、男の子の方は初めから目も放さずに囚徒を見てゐたが、殆んど神から告げられたやうに少しも疑はずに、是等の囚徒達も矢張自分達と同じ人間である事を確く信じて、結局何者かに陷められて如斯な無殘な目に會ふのだと心底から氣の毒になつて、此通りに頭髪を剃られたり鎖で繋がれたりしてゐるものも渠等の頭髪を剃つたり渠等を鎖で繋いだりしたものも双方共に淺ましくて、段々胸に迫つて泣出したくなつたが、此場合泣くのは恥だと思つて、強に齒を切ばツて唇を震はしてゐた。

第三十六回

ネフリュードフは囚徒の早足と同じ歩調で歩いてゐた。薄着をしてゐても矢張非常な暑熱で、塵埃交りのむんむとしたジリ〳〵燬付くやうな空氣に呼吸もつけず、漸と三四町ばかりしか歩かないのだが、既う辛抱が出來ないで復た馬車に乘つた。が、カン〳〵した街巷の中央では矢張暑くて堪らず、ロゴジンスキーとの前夜の論判を憶出さうとしても今朝程には激してゐなかつた。現在眼の前に慘憺たる囚徒の行列を見たり、此の堪へ難い暑さにジリ〳〵と責めつけられては中々夫れどころでなかつた。

只見ると、石盤の人道の垣根越に枝を伸した木蔭に氷菓子屋が蹲踞んでゐた。學校の小兒が二人、帽子も冠らずに上から押被さるやうに立つて、一人は角のスプーンで掬つて甘味さうに舌打ちし、一人は氷菓子屋が黄色に盛上げてゐるコップを舌なめずりして待つてゐた。

『何處かで何か飲む處はなからうか、』とネフリュードフは堪らなく咽喉が渴りついて來たので馭者に訊くと、

『直ぐ其處に上等お茶屋があります、』と云ひつゝ、馭者は町角を曲つて大きな看板の出てゐる家の前に馬車を止めた。

帳場の後ろには露西亞ジャツを着た肥つた番頭が控へ、昔しは白かつたジャケツを着た給仕人が退屈さうにお客の在ない卓子に凭れてゐたが、不時なお客の舞込んだのを怪訝な顔してジロ〳〵見ながら御用を聞いた。

ネフリュードフはセルツェル水を一本命じつ、窓から少し離れて、小汚ない布を掛けた小さな卓子に向つた。彼方の卓子には急須茶碗と白い壜を央に二人の男が相對つて、前額の汗を拭きながら親善さゝうに何だか相談してゐた。其中の一人は色が黑く前額が禿げて、丁度ロゴジンスキーのやうに後頭にチョボ〳〵と毛が生えてゐたので、此風采振を見ると忽ち昨日の論判を憶出し、

『出立前に最一度姉夫婦に會ひたかつた――と云つて最う會ひに行く時間がない、』と考へて、『手紙を書いた方が可い』と思ひつ、半切と狀袋と郵便切手を取寄せて、冷たいセルツェル水を飲みながら、扨て何と書いたもんだらうかと考へた。が、心はワク〳〵と落付かないので、イクラ考へても手紙の案文が纏ま

らなかつた。

『親愛なる姉上へ參らせ候。昨夜はロゴジンスキー兄に對して意外なる失言仕候段何分此儘出立仕候ては心に相濟まず候まゝ一と筆申上候……』

『此次は何と書く？』と筆を休めて復た考へ初した。昨日言つた事を勘辨して呉れとでも書くか。だが、心に思ふ儘を忌憚なく云つたので、詫まる筋は少しも無い。勘辨して呉れとでも云つたなら、渠奴めは拙者が持説を撤回したとでも思ふだらう。加之ならず、増長つて拙者の私事にまで無用の干渉をする……コリヤ迂濶な事は書けんワイ。』

と思ふと、此方の心持も解らないで要らざる餘計な容喙をする路人同樣な自惚れ男の鼻持もならないのが復たムラ〳〵と憶出されて、折角書掛けた手紙を壓んでポツケットに入れつゝ、直ぐ勘定を濟ましてから馬車に飛乘つて行列の踵を追つた。

益々熱くなつて來た。石や壁は熱した空氣を吐出すかと怪まれ、往來の敷石は足を焦がしさうだ。ツイ迂濶りと辻馬車のニス塗の泥除に手を掛けた時は火

傷をしたかと思つた。

馬は意義さうにタユ〳〵として凸凹した砂塵の道を蹄で蹴附けてゐた。馭者は絶間なくウト〳〵と座睡してゐた。ネフリードフはボカンとして前の方ばかり見てゐた。

只有る町端れの大きな家の門前まで來ると、道路が下水へ傾斜に蒲鉾形になつてる處へ多勢人が集つて、其傍に護送兵士が銃を肩に立つてゐた。

ネフリードフは馭者を呼留めつゝ、

『如何したんだ？』と丁度來合した立ちん坊に訊くと、

『懲役人が如何かしたんでサア、』と立ちん坊は答へた。

ネフリードフは馬車から下りて人立ちを分けて行くと、下水の粗質石の傍に鼠のお仕着せの囚徒が倒れてゐた。肩幅の廣い、鼻の扁平い、赤髭赤ッ面の中年者で、足よりは頭を下げて仰向けに、汚點だらけの手をだらりとして血走つた眼を空に向け、幅の廣い鳩胸を大浪のやうに煽つてウン〳〵叫いてゐた。其傍には佛頂面の巡査と、行商人と、郵便脚夫と、商家の手代と、日傘を手に持

つ年寄の女と、空籠を携げてる毬栗の小僧が立つてゐた。

『懲役人は悉皆弱つてまさア、』と商家の手代は今來たばかりのネフリュードフに向つて、『散三監獄で身體を臺なしにした奴をカン〳〵した日盛りに引摺出しちやア誰だつて絶命いちまひまさア。』

『最う助かりますまいネ、』と日傘を手に持つ老婦人はオロ〳〵聲で云つた。

『襯衣の前を開けてやらなければ、』と郵便脚夫は云つた。

巡査は強硬な指を慄はしながら、覺束ない手付で病人の太い筋だらけの赤い頸に結び付けたシャツの紐を解かうとして、周章た夢中になつてゐたが、其最中、偶つと人立ちを制さねばならぬのに氣が付いて、

『こら〳〵、何故立ちよる、此暑いのに多勢立ちよつては風が通らんワイ。』

『一體なら健康診斷をして、身體の衰弱してるものは後廻しにするのが當然だ。之ぢやア生きてるよりは死んでるものを護送するやうなものだ、』と商家の手代は法律を心得顔に辯じた。

巡査は漸つとの事で襯衣の紐を解いてから、突と起つて周圍を睨め廻し、

『こら〳〵、何故立つちよる。退きやんかい。お前等知つた事ッちやアごわんや。何が面白い事がある、』と叱りつけつゝ、世話が燒けて困ると云はぬばかりにネフリュードフを見て察して貰はうとしたが、一向其樣な氣色が見えないので、今度は護送兵の顏に視線を轉じた。

が、兵士は自分の靴の踵が摺り減つたのを驗めてゐて、巡査の途方に暮れてるのを一向取合はなかつた。

『元來誰の職務だと思つてる？　人民を保護するのか、苦めるのか、何の態だ。罪人だつて矢張人間の一人だ、』と人集りの中から誰だか云つた。

『頭を高くして水をお與んなさい。』とネフリュードフは云つた。

『水は取りに遣りやんした。』と云ひつゝ巡査は險呑さうに病人の小脇へ手を入れて抱起した。

『こらッ、何故立つてる？』と忽ち嚴かしい聲がすると共に、ピカ〳〵した制服にテカ〳〵した靴を穿いた警部が人立ちを分けて來た。

『退け、退けッ！立つちやア不可ん、』と尙だ何事があつたか解らない內に多勢

を叱り飛ばした。

で、傍へ行つて中年者の囚徒が急病で死にかゝつてるのを見ると、宛も待つてゐたと云はぬばかりに首肯きつ巡査に向つて、『如何したんだ？』

巡査は、護送囚徒の一人が途中で突然斃れて置去りにされたのだと答へた。

『宜し〳〵、署へ伴れて行かう。辻馬車を呼びなさい。』

『今、呼びにやりやんした、』と巡査は云つた。

商家の手代は又何か言初めた。

『お前の關係した事ぢやない。退きなさい、』と警部は叱りつけつ、恐い顏をして睨みつけたので、默つて了つた。

『水を與らなければ……』とネフリュードフは言つた。

警部は復たもやネフリュードフを睨み附けたので、ネフリュードフも默つて了つた。

處へ水を一杯汲んだ茶碗を持つて來たので、警部は水を呑ませろと命じた。

巡査は病人のグタリとした首を仰向かして水を飲ませやうとしたが、最う飲む

だけの力がなくて、水は髭に傳はつてジャケツから汚い木綿の襯衣までを濡らした。

『頭から打掛けなさい、』と警部は命じたので、巡査は病人の被つてる麵麭形の帽子を脱つて、赤ッちやけた縮れ毛から腦天の禿げた處へ水を打掛けると、病人は喫驚して眼をパッチリ開いたが、姿勢を壞すだけの力も無くて、汚ない水が垢だらけの顏へ幾筋となく流れたが、矢張前と同じく息だはしく喘々して全身を慄はしてゐた。

『馬車が來てをるワ。』と警部はネフリュードフの辻馬車を指して、『之へ乘せて行きなさい。』

『お客がありますよ、』と辻馬車馭者は見向きもしないで氣の無さゝうに云つた。

『之は拙者のでムるが、シカシお使ひなすつても可い、』と云ひつゝネフリュードフは馭者に向つて、『代は拙者が拂つてやる。』

『夫では、』と警部はネフリュードフに會釋しつ、『さッ、何を茫然してる。さッさと病人を乘せなさい。』

巡査や人足や護送兵士が一緒になつて垂死つてる病人を馬車に搭込んで腰を掛けさせやうとした。が、最う腰を掛けるどころでなく、ガックリと首を垂らして較やとすると身體を滑らした。

『臥かしなさい、』と警部は命じた。

『何、大丈夫。斯うして行きやんせう、』と巡査は合乘りして滑落ちさうになる病人を横抱きにした。護送兵は素足に踵なしの牢屋靴を穿いてる病人の脚を揃へて馭者臺に乘せた。

警部は周圍を見廻しつ、病人の麵麭形の帽子が落ちてるのを見付けて、水だらけの病人の頭に載せた。

『行けッ！』と警部は命じた。

辻馬車馭者はプリ〳〵しながら馬車をクル〳〵と廻して護送兵に送られつゝ警察署へと後戻りした。巡査はシッカリと病人の身體を引抱へて滑落ちないやうに一生懸命になつてゐた。病人の首は前後左右にガク〳〵してゐた。

馬車脇に沿つてる護送兵は始終氣を付けて病人の足を直してゐた。ネフリュードフも其踵から一緒に隨いて行つた。

第三十七回

病囚を載せた辻馬車は消防夫が立番してる警察署（モスコーでは警察署と消防署とは一つ處である。）の門を入つて、空地に對つた只有る入口の前で駐つた。

此處には五六人の消防夫が袖を手繰し上げて車の掃除をしながら、大聲で下らぬ話をしてゐた。馬車が駐ると共に五六人の巡査が寄つて來て、囚徒の息の絶えた身體を重量で軋む馬車から抱き下した。

病囚と同乘して來た巡査は馬車から下りて、麻痺れた腕を振りつゝ、帽子を脱つて十字を切つた。軈て病人は入口から二階へと擔ぎ上げられた、其踵からネフリュードフも一緒に隨いて行つた。

二階の狹苦しい小汚ない室に四個の寢臺が据ゑてあつた。頸に繃帶した口の曲んだ男と肺病患者の男とが、何方も病院服で二箇の寢臺を占領し、殘る二箇だけが空いてゐた。病人は其中の一つに臥かされた。

すると眼付のキョトく〳〵した小作りの男が、眉毛をピク〳〵と間斷無しに動かしつゝ、下衣と靴足袋ばかりの裝で何處からかチョコ〳〵と驅けて來て、病

人とネフリュードフとを交代りに見てゐたが、忽ちグラ〳〵と笑ひ出した。此奇妙な男は近頃警察病院へ收容された瘋癲者で、

『嚇かさうと思ッたッて、爾う巧く行くもんか、』と云つた。

巡査が病人を擔込んだ瞬から警部と醫者の助手が隨いて來た。

醫者は直ぐ其の傍へ行つて汚點だらけの手を輕く握つた。尙だ柔らかゝつたが、全で死人色になつて既う冷たかつた。暫時握つてから離すとダラリと力なく腹の上に落ちた。

『耿目だ、』と醫者は云つた。が、一ト通りの診察をしやうとして、シヨボ濡れの鼠色の襯衣の釦鈕を外しつ、黃色い幅廣の胸を露して耳を押當てた。一同は片唾を呑んで寂としてゐた。軈て醫者は起つて首を傾げつゝ、病人のバッチリと開いた靑い瞳の座つた兩眼の眼蓋を一つ〳〵に撫でゝ見た。

『恐かァないぞ、恐かァないぞ、』と瘋癲者は繰返しつゝ醫者を目掛けて唾を吹掛けた。

『如何です？』と警部は訊くと、

『さア、』と醫者は答へた。『死亡室へ持つて行くンだネ。』

『最う駄目かナ？』と警部は云つた。

『爾う斯うする中に駄目だらう、』と醫者は病人の廣げた胸を掻寄せながら、『だが、念の爲めマトウェー君を呼んで診せるかナ。ペトローフ、』と使丁を呼んで、『マトウェー君を呼んで來なさい、』と云ひつゝ醫者は死骸から遠く離れた。

『左に右く、オイ君、死亡室へ持つてくんだ。』と警部は護衛兵に向つて、『夫から死亡室へ持つてつてから、復た爰へ戻つて始末書に記名するのだ。』

『はア、』と護送兵は云つた。

巡査は死骸を擔いで階下へ下りた。ネフリュードフも直ぐ踵から隨いて行かうとすると、瘋癲先生は無圖と衣服を掴んで一寸も動かさない。

『君だけは彼の惡黨の連中でなからう。仲間でないなら紙莫を一本吳れ、』と云つた。ネフリュードフは直ぐ紙莫入から一本出して與つた。

瘋癲先生は眉毛をピク〳〵と動かしながら、所謂惡黨共が何だの彼だのと七面倒臭い尋問をして困らせる苦情を早口で喋べり出した。『何故だか知らんが、

みんな僕に反對して、種々な工風をしては辛めますよ。』

『失敬する、』とネフリュードフは捨言葉を殘しつ、半分聞かずに飛出して、何處へ死骸を持つて行つたかを見定めやうとした。

其時、巡査は既に空地を横切つて、遙かの物置へ丁度今、死骸を擔ぎ込まうとする處だつた。ネフリュードフは其處まで行つて實地を見屆けやうとすると、警部は忽ち呼止めて、

『何か用が有りますか？』

『何にも。』

『何にもなければお歸りなさい。』

と云はれたので、仕方がなしに後戻りして辻馬車の待つてる處へ來ると、馭者めはコク〳〵と座睡してゐたので、直ぐ呼覺して馬車へ飛乘りつゝ停車場へと急がした。

凡そ一町ほど行くと護送兵が銃を肩に附添つてる荷車に出會つた。車の上には最う既くに死んで了つたらしい又一人の囚徒が仰向けに臥そべつて、眞黑な

髭ムシャの顔を麵麭形の帽子で鼻まで秘しつ、車がガタ〳〵する度に剃凹つた頭をガク〳〵動かしてゐた。手綱を手に持つ馬方は重い靴を引摺つて車の側に附き、其の又後から巡査が踵いて行つた。

ネフリュードフは馭者の肩を輕く叩くと、

『如何です旦那、御覽なせエ、復た殺られてますせ、』と云ひつゝ馭者は馬を留めた。

ネフリュードフは馬車から下りて荷車の踵に隨き、再び消防夫の立番してる警察署の門を入つた。今方、車の掃除をしてゐた消防夫は仕事を濟まして引込んで了つた後で、脊の高いコッ〳〵した消防隊長が青筋入りの帽子で衣兜に兩手を突込んだまゝ突立ち、恰も消防夫が牽出して來た逞ましい首太の紅栗毛の馬を見てゐた。此馬は前脚を一本折つて跛を引いてゐた。消防隊長はプン〳〵怒りながら傍に立つてる獸醫と何か話してゐた。

其の傍に警部が立つてゐた。で、復たぞろ死骸を持込んで來たのを見ると、直ぐ束々と進んで

*Gorbátovskaya

『何處で拾つて來た？』と苦々しげに首を掉りたてた。

『*ゴルバートウスカヤで、』と巡査は答へた。

『四人か、』と消防隊長は訊いた。

『爾うだ。加之に今日は二人目だ。』

『厄介な、世話を燒かせやがる。尤も煮えくり返るやうに暑いけれどナア、』と消防隊長は云ひつゝ顧盼いて、跛の馬を牽いて來た消防夫に向ひつ、

『隅ッこの廐に投り込んで置け。夫からナ、ヤイ、能ッく聞け。大切の馬を傷物にしやアがつて、飛んでもねエ事をしやアがつた。コン畜生め、馬てものはナ、汝のやうな無能者よか餘程高エンだぞ。』

死骸は車から抱下されて、前の時と同樣に二階の病室へと擔ぎ込まれた。ネフリュードフは化かされたやうにウカ〳〵と其踵に隨いて行つた。

『何か用ですか？』と一人の巡査は訊いた。

が、ネフリュードフは何とも答へないで、死骸が擔込まれた室まで行つた。例の瘋癲先生は寢臺に腰を掛けてネフリュードフに貰つた紙莨を樂さうに燻かして

ゐた。

『ヤツ、歸つて來たナ、』と云ひつゝ、ニヤリと笑つた。で、死骸を見ると妙な顏をして、『復た持つて來やがつた。煩セエなア。此方は最う孩兒ぢや無エヤイ。』

死骸の顏を蔽した帽子は取れて了つたので、ネフリュードフは初めて倩々と其顏を見ると、前の小汚ない醜男とは打つて變つた中々の好男子で、目鼻立から體格までが揃つて、シカモ男盛りの年配で、惜しい事には頭を半分剃つてるのが瑕瑾であるが、前額つきの形狀好く、鼻筋通りて、其下には黑い髯が薄く生え、紫色の薄い唇には尙だ微笑を泛べ、形狀の好い耳の下から頤へ掛けて薄い髯が緣取つてゐた。總じて落着いた眞面目な溫和かな相であつた。

尤も其相貌には高潔な精神生活の出來さうな氣色は見えなかつたが、械を箝められた手や足の骨組の岩疊な事や、全體に釣合の能く取れた手足の筋肉の逞ましい事や、實に申分なく十二分に發達した立派な身體で、單に一個の動物として見たなら、消防隊長が足の折れたのを怒つてガリ〳〵叫りちらした紅栗毛よりは遙かに完全したものであつた。

が、死んで了つた曉には、誰一人、人間として弔はないばかりか、一個の立派に發育した動物としても悲んで呉れる者さへなく、唯死骸を片付ける迷惑を掛けた厄介者としか思はなかつた。

警察醫は助手を伴れて署長代理と共に病室へ入つて來た。警察醫はデク〳〵した骨組の岩疊な男で、印度絹のコートに肥つた股一杯の洋袴を穿いてゐた。署長代理はズングリむつくりした男で、毬のやうに膨れた赤い頰べたの破裂れるほど空氣を吸つては悠々と吐出して、眞赤な顏を愈々眞赤にする妙な癖がある。警察醫は死骸と並んで臺に腰を掛け、ツイ今がた助手の醫者がした通りに、胸に耳を當てゝ心臟の鼓動を聞き濟ましてから、突と起つて洋袴を撫下しつ、

『最う駄目だ。』

署長代理は口一杯に空氣を吸つて悠々と吐出してゐた。

『何處の監獄のもんだ？』

護送兵は其問に答へてから、死骸の足に繫いだ鏈を注意した。

『鏈を外して了ひたいが、鍛冶屋を呼んで來やうかナ、』と署長代理は云ひつゝ

復た空氣を口一杯に吸込んでから悠々吐出しながら室の外へ行つた。

『什麼して這般な事になりました？』とネフリュードフは癒て警察醫に訊いた。

醫師は眼鏡の中から眤ッと見つゝ、『什麼してとは如何いふ仔細？　什麼して日射病に罹つたと云ふンですかエ？　そりや又何故？　長い間を日の目を見ないものを今日のやうな熱い日に、シカモ全で風がなくて多勢の喘れでムンムンとする日盛りを引摺つて行けば忌でも日射病になりますワ。』

『そんなら、何故又這般な日に引摺出したもんでせう？』

『夫りやア、何故だか我輩は知らん。引摺出した當局者にお訊きなさい。一體貴下は誰方です？』

『拙者は何――無關係の者でムる。』

『アヽ、左樣か。夫では失禮する。我輩には時間がムらぬ。』と云捨てつ、醫師は洋袴を下の方へ撫下ろしながら最一人の病人の寢床の傍へ行き、

『什麼だ子、容體は？』と首に繃帶した口の曲んだ男に訊いた。

其間、瘋癲先生は床の上に坐つてゐたが、紙莨を喫切つて了つたので醫者の

方を向いては連りに唾を吐いてゐた。

ネフリュードフは屋外へ出て、消防夫の馬や、鷄や、眞鍮のヘルメット型の制帽を被つた門衛の前を通り過ぎつゝ門を出て馬車へ飛乘つた。馭者は復たグッスリと熟睡んでゐた。

第三十八回

ネフリュードフが停車場に着いた時、囚徒は既くに鐵格子の窓の附いた列車に乘込んでゐた。見送りの人達はプラットフォームに立つてゐたが、車室に近づくのを許されなかつた。

此日は護送の役人が中々骨が折れた。停車場へ來るまでにネフリュードフが目擊した二人の外に猶三人、都合五人の囚徒が日射病で斃れて死んだ。（之はモスコー市に於ける事實で、千八百八十年頃プテールスキイ集治檻から二ージニー停車場へ行く途中一時に五人の囚徒が日射病で死んだ事があるのだ。）其中の一人は初手の二人と同樣に近所の警察署へ收容されたが、殘る二人は停車場で斃れたのだ。元來なら大切に介抱つてやるべき筈のものを預かりながら、五人までも病氣で殺したと云つては甚だ相濟まんわけだが、實は這般な事はお茶の子で一向痛くも痒くもない。唯、法律で定められてる一と通りの手續き、卽ち死者に關係した書類や所有品を死骸と一緒に其筋に引渡したり、ニージニーに送る罪人引繼ぎ名簿の中から死んだ者の名を削つたりする、這般な餘計な手數が此暑い最中に殖えるのが面倒臭いだけである。

で、護送士官が此手續きを運んで了うまでは、囚徒に面會を請願したネフリュードフ初め見送人一同が車室の傍へ行くのを許さなかつた。尤もネフリュードフは秘密で護送の軍曹に心附けをしたお蔭に、誰よりも一番先きに許されて、寬大に警戒線を通るのを見免して貰つたが、成るべく早く切上げて上官の目に留まらないやうにと念を推された。

列車の數は十八で、其中の一車を護送士官が占領した外は囚徒で盡くギシギシと詰つてゐた。ネフリュードフが車外を通ると、鏈の音や聲高に罵り叫ぐダワイもない話がガヤ〳〵と聞えたが、ツイぞ一と言、死んだ仲間の噂をするものはなかつた。

或る車室を覗いて見ると、護送兵士が二人掛りで囚徒の手枷を外してゐた。囚徒が手を延ばしてゐると、一人の兵士は鍵で手枷の錠を外し、一人は外した手枷を集めてゐた。

男の囚徒の車を過ぎて了うと女囚の車で、二番目の車室の中で、『南無、南無南無〳〵〳〵』と叫つてる者があつた。

で、兵士が敬へて呉れた三番目の車へ行つて、窓へ顔を出すと、呼吸臭い生温い空氣がべタリと頰を撫でた中からキイ〳〵した女の聲が聞えた。

車内はお仕着せの女囚で一杯だ。何れも赤く汗ばんだ顔をしてガヤ〳〵と叫いてゐた。ネフリードフの顔が窓に見えると、一同は忽ち目を付けて、端近のものは話を止めて窓へ寄つて來た。

マースロワは白いジャケツぎりで、手巾も被らずに向側の窓に腰掛けてゐた。其の前方隣席に腰を掛けてる美くしい愛嬌のあるフォードーシャは逸早く氣が付いて、マースロワの肱を突いて知らせると、マースロワはイソ〳〵と座を離れ、急いで手巾を緑の黑髪に投掛けつ、眞赤に熱つた顔に微笑を含みながら窓へ來て格子に掴まつた。

『嚴しいお暑さでムいます、』と嬉しさうに莞爾々々しながら云つた。

『品物は屆いたかネ？』

『はア、難有うムいます。』

『尙だ外に欲しい物があるなら、』とネフリードフは訊いた。其途端、竈の中から吹いて來たやうなボカ〳〵した空氣が窓から襲つて來た。

『何にも欲しい物はムいません。難有うムいます。』

『飲む物が戴けるとネエ、』とフォードーシャは聲を掛けた。

『爾うネ、飲む物が戴けるとネエ、』とマースロワも繰返した。

『飲むものとは？　全で飲料を貰はんのかネ？』

『少とは貰ひましたが、既う呑盡して了ひました。』

『夫ンなら護送の役人に直ぐ頼んで置かう。それで、ニージニーに着くまでは最う會ふ事は出來まいテ。』

『呀、』とマースロワは少しも知らなかつたやうに、『矢張入來つしやるのでムいますか、』と云ひつゝネフリードフを嬉しげに見た。

『次の汽車で行く意だ。』

マースロワは何にも云はずに、嚏て深い溜息を吐いた。

『一寸いと、旦那、』と佛頂面の婆さんが唐突に男のやうな太い聲で、『十二人死んだつてますが、眞實でせうか？』

此婆さんはコラブリーワである。

『十二人とは聞かなかつたが、二人だけは見て來た。』とネフリードフは云つた。

『何でも十二人殺したつてますが、其樣なに殺してもお處刑にならないンでせうか。畜生、間中りだよ。』

『女の中には病人は無かつたかネ？』

『女は悉皆壯健です、』と脊の低い最一人の女は嫣然と笑ひつ、『唯つた一人臨月の女があります。ホラ、隣室で叫つてる聲がします、』と二番目の車室の泣聲を指さした。

『ねエ貴郎、妾、お願がムいます、』とマースロワは心底からの嬉しさを強に包まうとするやうな氣色で、『那の臨月の方をですネ、あの方を後廻しにして上げる事は出來ますまいか。貴郎からでも咄して戴いたら——』

『宜しい、咄して見やう。』

『最う一つお願がムいます。フョードーシャさんを御亭主のタラスさんに會はして上げたいンですがネ、』と莞爾々々してゐるフョードーシャを指さしつ、『タラス

さんも矢張貴郎と一緒に行くのぢやなくて？』

『貴下、談話をしてはなりませんぞ。』と通掛りの軍曹は唐突に聲を掛けた。

此軍曹はネフリードフが心附けをして寛大に見て貰つた男とは違つてゐたので、直ぐ車室を離れて懷妊女とタラスの一條を賴まうとして士官を搜しに行つた。が、如何しても見付からないので、護送兵に訊いて見ても唯一人對手になるものはない。何れも忙がしさうにマゴ〳〵して、其處ら此處らへ囚徒を引張り廻したり、食物を買ひに出掛けたり、手荷物を車に持込んだり、士官の伴れて行く婦人の世話をしたりして、誰一人、碌な返事をするものは無かつた。

二番目のベルが鳴つた時、漸とこさと或る士官を見付け出した。

士官は短かい手で口髭を撫でながら肩を搖つて、何かの件で下士官を叱り付けてゐた。が、ネフリードフを見ると、

『何か御用ですか？』と訊いた。

『彼處に臨月の女がをりますがナ、彼は什麼でせう、後廻しにしたら——』

『先アあの儘にして。何とか後で處分しませうから、』と士官は云捨てゝ、短か

い手を振りながら自分の車へと駈けて行つた。

此時、口笛を手に持つ車掌はプラットフォームを駈けて行つた。其中に最終のベルが鳴つた。發車の口笛が一聲耳を劈ざいた。プラットフォームの見送人や女囚の車室の中から、オイオイ聲を上げて泣出したり、忍び音にシク〳〵と泣いたり、神に祈禱を上げたりする聲が其處ら中に聞えた。

ネフリュードフはタラスと並んでプラットフォームに立ち、列車の徐々と進行するのを見てゐた。坊主頭を陳べた男囚徒の車が段々と行過ぎて了うと女囚の車で、手巾を被つたり被らなかつたりする女囚の頭が窓から見えた。妊娠女の叫き聲が洩れる二番目が通過ぎると、マースロワの乘つてる三番目で、マースロワは他の女と一緒に窓から首を出して、淋しい微笑を含みつネフリュードフを見てゐた。

第三十九回

普通の旅行車が出るまで尚だ二時間あるので、其間に最う一度姉を訪ねやうかと思つた。が、今朝から奔走したり心配したり肝癪を起したり腸を沸えくり返したりしたので、一度に氣勞れが出て、一等待合室の長椅子に腰を掛けたかと思ふと忽ちウツトリとして、ツイ横に倒れて肱枕をするや否、直ぐグツスリと熟眠んで了つた。

するとフロックコートの給仕人がナプキンを手に持つたまゝネフリュードフを揺しに來た。

『モシ〳〵、ネフリュードフ公爵ぢやア在らつしやいませんか。御婦人の方が尋ねてゐらつしやいます。』

ネフリュードフは喫驚して跳起きざまに眼を摩りつ、元來今まで何處に如何してゐたのかと、今朝からのさま〴〵を現に考へてゐた。

で、囚徒の行列や、警察に擔ぎ込まれた死骸や、鐵格子の汽車や、ギシ〳〵と車に積込まれた女囚の一人が臨月でウン〳〵叫つてれは一人は格子に捫まつ

て悲しげにニヤリとした事やら、何や彼やを現に考へてゐたが、偶つと眼を開くと眼前の景色が全で變つてゐた。

只見ると花瓶やら燭臺やらを陳べ立てた卓子の間を、給仕人が忙がしさうに目眩るしく駈けて歩き、突當りは果物入りの硝子鉢と共に酒の堰を何本となく列べた大戸棚で、此戸棚を背後に脊負つた賣子が賣臺を中にお客と相對つてゐた。多勢の旅客は此方へ脊を向けて立つてゐた。

ネフリードフは千々に亂れた心持を徐かに沈着けながら坐り直した時、待合室に居合はす誰も彼もが申合したやうに入口の方を見て怪訝な顔をしてゐるのに氣が付いた。何事が初まつたかと顧盼いて見ると、仰山に頭髪を飾り立つた老婦人を乘せた椅子を擔ぎ上げたのを眞先きに多勢ゾロゾロ踵いて來る一行があつた。誰有らう、此老婦人はコルチャーギナ公爵夫人で、前を擔ぐ美男の家從も後ろを擔ぐ金筋入り帽子の玄關番もネフリードフが知つてる顔であつた。其踵から前髪を縮らした白前垂の美しい侍婢が小さな包やら日傘やら圓い革函に入れたものやらを抱へて隨いて來た。續いて唇の厚い頸の太いコルチャーギン公爵が手輕な旅行帽でやつて來た。ミッシー嬢は從妹のミーシャと列んで、頸の長い咽喉佛の高い交際家のオーステンを伴れて其踵に隨いて來た。オーステンは相變らずの元氣で、調戯け半分だが面白さうに身を入れてミッシー嬢と話してゐた。一番後は苦蟲を噛潰したやうな面の醫者が紙巻を燻かしながら殿した。コルチャーギン一家が都近の別莊からニージニー停車場附近なる公爵夫人の妹の邸へ引越しに出立する處なのだ。

一行の中夫人の椅子を擔ぐ家來と侍婢と醫者とは婦人待合室へと消えて了つた。見物人は業々しいのに魂消るのもあれば御大層な御威光に恐入るのもあつた。廳て老公爵は卓子に就き、給仕人を呼んで酒と肴を命じた。ミッシー嬢とオーステンとは何處かの席に就かうとした四圍を見廻してゐる處へ、二人の知つてる顔が入口に見えたので周章た挨拶に行つた。其人は卽ちネフリードフの姉のナターリヤであつた。

ナターリヤはアグラフーナを伴れてキョロ〳〵と見廻しながら、待合室に來ると直ぐ、弟とミッシー嬢とを同時に發見けたので、弟には顎で一寸と會釋し

て置いて、先づミッシー嬢へ挨拶に行き、馴れ〳〵しげに接吻してから再た弟の傍へツカ〳〵と進んで、

『到頭捜し當てたよ、』と云つた。

ネフリュードフも亦ミッシーやミーシャやオーステンに會釋して二タ言三言口を交いた。ミッシー嬢は別莊が燒けたので據ろなく叔母の家に引越す處だと話すと、其傍からオーステンが此火事に就て笑止しい話があると話し初したが、ネフリュードフはオーステンの咄などは耳にも入れずに姉に向つて、

『能く來て下すつた。』

『最う餘程前から爰に來てゐました。アグラフォーナも一緒です、』と云ひつゝアグラフォーナを指さした。アグラフォーナは防水服にボンネットを冠り、故と遠慮して少し離れたまゝ嫻雅かに沈着いてネフリュードフに會釋した。

『方々探しましたよ。』

『ツイ爰でトロ〳〵とやつてました。併し能く來て下すつた。實は手紙を差上げやうかと書掛けました。』

『眞實に、』と姉は聊か氣が揉める氣味合で、『何か復た御用があつて？』

ミッシー嬢初め他の紳士達は、二人の間に內輪話がありさうなのを氣取つて遠慮して席を外した。

二人は窓の方へ行つて、帽子箱だの膝掛だのが置いてある天鵞絨張の長椅子に腰を掛けた。

『實は昨日は大變な失禮をしたから、』とネフリュードフは、『最う一度お詫びに參上らうかと思つたが、併しロゴジンスキー君が再た何か意味を穿違へられるかも解らんから止めました。全く拙者がムシャクシャした肝癪まぎれに、心にもない言過ぎをしましたんで、後では非常に弱りました。』

『爾うですかエ。妾もネエ、貴弟の心持は決して口で云ふやうな事は無いと知つてました。』とナターリヤは一杯に溜めた涙を掌で拭きつゝ、『貴弟も知つての通り、アノ何だから……』

姉の言葉は能く解らなかつたが、併しネフリュードフには十分其心持が理解めて染々と感じた。良人可愛しと思ふ情愛が腸の底に浸徹つてるは云ふ迄もない

が、弟を大切に思ふ同胞の情も亦尋常でないから、二人の間の紛紜は如何ほどナターリヤに取つて悲しかつたらう。

『難有う、難有う、』とネフリードフは云つたが、偶つと今がた見て來た囚徒が病死した刹那の容子を歴然と胸に浮べて、『時に今日は何を見て來たと思ひます。囚徒が二人殺されました。』

『えッ、殺されたッて？――如何して？』

『殺されました。此暑い最中に引摺出されたので、日射病に罹つて二人死にました。』

『まア、まア、飛んでもない。今日――今ですかエ？』

『今です。二人の死骸を見て來ました。』

『だが、殺されたつて貴弟は云ふが、誰に殺されたンです？』

『誰に殺されたつて、此のカン〳〵した日中に引摺出したものが殺したんで、自ら手を下さんでも殺したと同樣です、』とネフリードフは姉の云草が良人のロゴジンスキーの口調ソックリで、矢張世の中をロゴジンスキーと同じ眼で見て

ゐるのが解つたから面白からず思つた。

『先ア、どうも、』とアグラフョーナは其時二人の傍へやつて來た。

『元來吾々は渠等、不便な囚徒達が平生如何な取扱を受けてるのか一向知らんでをるが、併し之は心得置くべき事だ、』とネフリードフは更に言初した時、彼方の卓子で一杯飲つてるコルチャーギン老公爵が頭から胸へナプキンを掛けたまゝ丁度此方を顧盼いたのに眼と眼を見合はした。

『ネフリードフ君、』とコルチャーギン老公爵は聲を掛けた。『如何ぢやネ。暑氣拂ひに一杯飲らんかい。長い道中をする前には一杯飲つた方が宜エぞ。』

ネフリードフは慇懃に挨拶してから、復た姉の方を向いた。

『だが貴弟、之から何をする意なの？』とナターリヤは云つた。

『拙者の力で出來る事なら何でも仕ます。といふが實は猶だ何をして宜いか自分にも見當が付きませんが、何しろ何かしら仕なけりやならぬから、自分の力相應な事をする筈です。』

『あア、能く解りました。處で彼の衆との關係は如何する意なの？』と片頗に

笑を含みながらミッシー嬢の方を一寸つと見た。『最う落着が附いて了つたものとして濟みますかエ？』

『無論、拙者は雙方共に最う未練はなからうと信じます。』

『爾うですかネエ。妾は又何だかお氣の毒なやうな、殘念なやうな氣がするがネ。彼のミッシーさんは妾の大好きの人だけれども、けれども肝腎の貴弟が其心持なら是非が無いとしても、縱令んば貴弟方二人はお互ひに未練がないとしても、夫だからッて何も貴弟の身を縛り付けないでも……彼の何に縛り付けないでも……』と有繋に言淀みながら『貴弟は如何しても西比利亞へ行くンですかエ？』

『行くのが當然だから行きます、』とネフリュードフは膠もなく凜と答へつ、此話は如何かして止めにしたいと思つた。が、考へれば姉の心配も無理でなく、自分の挨拶振りも餘り率氣無さ過ぎるから、『何故腹藏なく姉やアグラフーナに委しく打明けて聞かせない？』と窃に腹の底に思つたが、何の氣なしに年老つたアグラフーナの顔を見ると、意氣張上、此女の面前では益々強い事を云つ

て見たかつたので、

『カチューシャと結婚する一條を仰しやるのですか。そんなら御承知の通り拙者だけは堅く覺悟を定めてます。が、カチューシャは斷乎として承知しません、』とネフリュードフは何時でも此話になると聲を慄はした。『カチューシャは拙者の義理を受けるのを欲しないで、却つて彼の境遇にをるものとしては見上げた義理を立て貫かうとしてゐます。だが拙者は、一時の意氣地と知つて甘んじて受ける事は出來んから、カチューシャは何と云はうとも、拙者は拙者の了簡で、何處までも一緒に行つて同じ艱苦を嘗め、出來るだけはカチューシャの苦勞を輕くしてやりたいと思つてます。』

ナターリヤは何にも云はなかつた。アグラフーナは怪訝な顔をしてナターリヤを見つ首を掉つた。

其時コルチャーギナ公爵夫人の行列は再び婦人室から現はれた。前後を美男の家從と玄關番とに擔がしたる椅子の上の公爵夫人は偶つとネフリュードフに目を附け、合圖をして行列を留めさせてネフリュードフを招いだ。で、情なささうな

苦なさうな體で指環を挾めた白い手を出して恐〳〵握手を求めた。

『嚴しいお暑さでムるノウ。之では身體が續きませんワ。生命が縮んで了ひますワ、』と露西亞の氣候の惡い話を二タ言三言云つてから、是非とも顏を見せに訪ねて來て呉れと誘ひつゝ、『さッ、行け、』といふ合圖をした。

『必と訪ねて下され、待つてますぞ、』と云ひつゝ公爵夫人は顧盼りざま長い顏を見せた。

で、一行は再び椅子を擔いで一等室の方へと右に折れた。

ネフリュードフは手荷物を持たした運搬夫と袋を肩に擔ぐタラスとを伴れて左へと足を向けながら、

『之は同伴の者です、』とタラスを指さして姉に云つた。タラスの物語は既くに姉に話してあつた。

二人は斯くて三等室の前に止つて、タラスと運搬夫と逸早く客車に乘込んだ時、

『三等ぢやアあるまいネ？』とナターリヤは云つた。

『いや、三等にしました。タラスと一緒です。』ネフリュードフは云つた。『最う一つお咄して置く事がある。クスミンスキー村の地所ですナ、之は尙だ百姓に與らずに置きましたから、拙者が死ねば貴姉の小兒が相續出來ます。』

『お止しよ、其樣な事を云ふのは、』とナターリヤは云つた。

『夫から地所の方は百姓に呉れて了つたにしても、其他に猶だ財產がある。拙者が死ねば悉く貴姉の小兒のものになります。拙者は恐らく結婚すまいと思ふ――縱令んば結婚したにしろ、小供は必らず出來まいから……』

『其樣な事を仰しやるもんぢやアない、』とナターリヤは云つた。が、斯うと聞いたナターリヤの包み切れぬ嬉しさは歷然と顏に見えた。

一等室の前には尙だ人立ちがして、コルチャーギナ公爵夫人の容子を覗いてゐた。

旅客は大抵乘込んで了つた。遲れた者は周章てゝプラットフォームの板張をカタ〳〵響かして驅けて來た。驛夫は今や戶を閉めやうとして頻りに旅客を促がしてゐた。

ネフリュードフはむんむとする喘れ臭い車室に入つたが、迚も居堪まれんので車室の背ろの小さな車掌臺に出て來た。

ナターリヤは流行の帽子にケープを肩に掛け、アグラフ*ーナと並んで車室の側に立ち、何か云ふ事は無いかと憶出さうとしてゐたらしかつた。

が、別れ際の常文句の『消息をして、』といふ言葉すら、兒供の時から二人して遊びごッこに言古るしてゐたが、此場合ツイ言ひそゝくれて了つた。

尤も財産問題で一寸とした話をしたのが姉弟間の柔しい人情を打破して了つて、妙に更まつた他人行儀となつて、二人ながら互に頸を絞められるやうな變な氣持がした。漸く汽車が進行し出した時ナターリヤは初めて吻と息を吐き、名殘惜しさうに首を掉りつゝ、『さよなら、さよなら、』とばかり云つた。

が、汽車が過ぎ去つて了つた時は、弟と會見した顛末を何と良人に話したものかと途方に暮れた氣色が顏に現はれた。

ネフリュードフも其通りて、元來は姉に對して極柔しく、何に由らず隔意なく打明けて相談したのが、今では姉に對うと何となく氣無精で面白くなかつたから、却て別れる方が快かつた。昔の極親睦しの姉は最う既つくに亡くなつて了つて、奇怪極まる卑劣な毛むくじやらな高慢ちきの男の奴隷が姉の身體を借りてゐるのだ。現に耻知らずのロゴジンスキーめを利益する財産相續の一條を語つた時には姉の顏が俄かに生き〳〵と元氣附いたのでも歴然と解る。と、斯う思ふと如何にも情ない心持になつた。

第四十回

ネフリュードフの乗込んだ三等の大客車は一日、日向に晒されてゐたから、車内は蒸れて非常な暑さであつた。迚も沈としてゐられぬから車室の背ろの車掌臺に出てゐたが、其處だつても根ッから涼しくなく、漸く車が動き出して停車場を外れてから、僅かばかりの風がそよ〳〵と吹いて來た。

『囚徒が二人殺されました、』と姉に答へた言葉を偶つと憶出すと共に、萬感交交湧出づる中に、今朝眼前に見た悲惨めな死骸――殊に二番目に目擊した美男の紫色になつた唇に泛べた微笑やキリッと締つた男振や青々と剃つた頭の下の小さな形狀の好い耳が驚くべきほど歴然と泛んで來た。

『殊に奇怪なは』とネフリュードフは腹の中で考へた。『見す〳〵殺されてながら、誰に殺されたのか、責任者が解らんてのは實に奇怪極まる。だが、殺されたには違ひない。本はといふと、あのマースレニコフの命令で、多勢と一緒に監獄から引出された爲だが、當のマースレニコフは頭書を印刷した公文書に拙い字で記名をしたばかりだから、自分に罪があるとは決して思つてないだらう。況

してや囚徒の健康診斷をした監獄醫は、職務を鄭重に盡して健康不健康を區別したに違ひないから、神ならぬ身の如何して今日の嚴しい暑さや、カン〳〵した日盛りを大勢の喘れに蒸されて行く危險を知るわけがあらうや。然らば典獄は？　典獄は唯男女の囚徒若干を何時何日に送出せといふ命令を奉じて行つたばかりだ。護送士官とても其通り、或る場所から囚徒を請取つて他の場所へ引渡すだけの役目を行う爲に例の通りに引率したので、現に目擊したやうな如此な强壯な人間が途中で堪へられなくなつて斃れ死にしやうとは夢にも思はなかつたらう。すれば誰にも罪はないのだが、併し渠等は矢張殺されたのだ。自ら罪ありと認めて責を引く事の出來ない人達に殺されたのだ――

『と云ふは畢竟――』とネフリュードフは考へた。『知事と云ひ監獄吏と云ひ警察官と云ひ、渠等は人間當然の人情が全く必要でない境涯が有ると思つてるからで、マースレニコフにしろ典獄にしろ護送役人にしろ同じく人間であるからは全然人情を知らぬわけは無い。若し知事や監獄吏や警察官でなかつたなら、如此なカン〳〵した日中に多勢の人間を引出さうてには二十遍も首を捻つて躊躇

したに違ひない。愈々引出した處で必ず途中で二十遍も休息さしたに違ひない。若し又弱つて呼吸の喘むやうな者が出來たなら必ず日蔭に入れて水や藥を呉れて十分手當をしたに違ひない。夫でも不慮な變事が起つたなら必ず悲んで止まなかつたに違ひない――

『處が、渠等は一向平氣で、自分達が慈悲を加へないばかりか、他のものがヤレコレと不便がつて世話を燒くのをさへ嚴ましく叱り付ける。渠等の囚徒に對するや人間として視ず、且人間の義務を盡さうとしないで、唯渠等の職務にのみ骨を折つて、官吏の職務を以て人間の道德關係以上だと思つてる。之だ。之だ。之で萬事が解釋される。吾々は縱令片時にせよ、縱令或る除外の場合にせよ、吾々同胞に對する愛以上に大切なものが世の中に有るとでも思はなければ、無責任に行つて退けてシカモ平氣の平で冷ましてゐられる罪惡が成立つわけが無い。』

と種々に考込んで前後を忘れてる中に、天氣が何時の間にか變つて來た。斷れ〳〵の雲が低く走つて度々日を隱したが、其中に薄墨色の雲が西の空から段

々と廣がつて來たかと思ふと、既う遙か彼方では夕立が畑や森に落ちてゐるらしく、空氣は段々と濕ッぽくなつて、折々電がピカ〳〵して、汽車の響と共に雷がゴロ〳〵碾めき出した。其中に雲は段々と近くなつて、風のまに〳〵ポタッポタッと雨が落ちて來た。ネフリードフは車掌臺の片端へ行つて、冷々した新らしい空氣を呼吸し、暫らく雨に渴えてゐた穀類や乾き切つた地面の臭がする中に立つて、畑や、森や、黃色の稞麥の畑や、青々した燕麥の畑や、青味掛つた黑い蔓に花の咲く馬鈴薯の彼地此地に見えるを餘念なく眺めた。萬物皆雨に濡つて、綠は愈々綠に、黃色は愈々黃色に、黑は愈々眞黑に色を增して來た。

『最う一と降だ。』とネフリードフは此の夕立の惠に濡ふ畑や田を眺めて嬉しさうに云つた。が、夕立は唯つた一としきりで、雲の一部分は雨となつて落ち一部分は散じて了ひ、日は再び雲間から現はれて葉末に宿る露や水溜にギラ〳〵と反射し、東の空には美くしい虹が低く現はれて、殊に菫色が一と際鮮かに見えた。

『さア、何を考へてゐたのだ、』とネフリードフは自ら質問した。丁度天氣の急

幾が一段落附いた頃、汽車は今、兩側の切立つたやうな開鑿路の間を進行する處だ。

『オヽ、爾うだ。知事とか典獄とか警察官とかいふ官吏連中の事を考へてゐたのだ。個人としては渠等も亦大抵は善人だが、役人となると直ぐ殘酷になる。』

と考へつゝ、偶つと憶出したは、獄内の容子を話した時、平氣で聞流しにしたマースレニコフの冷淡さ加減、停車場へ行く途上に或る囚徒が馬車に乘りたいと云つたのを權もホロヽに叱り飛ばしたり、現在臨月の女が車内で呻々唸つてるのを耳にしながら人が忠告したのも受付けないで平氣な顔してゐた護送士官の無情殘酷。渠等とて萬更人情を知らないではあるまいが、畢竟役人をしてゐるばッかりに、極解り切つた普通の人情さへ全で頭腦に入らんのだ。

『渠等は役人であるお庇に普通の人情さへ解らぬ。丁度石を敷いた道は雨が降つても水が浸込まないのと同樣である。』とネフリュードフは恰も左右の斷開いた壁に種々な色の石を奇麗に壘んだ、其上を水がドッドと流れて一向浸込まないのを見て、腹の中に考へた。『斯ういふ切落しには石を壘んで水を流すのが土工

上必要かも知れんが、併し此上に生えてる圃物や菓樹や草や木はお陰で濕りを得ないのを悲しんでるかも知れない。人間とても矢張此通り、知事とか典獄とか警察官とかは法治上必要かも知れんが、人間の一番大切な人情卽ち人に對する愛憐の心を職務の爲に缺いで了うといふは實に情ない事だ。ツマリ斯ういふ連中は本來法律で無いもの（卽ち人間が治者の便宜上作つたもの）を法律として認めて、神が人間の心に刻み付けた永劫不磨の眞正の法律を却て全で認めてをらんのだ。之だから渠等と一緒にゐると妙に壓へつけられるやうな氣がするので、渠等は實に恐るべしだ。盜賊よりも更に一層恐るべしだ。左に右く盜賊は若干か物の哀れといふ事を知つてるが、彼等は全で知らんのだ。石が水を流して了つて草木の養ひとするのを知らんのと同樣だ、ブガチェーフやラージン（日本なら石川五右衛門とかいふが如し）を大惡黨だと云つて恐れるが、官吏の恐るべきは寧ろ渠等に千倍過ぎてをる——』

『假りに心理學の問題として見たなら、一個人としては極親切な人情のある信仰の厚い篤實な基督敎信者たるものが、如何して這般な恐ろしい罪惡を犯しながら平氣で澄まし込んで自ら罪あるを認めないだらうか。之を解決するのは何

でも無い。今日行なはれてる通りに、知事となり典獄となり警察官となりさへすれば宜いので、渠等は官吏を以て吾々の同胞たる人間を同胞と見ないで物品として取扱う事が出來る一種の職業であると信じ、此職務の爲にした行爲の結果に對しては個人の責任は全く無いものと信じてをる。斯ういふ條件が無ければ現在目前に見たやうな殘酷無慈悲が決して行はれる筈がないので、ツマリ渠等は世の中に人間同士が愛情なしに交渉し得る境涯があると思つてるから斯うした了簡になるのだが、這般な境涯が決して有るわけが無い。若し物品に對してなら、例へば木を切るとか煉瓦を燒くとか鐵を鍛へるとかなら愛情がなくても交渉出來やうが、人間同士の間では愛情がなくては一日たりともをられない。丁度蜂に對しては始終用心しなければならぬと同樣で、若し迂濶り油斷して蜂に近づいたなら、ツイ蜂を殺して了うか、でなければ此方が蜂に螫されて了う。人と人との間も其通りで、人類相互の愛情が人生の基礎である以上は愛情がなくては何事も出來ない。勿論、働かせる事なら少と強でも出來やうが、愛情の無いものに強に愛情を持たせやうとしたッて迚も駄目だ。と云つて、愛情が無

くても人間同士の交渉が出來るといふ理窟は決して立たぬ。殊に人から何物か求めやうとした場合は猶更である。夫だから萬が一にも愛情を知らないといふ人があつたなら、願くは品物なり或は自分自身なり或は何なりと自分の好きなものだけと勝手に暮して貰ひたい。斷じて人間交際を止めて貰ひたい。腹が減つた時物を食ふのは害がないのと同樣に、愛情をもて人に交はる時は何等の害がないばかりか十分な利益がある。但し愛情なしに人に交はる、例へば昨日自分が姉婿に對する態度のやうであつたなら、其苦痛や恐らく限りなからう。現に我が既往の生活が良く證明してをる。其通り、其通り、眞實だ、眞實だ！』

とネフリュードフは腹の中で反覆繰返した。

夕立の一としきりで燠くやうな苦熱を洗ひ去つた涼しさと、長らく鬱結した疑問を一時に解釋し得た自覺とで、俄に皆々しい快い心持になつた。

第四十一回

ネフリュードフが乘込んだ車室は半分だけしか乘つてゐなかつた。何れも之も雇男や百姓や職人や屠獸者や猶太人や小商人や職人の女房や兵隊ばかりであつたが、其中に露出しの腕に腕環を穿めた奥さん風の年增と若い娘と徽章付きの大黑帽を被つた嚴かしい面をした官員風の紳士だけが目に立つた。何れも席に就くまではガヤ〳〵と喧ましかつたが、漸つと座が定まると靜かになつて、獨葵の種を嚙潰したり煙草を燻かしたり饒舌つたりしてゐた。

タラスは通行路の右方にネフリュードフの分までの席を取つて、相對ひに座つた釦紐なしの小倉服を着た岩壁作りの男と頻りに興に入つて愉快らしく話し込んでゐた。此男は新たに口が出來て田舍へ行く植木屋であるのが後で解つた。

ネフリュードフはタラスの傍へ行かうとして、通行路の中途に偶つと佇立ると、更紗の服を着た白髮の村年寄めいた老爺が、ツイ其傍で百姓服の若い女と頻りに話してゐた。此女の隣席には矢張百姓服を着て百姓風に頭を手巾で包んでる七八歳の小さい女の兒が限界無しに獨葵の種を嚙潰してゐた。

老爺は偶つと顧盼いてネフリュードフを見ると、衣服の裾を片寄せて隅の方へ小さくなつて、明るい場所を空けつゝ頗る慇懃に、

『此方へお掛けなせエまし。』

ネフリュードフは禮を云つて席に就くと直ぐ、女は再び前の話を續けた。

女はモスコーに稼いでる亭主に會ひに行つて、今、村へ歸る處ださうで、久し振で亭主を嬉しがらしたといふ惚け咄を話してゐた。

『お精進の時にも會ひに參りやしたが、神樣のお陰で復た會つて來やした。クリスマスの時にも復た行くべえと思つてやす。』

『それが宜エとも、』と老爺はネフリュードフを見ながら、『あんでもハア煩セエ位エ會エに行つた方が宜エとも。若エものは一人でおッ放して置くと碌な所爲はしねエからノウ。』

『何の、お前さま、俺ア良人に限ッて其樣な心配ぶつ事ア要りましねエ。夫りやア夫りやア、爪尖ンばッかりだつて馬鹿アする事アねエだに。恰でお前さま、娘ッ子みてエに儲けたお金は一文殘らず家へ送つて來やすダ。爰に居りやすが

娘でムりやすが、此子の顔さア見るのを何よりも樂みにしてをりやすダ、』と云ひつゝ女は莞爾りした。

小さな女の兒は獨爽の種を嚙潰しては殼を吐出しつ、阿母の咄を聞いてゐたが、宛も北咄の通りだと云はぬばかりに沈着いた利發らしい眼で老爺とネフリュードフの顔を等分に見た。

『北樣に固エけりやア お前さんは幸福ぢや、』と老爺は云つた。折から彼方に腰掛けてる職人らしい夫婦者の、亭主が仰向いて壜の口からウォツカの喇吧飲をしてゐる傍で、女房が壜の袋を持つて眤ッと見守つてゐるのを頤で指しつ、

『お前さんの御亭主も矢張あれをやるけエ？』

『良人は酒も飲みましねエ。茶碗も喫りましねエ、』と女は老爺に向つて、復た亭主の自慢が出來るのを嬉しがりつゝ、『眞實にお前さま、良人みてエな堅固造は滅多とありましねエや、』と今度はネフリュードフに向つて、

『如斯いふ人でムりやす。』

『そりやア先ア何よりか一番宜エ事ぢや、』と老爺はウォツカの喇吧飲をしてゐる

職工らしい男を見ながら云つた。

すると丁度、男は酒を喫み了つてから女房に德利を渡すと、女房は笑ひながら合點して今度は自分の唇に德利を當てた。で、ネフリュードフと田舍老爺の二人が自分達を見てゐるのに氣が附くと、男はネフリュードフに向つて、

『へッへッ、旦那。旦那は俺ちが飲つてる處を見やした子。俺ちが飲つてる處は誰でも見てやすが、俺ちが稼いでる處を知つてる奴は一人も無エ。之でも俺ちは自分で稼いだ錢で酒を喫つちやア、嗅アばッかりを大切がつてるお目出度エ野郎でがさア。』

『爾うかい、』とネフリュードフは何と云つて可いか解らぬから答へた。

『全くでげす、旦那。俺ちの嗅アは豪エ女で、俺ちを大切にしてくれやすから、俺ちも嗅アを可愛がつてやりやす。なアお前、爾うぢやねエか、マーウラ？』

『さア、お前さん、飲んでお了ひよ。妾は最う澤山、』と女房は亭主に德利を戻しつ、『何をお前さんは下らない事を云つてるンだネ。』

『此通り、ホラ御覽なせエ。親切な可愛い奴でげせう。眞實に親切者でがさア。

之で時々、唐突けに油の切れた車のやうなキイ〳〵、聲をお出し遊ばしやアがる。なア、マーウラ、其通りに違ェねェナ。』

マーウラは笑ひながら微醉氣味で手を振り上げつ、

『復たお株が初まつたよ。』

『其通りぢやねェか。なア旦那、俺ちの噂ア位ェ温和しい親切者はありやせんが、之で旦那、手綱が間違つて尻尾の下へでも當つたら大變でげす。忽ち跳上るッて大騒きが持上りやす。眞個でげすせ。はッはッ、旦那、眞平御免ねェ。些とお酒が利いて來やしたからナ。ドリヤ御免を蒙むり羽織か、』と云ひつゝ轉ッと横に倒れて、莞爾々々笑つてる女房の膝を枕に睡支度をした。

ネフリュードフは暫らく田舍老爺の傍に腰を落付けて、老爺の身上咄をするのを聞いてゐた。此老爺は寵職人で、五十三年間稼ぎ通して數の知れない程澤山な寵を作つた。で、そろ〳〵隱居をしたくなつたが、何分樂が出來なかつた。今度はモスコーへ悴の奉公口を捜しに出掛けて今が歸途であるさうだ。此咄を最後まで聞いてから、タラスが取つて置いて呉れた自分の席へと戻ると、

『さッ、お掛けなせェ。袋は此方へ片附けやせう、』とタラスと相對ひの植木屋は到つて心安だての調子でネフリュードフの顏を見た。

『些とべェ窮屈でも密着く方が宜かんべェ。お互は最う友達交際だもの、』とタラスは笑ひながら羽毛でも入つてるかと思はれるやうな輕い袋を窓の方へ持つて行き、

『之で樂に座る場所が出來やした。尤も座れねェけりやア立つてる分だ。腰掛の下へ潜ぢり込んで轉がつても俺らア窮屈べェ駄目ェ吐く事は無ェだよ、』と云つた時のタラスの顏は嬉しさうに莞爾々々してゐた。

タラスは酒を呑まないと口が利けない。酒さへ飲めば思ふ言葉がスラ〳〵と出て何でも言へると常から云つてゐたが、全く其通りで、覺醒の時は何時でも寡言だが、酒を呑み出すと——尤も偶さかの祝儀不祝儀か何かでなければ酒を飲む事は決して無いが——飲みさへすれば必ず上機嫌で饒舌り出す。到つて淡泊に心置なく柔しい愛嬌のある碧い眼をしては始終莞爾ついてべラ〳〵と饒舌り立てる。

丁度今日は此御機嫌の日だ。ネフリードフが來たので話の腰を折られたが、袋を片付けてから座に戻ると、嚴重な兩手を膝の上に組合せつゝ、植木屋の顏を眺と見ながら復た話の續きをした。タラスが此親眺になり立ての友達に話してるのは女房の身の上咄で、女房が西比利亞へ送られるやうになつた犯罪の顚末、自分が其踵に隨いて行く氣になつた一伍十什を委しく話してる處だ。ネフリードフも尙だ詳しい話を知らないから、タラスの咄を面白く聞いた。

丁度今話し掛けたは毒殺騷きが發覺してフョードーシャの仕業と解つた處で。

『俺がいゝんま話してるナア俺らア家の紛紜でがんす、』とタラスはネフリードフに向つて馴れ〳〵しい粗末な口調で、『此樣な思遣りの深エ仁に會つたのも何かの因緣だッペエから、之までの騷ぎを洗エざれエ咄してる處でがんす。』

『左樣か、』とネフリードフは云つた。

『處でお前樣、其一件が露顯ッちまやした。阿母は太く腹ア立つて、毒饅頭を證據に警察へ訴へるべエ騷ぐだ。阿爺は人が好エだから、先ア〳〵騷ぐ事ア無エだ、俺がの嫁ッ子は尙だ孩兒で、あにも知んねエだから埒辨のウしてやれ、

と阿母を和めやしたが、阿母は頭を振つていゝかな事詰きましねエだ。――此樣な方圖も無エ惡戲をされても眼を閉つて放擲らかしといたら、いんまに家內中が油蟲見てエに捻り潰されるも知んねエだ――と、到頭お前樣、警察へッ走つて訴エたゞから、巡査が直ぐ出張つて俺らア女房を拘引てくといふ家エ騷ぎが持上りやした。』

『夫からお前さんは如何してたエ？』と植木屋は訊いた。

『俺やハア腹ン中が轉覆返る樣に轉げ廻つて、留度なく反吐を吐く。舌が硬くなつて動かなくなる。最う駄目だ、最うおッ死ぬべエと思やンした。其間で俺らア阿爺は荷車に牡馬を付けてフョードーシャを乘ッけて警察から裁判所へ伴れて行きやした。處でお前樣、フョードーシャは初手から覺悟を定めてやしたから惡びれもしねエで、毒藥を手に入れた事から毒饅頭を製エた顚末をべラ〳〵ラ白狀しちまやした、其樣な大それた事をあんで仕出來したッて、判事樣が訊かつしやると、フョードーシャの返答が、「俺ハア那樣な男が大嫌エだから、那樣な奴と一緒に暮すよか西伯利亞さア行つた方が宜エだ、」と、斯う返答打つた